
袁紹的惡夢行

青蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袁紹的悪夢行

【Nコード】

N4661W

【作者名】

青蓮

【あらすじ】

かつて2ちゃんねるの「袁紹の一日」スレで連載していたホラー小説の転載です。三国志を知らない方でも、ホラーが好きな方ならお楽しみいただけると思います。

三国志の群雄の一人、最も天下に近いと言われていた名門袁家の当主、袁紹。彼は生前の精神的苦痛から魂が割れてしまい、冥界に行けず彷徨い続ける。自分を救ってくれる人を求めて、次々と縁の深い人物を訪ね、行く先々で霧に包まれた悪夢がこぼれ出る。妾腹の子として育った陰惨な過去、歪んだ家族から生まれた狂気、己と

最愛の母を裏切りながら享受した栄光の代償：それらは恐怖の異界と怪物に変わり、招かれた者に牙をむく。陰鬱な旅路の果てに、袁紹は救いを手にすることができるのか。

ブローグ 袁紹く霧の中にて（前書き）

三国志知らなくても人物の名前が読めれば普通のホラーとして楽しめるはず！なので登場人物の読み方と説明は最初に登場する話の前書きに置いておきます。

逆に三国志が好きでも、血とかクリチャーとか猟奇が嫌いな方はよしたほうがよろしいかと。

袁紹・本初 エンショウ ホンショ 生年？ 没年202年

後漢の名門、袁家の当主であり一時は河北を支配して天下に最も近かった男。曹操に敗れて天下への夢を断たれ、心労から病死する。

名家の当主ということでお坊ちゃん的に描かれがちだが、エンジュツ実は妾腹の子であり、嫡腹の異母弟である袁術とは対立していた。エンタン袁譚、エ袁熙、エンショウ袁尚という三人の息子がいる。

ブローグ 袁紹く霧の中にて

気がついたら、城は霧に没していた。
寒々しく、先の見えぬ霧に……

私は、どこかでこの感覚を知っている……？

彼は、ぼんやりとそう思った。

毎日毎日、怯えて過ごしていた。
本当の母と引き離され、継母に邪険にされて育った。

なるほど、娼婦の腹から生まれたから、紹というのねえ。

明日、何をされるか分からなかった。どんな恐ろしいものが出てくるか、何も見えなかった。

それでも初めに生まれたから本初だって？
ふざけるんじゃないわよ！！

頭に響く、ぼんやりとした罵声。
悪夢が、霧の中にこぼれ出る。

「私を助けて！」

袁紹は叫んだ、しかし助けしてくれる者はいなかった。
みんな、継母の持つ名家の威光を恐れて手を出さなかった。

継母とはいえ、孝行すれば必ず分かってくれます。

割り切って、捨扶持だけでももらっとけばいいでしょう。

こんな家の子に生まれて何が不満なんだ、おまえは外を知らないからそんなわがママを言うんだよ。

きれいごとばかり言って、私の体に刻まれた傷には目もくれずに。

でも、今は私がその名家の威光を着る者になってしまった。

今こうして怪物に襲われているのは、その罰なんだろうか？

血のような体液を撒き散らすミミズかイモムシの化け物。

貪欲に肉を貪る犬の化け物。

顔面に板を貼り付け、ハリセンボンのように釘を打たれたエプロン姿の化け物。

皆、私が憎いのだ。

疎ましくて、殺したいのだ。

そうすれば、彼らは楽になれるかもしれないから。

噛まれた瞬間に、彼らの意思が感じられた。

「楽になりたい、楽になっていい、楽になればいい。」

あれ？

体を引き裂かれる、痛み……しかし、違和感はほとんどない。ああ、そうか……私はとづくに、引き裂かれていたんだから。

袁紹は白い石畳を赤く染めて、その場に崩れ落ちた。

プロローグ 袁紹と霧の中にて（後書き）

あくまでプロローグなので、まだ具体的な進展がなくてすみません。
次からは、悪夢に招かれた人物との話に移っていきます。

公孫？易京楼にて（１）（前書き）

ついに袁紹が縁の深い人物を悪夢に招いて、本編の始まりです。
最初は袁紹と河北で争って敗れた公孫？、あまり知られていない人物なので紹介を置いておきます。

コウソンサン ハクケイ
公孫？・伯珪 生年？ 没年199年

後漢末期に河北の一部を支配していた豪族で、袁紹と長いこと戦い続け、一時は優勢であったが押し返されて敗れた。武人としては優秀だが、政治は下手だったらしい。最期は易京楼という巨大な城砦を作って籠城したが、袁紹軍が地下道を掘って侵入したため落城、妻子を殺して自害した。一時的に劉備を配下にしていたことがある。

公孫？易京楼にて（1）

「はあ、はあ、何とか助かったか。
しかし、ここはどこだ？」

公孫？は一人、霧に包まれた城の中を歩いていた。
部下はおるか、人が一人も見当たらない。

確か、自分は袁紹軍に攻められて、この易京楼で籠城していたはず。

それからどうなったのか……考えようとしても記憶がはつきりしない。

この濃厚な霧のように、肝心なところが思い出せない。

（うーむ分からん、袁紹軍は引き上げたのか？
それにしても、静か過ぎる）

とにかく誰か人を見つけなければ……公孫？は市街地に向かって歩いた。

しかし、行けども行けども人の姿はない。

「だ、誰かおらぬのかぁ！」

公孫？は不安にかられて叫んだ。

その時、霧の向こうにちらりと人影が見えた気がした。

「あっおい待て！」

公孫？が呼びかけると、その人は立ち止まって振り向いた。

まだ小さな男の子だ。年は、十歳くらいだろうか。

（子供か……事情は聞けぬが、放置する訳にもいくまい）

公孫？は少し落胆しながらも、少年を招き寄せた。

それが悪夢の使者であるとも知らずに……。

袁紹は血と錆と膿にまみれた世界から、それを見ていた。

ほう、公孫？は”私”を見つけたか。

とりあえず、第一段階はクリアした。

子供を放置したり攻撃したりするようでは話にならない。

しかし、だからといって望む結果が出るとは限らぬぞ。
人はたいてい、裏切るものだから。

少年はかすかに憂いを帯びた笑みを浮かべて、公孫？に歩み寄った。

「君、何が起こったか分かるかい？」

公孫？はありきたりな質問を子供に投げかけた。

少年はこくりと首をかしげる。

「気がついたら、真っ白で……。」

ねえお侍さん、助けて。犬が追ってくるの」

「犬？」

公孫？が耳を澄ますと、確かにどこかで遠吠えのような声が聞こえる。

（おかしいな、籠城のために犬を飼うのは禁止したはずだが……？）

公孫？は首をかしげた。

家を一軒一軒訪ねさせたのだから、犬は一匹もいないはずなのだが。

しかし、いるものは駆除しなければならない。

公孫？は未だに日常の考えに囚われていた。

（それに、子供を襲う犬を放ってはおけぬ）

公孫？はちらりとすがってきた少年を見た。

ふしぎな事に、その顔をどこかで知っているような気がした。

「おぬし、どこかでわしに会ったことはないか？」

公孫？は少年に聞いた。

すると、少年はおかしそうに笑って答えた。

「当たり前だよ、お侍さんはこの城のお殿様だもの」

民の一人として、どこかで顔を合わせたのかもしれない。
少年が言ったのはそういう意味だろう。

しかし、公孫？はどうも釈然としなかった。

もう少し訊ねてみようと思ったが、その時間は与えられなかった。

すぐ近くで、犬の唸り声が聞こえたのだ。

「む、こっちか！？」

公孫？が振り返ると、霧の向こうからのっそりと何かが近寄ってきた。

霧の向こうに現れた影は、大型犬のものだった。

しかし、その姿は犬とはとても思えなかった。

皮がびりびりに破れて醜くはげ、赤黒い血肉が露出している。

しかも体に有刺鉄線が巻きつけられ、根元はなんと目から出ている。

さらに、普通の犬ではあり得ないような大きな歯をぎらぎらさせている。

明らかに、公孫？が思い浮かべた犬ではなかった。

「助けてえ！！」

少年が青くなって公孫？にしがみつく。

公孫？は剣を抜いて、目の前の怪物と対峙した。

（な、何なのだこれは……！

このような恐ろしい生き物は、生まれてこのかた見たことがないぞー！！）

犬の怪物は不気味な唸り声をたてて公孫？に飛び掛った。

「グアオー!!」

「せええい!!」

公孫？の振り下ろした剣が怪物の頭を切り裂く。

キャインと情けない声をあげて、怪物は地面に倒れ伏した。

体をざつくり切られても、怪物はまだ唸り声を立て、びくびくと蠢いていた。

公孫？は怪物を踏みつけ、急いでとどめを刺した。

「な、何なのだこの生き物は……!!」

公孫？は思わずつぶやいた。

自分の城の中に、こんなものがいるのが信じられなかった。
いや、この世にこんなものがいるのが信じられなかった。

公孫？はなぜこんなものがいるのか必死で考えようとした。
しかし、答が見つかる訳がない。
公孫？はこれまでの記憶すらはっきりしないのだ。

確かなのは、袁紹軍に攻められて籠城していたことだけ……。
それを思い出したとたんに、公孫？は一つの答を思いついた。

「そうか、袁紹のしわざか……!!」

思えば、袁紹は悪辣な男だ。

あの男なら、身の毛がよだつような生き物を放つような暴挙に出

てもおかしくない。

（つまり、袁紹はこいつを何らかの方法で城内に放ち、住民はそれを恐れて避難したか袁紹に降ってしまったと。

……なんとひどい男だ！！）

公孫？は一瞬でそう決め付けて、憤怒にかられた。

袁紹は血と膿と錆にまみれた世界で、少し顔をしかめた。

全部が正解ではないが、あまり間違っではないことが腹立たしかった。

ふん、まさかあのような愚かな男に気付かれるとはな。

偶然とはいえ、気分が悪い。

自分がこの世界に何をしたか、袁紹にもそれは分かっていた。

公孫？易京楼にて（１）（後書き）

まず名前が読みにくいですね、すみません。
でも本名がこれだから仕方ありません。

書き溜めてあるところまでは、早めに投稿していきます。

公孫？易京楼にて（2）（前書き）

今回袁紹が招いた人物、公孫？は三国志の中でもかなりマイナーな武将です。しかし、袁紹の戦いの履歴を語るうえではなくてはならない人物でしょう。

公孫？は肥沃な土地を欲した袁紹に騙されて利用されたり、その過程で弟を殺されたりして袁紹にかなり恨みをもっています。そんな彼を袁紹はどのような気持ちで悪夢に招き入れたのか…続きは本文で！

公孫？易京楼にて（2）

袁紹の感情の揺れに反応したのか、公孫？のそばで少年が泣き出した。

「うつつええーん！！」

やだよお、こんなのに殺されたくないよおお！」

公孫？はビクリとした。

こんな状況で泣かれたら、あの怪物の仲間が集まってくるかもしれない。

「こ、こら黙れ！」

わしを殺す気か！？」

公孫？は慌てて少年を黙らせようとした。

しかしその間にも、近くの路地からまたあの化け犬が出てくる。

公孫？は苛立った。

「黙れ、黙らぬか！！」

ええい、こんな足手まといはもう知らぬわ！！」

少年を突き放して転がしたとたん、公孫？は妙な既視感に襲われた。

自分は以前にも、こんな風に味方を拒んだことがある……？

助けに行つてはならぬ！

五百の兵を救うために、千の兵を失うことになるぞ……！

そうだ、城の外で袁紹軍と乱戦になって引き揚げた時に、袁紹軍を入れぬために兵の一部を閉め出したんだった。

損害が増えると分かっていたいながら、私情に流されて助けに行きたいとすがった部下の顔が脳裏に浮かぶ。

記憶が戻ったのはうれしいが、これは不快な思い出だった。

公孫？は腹立ち紛れに少年を犬の方に蹴飛ばした。

（こういう奴がいるから、事態が悪い方になってしまうのだ！）

助けてと叫ぶ少年に背を向けて、公孫？はその場を後にした。

背後から、悲痛な悲鳴が聞こえた。

だが公孫？にとつては、それすら腹が立つだけだった。

おぞましい犬の鋭い牙が、少年の体を引き裂く。

ああ、痛い、苦しい……。

だけど、違和感はない……。

楽になれと急かす怪物を見上げながら、少年は悲しげに笑った。

やつぱり、あの人では私を助けられないね。

ちよつと期待したのに……

まあ、助けてくれる人の方が珍しいことくらい、もうずっと前から知っていたけど。

少年の体から流れ出した血が、地面をつたのように這う。

少し広がるとそれは煙のように消えてしまい、少年の体も消えてしまった。

あのような男は、さつさと地獄に落としてしまおう。

血と膿と錆に埋もれた世界で、袁紹は決意した。

公孫？は、突然悪寒のようなものを感じた。

逃げなければ！

本能が叫ぶ。

さつきより空気が重く、体にのしかかってくるようだ。
武人として磨き上げられた勘が、良くないことが起きると言っている。

突然、周りの空気が変わった。

気がつけば、さつきは静かだった霧の向こうから不気味な呻き声が聞こえる。

（な、何が起こった！？）

とにかく、城から脱出した方がよい！）

恐怖に急かされるように、公孫？は城の門に向かって走った。

突然、目の前に人影が現れた。

先ほどはあんなに呼んでも返事すらなかったのに。

（人、いや、これは……！！）

霧の向こうから現れたその姿に、公孫？は立ちすくんだ。

それは明らかに、禍々しき闇から這い出したものに違いなかった。

そいつは人の形だけはしていた。

しかし肌は腐ったようにぶよぶよとたるんで、明らかに生きて
いる色ではない。

しかも顔面に血みどろの板が貼り付けられ、釘が打ち付けられ
ている。

服装は召使のようで、妙に上品なのが生々しい。

手には、その上品な衣裳に不釣り合いな棍棒が握られていた。

（これは……！）

公孫？は背筋に気味の悪いなにかが這い上がる思いだった。
さっきの犬はまだ、怪物だと割り切れる。

しかしこの人形はどうだ。

幸い顔は板を打ちつけられて見えないが、かすかに息遣いのよ
うなものが聞こえる。

まるで自らも疲れきったように、足を引きずって近寄ってくる。

気が付けば、人形の怪物は前と横から二体迫っていた。

（やるしかないか！）

公孫？はすらりと剣を抜き、まず横の一体に斬りかかった。
肩から胸を両断して、一撃で致命傷を負わせる。

人を斬る罪悪感など、公孫？は持ち合わせていない。

気に食わないものは全て、こうして切り捨ててきたのだから。

（よし、いい調子だ！）

横の一体を始末すると、すぐ前の一体に斬りかかる。

頭から斬り下ろしてから竹割りにし、公孫？はあっという間に二体を片付けた。

しかし、歩き出そうとした瞬間、足に鋭い痛みが走った。

「な、何だと！？」

倒したと思った横の一体が、足に錐を突き立てていたのだ。

「くそが！！」

公孫？は慌てて剣を振り下ろし、怪物にとどめを刺した。

しかし……これはひどくやばい気がする。

もしこれ以上強力なものが出たら、対処できる自信はない。

（早く城から出た方がいい！！）

公孫？は恐怖にかられて、一目散に城門へと走った。

公孫？易京楼にて（2）（後書き）

もうお気づきの方もいらっしゃると思いますが、この小説のステージはサイレントヒルをモチーフにしています。

一人の悪夢から始まり、やがて異世界や怪物が顕在化して他の人間を巻き込んでいく…そして巻き込まれた人間によって、元にいる人間に変化が起こる。大まかに言えばそんな流れです。

公孫？易京楼にて（3）（前書き）

話の流れの都合で、今回は少し短いです。

だいたい1000字〜2500字くらいを一部として投稿していますが、内容の切れ目によってもう少し幅があるかもしれません。

公孫？易京楼にて（3）

城門にたどり着いて、公孫？は愕然とした。
門がどうしても開かないのだ。

門のつかえ棒が、錆で塗りこめられたように固まって、いくら力をこめても動かない。

（な、なぜ開かぬ！？）

剣で壊そうとしても、傷一つつかない。
むしろ剣の刃が少し刃こぼれしてしまった。

背後から、また唸り声とも呻き声ともつかない嫌な響きが聞こえる。

またも怪物が現れたのか。

（こ、これでは殺される！！）

公孫？はじわりと恐怖にかられていった。
霧の向こうで正体が見えない事が、余計に恐怖をあおった。

（な、何とかして城から出なければ！）

公孫？は城壁に沿ってがむしゃらに走り出した。
すると、いくらも行かないうちに、穴があった。
地面にぽっかりと、真っ暗な口を開けている。

入るべきか止めておくべきか……。

公孫？は迷った。

まず頭に浮かんだのは、これが袁紹の罠ではないかということ。それに、自分はこのような穴を見たような気がする。

穴から、袁紹軍の兵士が止めどなくあふれてくる。

彼らが火を放ち、城は炎に包まれ、追い詰められた自分は……。

突然頭に浮かんだイメージに、公孫？は思わずよろめいた。

それは、まぎれもなく敗北の記憶だった。

いや、記憶のようにリアルなイメージだった。

この内容は、素直に記憶と認める訳にはいかない。

（もしこれが事実なら、わしはどうして今生きているのだ！？）

公孫？は必死で頭の中の悪夢を否定した。

何が何でも否定しなければ、生きていられなかった。

とにかく、今は逃げる事だ……。

公孫？は眼前の穴に視線を落とした。

もし今の記憶が正しければ、この穴は城外に通じているはずだ。

ここにいても事態が好転するとは思えないし、だめならまた戻ってくればいい。

「ええい、ままよ！」

公孫？は意を決して、穴に飛び込んだ。

血と膿と錆に埋もれた世界で、袁紹はほくそ笑んだ。

かかったな、公孫？め！

もうすぐ、あの愚かな男が穴を通ってこちらにやって来る。
悪夢で満たされた、こちら側に……。

だいぶ痛い思いをさせてもらった。
たっぷりお返しせねば。

べとべとに血糊がついた剣を片手に、袁紹は歩き出した。

公孫？易京楼にて（3）（後書き）

扉が開かなかったり、道が崩れていたりしてルートが限定されて
しまうのはホラーの王道ですね！

公孫？～裏易京楼にて（前書き）

サイレントヒルでは異世界へは穴を通って行くことが多いですが、この話にも自然な形で穴を登場させることができました。

袁紹がこの城を落とす際に、地下道を掘って幾重にも築かれた城壁を無効化する作戦をとったからです。これだけ防御しておけば大丈夫と思っていたところで、穴から大量の敵兵があふれだしてきたのですから、公孫？にとっては確かに悪夢だったでしょう。

公孫？～裏易京楼にて

公孫？は穴の中をひた走った。

飛び込んだ穴は、思った通り地下道のような暗い地下道の先に、光が差し込んでいる。

（おお、出られるぞ！）

公孫？は喜んで穴の出口から這い上がった。

そこそが、二度と出られぬ悪夢の罠だとも知らずに……。

穴から出て体についた土を払って、公孫？はぐるりと周りを見回した。

「な、何だこれは！？」

外に広がる景色は、先ほどの場所とそっくりだった。

霧にかすむ市街地、背後には城壁……霧のせいで、完全に同じかどうかは分からないが。

しかし、これは有り得ないと公孫？には分かった。

自分はこの城を幾重もの城壁で覆ったが、市街地があるのは一番中だけのはずだった。

有り得ないのはそれだけでは無かった。

空が暗く、夕闇のように赤く染まっている。

霧が重苦しく、ねっとり粘りつくように感じる。

それに……一歩踏み出すと、市街地が骨組みを露にした廃墟のようになっていた。

似ているようで、明らかにさっきの場所とは違う。

（こ、これはいかん……！！）

公孫？の背中を冷や汗が流れた。

ここの気味の悪さは先ほどの比ではない。

まるで、世界そのものが呪われているようだ。

（これはだめじゃ、早く逃げなければ！）

出てきた穴に入ろうとして、公孫？は思わず悲鳴をあげた。

「げえっ！？」

驚いたのも無理はない、つい今しがた出てきた穴に土がつまり、埋まっていたのだ。

自分が出てからまだ一分も経っていないのに、音もなく穴が埋まってしまった。

（しまった、退路を断たれたか！）

後悔したがもう遅い、公孫？はこの恐ろしい世界に閉じ込められてしまったのだ。

公孫？は剣を抜いたまま、とりあえず歩き出した。

帰れぬものは仕方がないし、ここに留まっても事態は解決しない。
それに、先程の場所と違うならば、出口がどこにあるかもしれない。

公孫？の体をなめるように、霧が流れていく。

少し歩いて、公孫？はふと立ち止まった。
目の前に、見たこともない屋敷が立っていた。

（どこだ、ここは……？）

公孫？は困惑した。

こんな建物は城の中になかったはずだ。
ここはまだ、城の中のはずなのに。

（不思議じゃ、まさに奇怪じゃ）

さすがの公孫？も気味が悪くなってきた。
これは本当に現実なのだろうか。

公孫？は恐る恐る、屋敷の壁に手を触れてみた。
感触は……本物だ。

ただ、触ったとたんに毛虫が背を這うような不快感が走ったが
……。

公孫？は頭を振って思い直した。

「ええい、考えても仕方がない！

これが妖魔の仕業であれば、元を断てば治まるであろう」

理解できない事に遭遇したとき、深く考えることを止めてしまうのが公孫？の愚かなところだ。

公孫？はあえて妖魔の巣くうおぞましい館に侵入する方を選んだのだ。

来たよ、袁紹。

おっかなびつくり門をくぐる公孫？の姿を、さつき殺されたはずの少年が建物の陰から見ていた。

公孫？の背後で、門が大げさな音を立てて閉まった。

公孫？裏易京楼にて（後書き）

この館のステージから、袁紹の悪夢の影が濃くなります。

公孫？編はこの辺りで中間地点ですので、ゆるりとお付き合いください。

公孫？〜憎悪の館にて（１）（前書き）

公孫？と聞いて騎馬隊「白馬陣」を思い浮かべた方にはすみませんが、この話に馬は登場しません。

公孫？のスペックを生かし切れない設定に心よりお詫び申し上げます。

公孫？　憎悪の館にて（１）

（また閉じ込められたか……）

公孫？は苦々しく思いながら、屋敷の中に歩を進めた。

屋敷は外から見たよりも荒んでいなくて、むしろ人が生活していた気配さえ見受けられる。

庭木はきちんと手入れされていたし、扉はさび付いているにも関わらずすんなり開いた。

（もう、どうにでもなれ！）

そう思っただけに入っただけとたん、口ばかりの顔に出くわした。

初めは、それが何なのか分からなかった。

次の瞬間、その赤黒い穴から吐き出された臭い息で、それが怪物だと分かった。

「このっ……！」

公孫？は怪物に蹴りを入れつつ、剣を抜いて後ずさった。

怪物はちょうど人ほどの背丈で、血が抜けたような妙に白い肌をしていた。

舌もない口で、何かもごもごとつぶやいている。

「……ノクセ……」

怪物がつぶやく声が、一瞬言葉に聞こえた。

公孫？は斬りつけるのをひとまずやめ、怪物の声に耳をすました。

「……シヨウノ、クセニ……。
キタナラ……イ……ゲセン……クセニ……」

怪物は確かにしゃべっていた。

しかもその声には、あからさまな悪意がにじみ出ていた。

（シヨウのくせに？ 汚らしい？ ゲセン？）

怪物が振りかぶる虫の足のような指をかわしながら、公孫？は怪物の言葉を頭の中で訳した。

（将のくせに汚らしい？

下賤だと……わしのことを言っているのか！）

言葉の意味を理解したとたん、公孫？は頭に血が上った。

この怪物は不遜にも、誇り高い武人を汚らわしく下賤だと言っているのだ。

公孫？は猛然と怪物に斬りかかった。

怪物は決して弱くはない、だが公孫？は人の中で抜きん出た武人である。

「はやあ！」

鋭い爪をかがんで避け、怪物の体躯に剣を突き刺す。

怪物が苦痛に身をよじり、嫌がるように身を引いた。

その時、怪物の顔が……いや口元が歪んだように見えた。

何か生理的に毛嫌いするものを退治しようとする時のような表情。
早く始末したいのに思わぬ反撃をくらって、触りたくもない嫌悪
に必死で避けようとする動きだ。

「ギョ、ギャ、グエ……！」

嫌がるように頭を振りながら、泡を食ったように汚い唾を撒き散らす。

公孫？は鎧でそれを防ぎながら、怪物の無駄にふくよかな体を切り裂いた。

怪物は相変わらず、倒しても倒しても現れた。

しかも外にはいなかった、汚い液を吐くイモムシのようなものでいた。

絶え間ない緊張にさすがの公孫？も疲労を覚えて、怪物のいない部屋で扉を閉めて腰を下ろした。

「ふう……一体いつまで続くんのだ？」

つい、弱音が口について出た。

状況は悪くなるばかりだ。

早くこの怪異の元を見つけて倒さなければ、こちらが疲れ果ててしまう。

（何か怪異の手がかりのようなものはないものか……）

公孫？は部屋の中を見回した。

外にいてもどうしても怪物を気にして探索がおろそかになってし

まうが、こうして密室にしてあればその余裕が生まれる。

そこは、高貴な夫人の部屋のようなだった。

外はあんなに荒れ果てているのに、ここだけが生活感を残している。

宝石をちりばめた化粧箱、よく磨かれた鏡、きれいに整えられた寝台。

いかにも、上流階級の贅沢な女が暮らしていた感じだ。

（袁紹に関係のある女か？）

公孫？は直感的にそう思った。

袁紹は名門の嫡子、奴の女ならこんな贅沢をしていてもふしぎではない。

鏡台の上に、一冊の書物が置かれていた。

「これは……？」

公孫？はそれを手に取って、読み始めた。

公孫？憎悪の館にて（1）（後書き）

この部屋の辺りから、袁紹の悪夢要素がふんだんに出てきます。
ただし、袁紹のことを（生まれや家族的な意味で）よく知らない
公孫？がそれを正しく受け取れるかは別の話ですが。

公孫？憎悪の館にて（2）（前書き）

正直、公孫？編は出題編のようなもので、単なる怪奇現象に終始しているかもしれません。ですが、これに続く他の人物編でいろいろと悪夢の断片が明らかになっていきますので、その時に今回の怪異の答えを探していただけたら幸いです。

公孫？憎悪の館にて（2）

血と膿と錆にまみれた冷たい石の床に座って、袁紹は剣を磨いていた。

刺すように冷たい水が、剣についた血糊を洗い流していく。

「公孫？はあの女の部屋に入ったよ」

いつの間にか、少年がすぐ側に来ていた。

少年は袁紹の顔をのぞきこんでささやく。

「本当に君が相手にするのかい？」

あいつはきつと、何も分からないよ。

そんな奴と顔を合わせたって、君が傷つくだけだって」

しばらく、沈黙が続いた。

「もし、少しでも……」

袁紹がつぶやく。

「少しでも私のことを分かってもらえたなら、その可能性が針の先ほどでもあるのなら……ここは私が出よう。」

もし本当に私を分かろうとしないなら、その時はこの手でけりをつける」

袁紹は、希望を捨てきれない痛ましい顔をしていた。

少年はあきれたようにふっと息を漏らし、袁紹の前からどいた。

「仕方ないなあ……言っておくけど、だめでもこいつで諦めたら承知しないからね」

「うむ、分かっておる。

恩に着るぞ」

袁紹は立ち上がり、きれいに磨き上げた剣の素振りをして見せた。

もうすぐあの男がここにやって来る。

生前の宿敵として、一応礼は尽くすつもりでいた。

公孫？は鏡台の上に置かれていた本を途中まで読み、投げ捨てるように鏡台に戻した。

それは、この漢帝国ができたばかりの頃の歴史書。

しかし、その内容は胸が悪くなるばかりの残酷な物語だった。

そこに記されていたのは、高祖劉邦の妻、呂後の話だった。

皇帝になり、他の女にうつつを抜かす劉邦を恨み、劉邦が死んだとたんに復讐の鬼と化した呂后。

夫が寵愛した女の手足を切り、目鼻をつぶし、人豚と呼ばせた目をおおうばかりの蛮行。

その章を読み終えたとたん、公孫？の耳元で怒りに狂った声が聞こえた。

「殺してやる！

あの女に渡すものか！！」

公孫？は大慌てで振り向いたが、そこには誰もいなかった。

静まり返った部屋の中で、公孫？の心臓だけが早鐘のように打っていた。

公孫？は部屋の中に本当に誰もいないのを確かめると、鏡台をあさって何かないかと探した。

そして、金色に輝く豪華なデザインの鍵を見つけ出した。

「おお、これで道が開けるやもしれぬ！」

鍵を見つめて喜ぶ公孫？の背後で、一瞬鏡に袁紹の姿が映った。しかし鍵に気をとられていた公孫？がそれに気付くことはなかった。

公孫？は鍵を手にして一度大きく息をすると、用心深く部屋の扉を開いた。

すぐ側に怪物はいないようだったが、公孫？は思わず息をのんだ。

屋内の様子が、激変していたのである。

床や壁に、血のような汚れがはびこっている。

そのうえ、粘つく膿のようなものがそこらじゅうに落ちている。

さっきまできれいだった屋敷は、外と同じような地獄に変じていた。

そして廊下には、公孫？を導くように血痕が長い筋をなしていた。

（これは……来いという事か？）

さすがの公孫？も退き帰そうかと思ったが、出口がないであろう

ことは想像がついた。

公孫？は剣を抜き放ったまま、用心深く血濡れの廊下に踏み出した。

あちこちから、怪物の呻き声が聞こえる。

公孫？は怪物を先手必勝で倒し、時にはやりすごしつつ血痕を辿った。

血痕は、大きな扉の向こうに続いていた。

きらびやかな装飾が、錆の間からのぞいている。

先は見えないが、それでも入るのをためらわせる威圧感が漏れていた。

「ここが、妖魔の巣か……」

公孫？は腹をくくって、金色の鍵穴に鍵を差し込んだ。

カチリと乾いた音がして、扉の鍵が開いた。

公孫？！憎悪の館にて（2）（後書き）

いよいよ、ゲームというボス戦に突入します。

公孫？はどのようなボスと戦い、それが袁紹の何を象徴しているのか…そして戦いの結果はいかに！？

余談ですが、自分は三国志以外にも（主に横山光輝の漫画で）古代中国史を読んでいます。今回のように、またそれとなく作中であるかもしれません。

公孫？憎悪の館にて（3）（前書き）

今回の話は主にボス戦ですが、そのさなかに公孫？は失われた記憶を思い出していきます。袁紹の悪夢と公孫？の真実、それがこの戦いのメインテーマです。もっとも、袁紹の悪夢はこれが全てではありませんが、それは他の人物編でおいおい明らかになっていく予定です。

公孫？！憎悪の館にて（3）

公孫？が扉を押すと、扉は重い音を立てて開いた。

中は暗いが、高い窓から赤茶けた光が差し込んでいる。

その光が、部屋中に散らばる血痕をますます際立たせる。

暗闇の奥で、何かが動いた。

「誰かいるのか！？」

公孫？が声をかけると、そいつはのそりと振り向いた。

着物はきいているが、口ばかりが大きくて、玉に見えるほど肥満した巨体だった。

おああああー

そいつが吼えた。

ちよつと聞くと獣のようだが、かろうじて人間の女の痕跡を残している。

おしろいを塗り固めたような白い肌に、血のような紅い口紅が映える。……本当に血かもしれないが。

コ・ロ・ス コ・ロ・ス コ・ロ・ス

女の化け物は硬そうな鉄鞭を手に使っていた。

恨めしそうな声と共に、公孫？に向かってそれを振り上げた。

「わあっ！？」

公孫？は慌てて横に飛びのいた。
思ったとおり、入ってきた扉は閉まっている。

鉄鞭が、ガアンと床の石に当たって火花がとんだ。

動きは遅いが、当たればすさまじい威力だ。

女は少しの間動きを止めたが、また重たそうに鉄鞭を持ち上げた。

「コロスコロスあの女をコロス……」

女は公孫？の方を見向きもせずにはぶつとつぶやいた。

そのセリフに、公孫？は聞き覚えがあった。

先程、豪華な女の部屋で聞いた声だ。

（そうか、あの部屋はこいつの住処だったか！）

だとすれば、あの部屋にここの鍵があったのもうなずける。

そしておそらく机の上にあった書物……その残酷な内容も、こいつに関係しているのだろう。

言動からして、この女も呂后と同じように別の女を憎んでいるのかもしれない。

少しその場でまごついて、女は思い出したように公孫？の方を向いた。

しかし、公孫？は振り向いた女の目の前まで来ていた。

公孫？が先制攻撃をしかけたのだ。

「くらえっ！！」

上等な絹の帯に、刃がめりこむ。

太い腹から腐ったような体液を撒き散らして、怪物はのけぞった。

「ぎゃあああ……！」

獣のような悲鳴を上げて、女はでたらめに鉄鞭を振り回した。
近くにあった金細工の燭台が宝石を散らして吹っ飛ぶ。

「ああ、もったいない！」

思わず公孫？が叫ぶと、女はぎろりとにらんで低い声を発した。

マタ、買えバイイじゃナイ

クダラナイ……

それを聞いたとたん、公孫？はピンときた。

（こいつは、元は人間だったな！）

それにこの贅沢さ……公孫？には覚えがあった。

こんな贅沢を平気でできる奴は、知っている中ではあいつが一番
疑わしい。

名門袁家の嫡子にして、河北の富を全て手中に収めつつあったあ
の氣にくわない男だ。

「そうか、こいつは袁紹の妻か……！」

公孫？は怪物の正体をそう判断して、一人心の中で納得した。

人型の大口の怪物が言った言葉も、それを裏付ける証拠だ。

（将のくせに、か……。

そういえば袁紹の家は三公の家柄、奴はその嫡子だ。
ここの怪物たちは、生みの親によく似たようだな！）

公孫？は剣を構え直し、猛然と女の怪物に立ち向かった。

妖魔の正体が分かった以上、ためらう事など何もない。

特に相手が袁紹の妻ならば……望む所だ、奴を苦痛のどん底に叩き落してやれる。

そこまで考えたたん、公孫？は妙な記憶の再生に襲われた。

燃え上がる城。

穴から湧き出した袁紹の兵に追い詰められ、
自分は、愛した妻子に自ら刃を向けて……。

「！？ちよつと待て！！」

公孫？は思わず驚愕に目を見開いた。

自分も最近、妻と子をそうして失った……？

しかし、それならばなぜ自分はこうして生きているのか？
どうにも納得がいかない。

（わしは、妻子を……だから袁紹からも妻を奪おうと？）

自分の考えに疑問を抱いて、公孫？の刃が鈍った。
そのスキを突いて、女が鉄鞭を振り上げた。

ぶんつと風を切る音に、公孫？は本能的に身を引いた。

しかし、左の肩から腕にかけて、容赦なく振り下ろされた鉄鞭が襲い掛かった。

「ぐあつ！？」

公孫？ははつと我に返り、痛みにきしむ体を無理矢理動かして飛びのいた。

今は考えにひたっている場合ではない、この怪物を倒さなければ。

公孫？は一度後ずさって距離をとると、右腕一本で剣を構え直した。

左腕は衝撃でしばらく使えそうに無い。

ならば、走って勢いをつけて片腕の突きで勝負を決めるのだ。

「ハヤア！！」

女が鉄鞭を再び持ち上げるまでに、公孫？は剣を上段に構えて走りこんだ。

白銀の刃が、女の胸元に吸い込まれた。

ぎゃあああ

女が悲鳴を上げた。

手足をばたつかせて暴れる女から、公孫？は素早く剣を抜いて離れた。

女の胸から、どす黒い血が吹き出す。

痛みに悶えながら、巨体を支えきれずに後ろに倒れこんだ。

しかし、胸を貫かれているにも関わらず暴れる生命力は人間の
ものではない。

今のうちにとどめを刺すべきだ……。

公孫？はそう判断して、再び女の側に向け寄った。

「くたばれっ！！」

公孫？は転げまわる女の体に、がむしやらの剣を突き立てた。
激しく暴れて動き回るため、一撃で首を狙うのは難しい。
それに、一撃で楽にしてやる理由もない。

（この女は袁紹の妻……ならば、我が妻子の仇だ！）

公孫？は鬼のような顔で、女の怪物を斬りまくった。
暗い部屋を震わせて、女の断末魔が響いた。

公孫？憎悪の館にて（3）（後書き）

さて、ボス戦には無事勝利した公孫？ですが、果たして脱出することはできるでしょうか。

次はいよいよ袁紹本人とご対面です。乱世に争い続けた二人の男は、この異様な世界で何を語るのか…そして袁紹の欲する「救い」は得られるのか。公孫？編もだいぶ終わりに近づいてきました。

公孫？憎悪の館にて（４）（前書き）

袁紹と公孫？は初めから敵だった訳ではなく、董卓討伐では一緒に戦った仲でした。しかしもはや乱世は治まらず、それぞれが独立して天下を目指すことになったために、領土を巡って争うようになったのです。

その争いのスタート時点で、袁紹は名門の当主として人望があり、すでに優秀な人材を多く集めていました。対する公孫？はそれほど家柄もなく武力でのし上がってきたため、人材も集まらず政治もうまくできません。その辺りで公孫？が袁紹に抱いていた劣等感を感じながら読んでいただけたら幸いです。

公孫？　憎悪の館にて（４）

「はあ……はあ……」

薄暗い部屋に、公孫？の吐息だけが聞こえる。

いつの間にか、床にはびこっていた血の汚れは消えていた。

ちよつと目を離れたすきに、女の怪物も消えていた。

部屋の窓から差し込む光は、黄ばみが抜けて白っぽくなっていた。

公孫？は放心したように、周りを見回した。

「これは……戻ってこられたのか？」

事態を確認するように、公孫？はつぶやいた。

さっきまでの禍々しい空気はもう感じない。

現世かどうかはまだ不明だが、少なくとも現世に近付いてはいる気がした。

「ふう、全くえらい目に遭ったわい」

今更ながらそうつぶやいた時、公孫？の耳がかすかな物音を捉えた。

背後から、そつと撫でるような視線が這い上がった。

公孫？は恐る恐る、後ろを振り返った。

そこに佇む一人の男、その名は……。

「袁紹……！！」

よもや見間違えたりするものか。

あの根暗なくせに、どこか人を蔑むような目つき。

下々の者との付き合いを面倒くさがるような、けだるい眼差し。

忘れるものか！！

袁紹は、まだ迷いを振り切れぬまま、公孫？と向き合っていた。

思えばこの男とも長い付き合いだったが、こうして間近で顔を合わせたのはいつ以来だろう。

「公孫？、私は……」

袁紹は不安と期待半々で、声をかけた。

全部を分かってももらえる訳がない、だが、少しでも救いが得られれば……。

公孫？は怒りを浮かべた顔で、慎重に歩み寄ってくる。

「君をこのような所に招いたのは、謝ろう。」

しかし、私にはどうしても誰かの力が必要……」

ぐさっ

できるだけ感情を荒立てぬよう訴えていた袁紹の声は、とぎれて嗚咽に変わった。

目を閉じて次の言葉を考えていたスキに、公孫？が走りこんで胸に剣を突き立てていた。

「ぐっふっ……！！」

あっけに取られたまま咳き込む袁紹に、公孫？は義憤に駆られて怒鳴りつけた。

「貴様、自分の妻をあんなにしておいてよくも涼しい顔でいられるな。」

地獄に落ちて、己が苦しめた者どもに泣いて謝ってこい！」

（妻だと、何を言って……あれは私の……。

そうか、そのようにとったのか）

痛みに縛られて動けぬまま、袁紹は公孫？が責め立てるのを聞いていた。

「袁紹、貴様に人の痛みが分からぬことは以前から分かっておった。

貴様は名門袁家の嫡男、権力に虐げられる者の気持ちなど、知ろうともしなかったのだらう！

そして名門の威光をかさに着て、とどまる事を知らぬ野望と欲望の果てに妖術にまで手を出したのだ！」

袁紹は痛みを顔に歪めたまま、黙って公孫？の言うことを聞いていた。

「そしておまえは醜くなつた妻を捨て、他の女に溺れた！

妻をここに閉じ込め、下賤な人間は生きる価値がないとばかりに餌としてここに連れ込んだのだ！

わしはおまえを断じて許さん、天に代わって貴様の傲慢に罰を下

してやるうー!!」

袁紹は、血反吐と一緒にため息をついた。

こいつは、私を救えない。

知ろつとする気もない。

ならば、さっさと地獄に落とすとしよう……。

袁紹の顔に、暗い笑みが浮かんだ。

公孫？！憎悪の館にて（４）（後書き）

憎い相手が目の前にいて、しかも異常事態のと真ん中では冷静さを失うのは無理ありません。しかし、そんな時こそ冷静さを保たないと事態は好転しないもの。

サイレントヒル3で、教会でヘザーがクロードアを撃ってしまふとどういう結末になったでしょうか。ご存じの方も知らない方も、次で公孫？編は最終話ですので、愚かな宿敵の結末をその目でお確かめください。

袁紹（金網の部屋にて（前書き）

公孫？編もついに最終話です。

ここまでお読みいただいた皆様、長いことお付き合いありがとうございます。
ございます。

これからも袁紹は他の人物を悪夢に招いていきますので、この先はもっとメジャーな人物が登場するかもしれません。
それでは、公孫？編のラストをどうぞ。

袁紹、金網の部屋にて

「くつくつく……」

場違いな笑い声に、公孫？はぎくりとしてしゃべるのをやめた。
袁紹の胸に突き刺した剣から、それに合わせて震えが伝わってくる。

「袁紹、貴様……！？」

公孫？は大慌てで剣を引き抜き、後ずさって距離をとった。

公孫？は驚愕に目を見開いて袁紹を見ていた。

確かに急所を突いたはずなのに、袁紹は倒れることもなく立ったまま笑っている。

時折ふらつくところを見ると、痛みは感じているようだが……。

「な、なぜ死なない！？」

公孫？の問に、袁紹は物憂げな顔で答えた。

「いい加減に気付け。

私もおまえも、もうとつくに死んでいるのだ」

袁紹の言葉に、公孫？は思わず目を見開いた。
自分は確かに、今ここに生きているのに。
生きて……？

燃え上がる易京楼。

自ら手にかけて妻子の亡骸に囲まれて、公孫？は兜を脱ぎ捨て……。
抜き放った剣を、自らの首に……。

袁紹の言葉に触発されたように、公孫？の頭の中で失われた記憶が蘇った。

公孫？の体が感覚を失い、ぐらりとよろめく。

そうだ、自分はすでに……あの時、自害したんだ……。

袁紹はそんな公孫？をあきれたような目で見つめた。

「無念の死を遂げた地縛霊は己が死んだことに気付かぬと聞いたが…… 本当だったとはな。

わしはおまえより数年長く生きたが、もしやと思って来てみればこの様だ。

未だにこの野望の墓場でさまよっておったとは」

公孫？はただ、唇を噛むしかなかった。

自分では潔く死ぬと思っていたくせに、仇が指摘するまで気付かぬ自分が悔しくてならなかった。

しかし、この憎たらしい男に言われっぱなしでは男として面目が立たない。

公孫？は意地になって言い返した。

「何を、どうせ貴様も同じようなものだろう！？」

結局冥府に行けずにさまよっているではないか！」

それを聞くと、袁紹は妙に神妙な顔になった。

「むう……確かに結果は同じ事だ。

だがな、わしは未練のあまりさまよっている訳ではない。

……理由があるのだ」

「理由？」

公孫？は一応いぶかしげな顔を作って、聞く素振りを見せた。

しかし、心の中では、言葉の中からあら捜しをする気ばかりだった。

それを読んだのか、袁紹はうんざりしたように口を開きかけ……。

「うむ、だがおまえに話す価値はないようだな。

うぐっ……ゴホゴホゲボオッ！！！」

突然、胸を押さえて激しく咳き込み、体を震わせた。

袁紹の指の間から、真紅の鮮血がばたばたとこぼれた。

吐血したのだ。

それは床に落ちると、まるでそれ自体が意思を持つように広がり出した。

公孫？の足元を飲み込んで、あっという間に血の汚れが部屋中に広がった。

そしてその血に侵食されるように、石の床は金網に変じていた。

「な、何だと……！？」

驚いている公孫？の足元で、がんと嫌な音がした。

公孫？は一瞬、体が宙に浮いたように感じた。
だが、体はすぐさま重力に従って落下を始めた。
足元の金網が、外れたのだ。

「うわああ貴様ああ！！！」

袁紹の冷めた視線の先で、公孫？は深淵の闇に飲み込まれていった。

公孫？の姿が見えなくなると、袁紹は思い出したように別れの言葉を口にした。

「さらばだ、宿敵よ。」

わしを救えぬおまえにもう用はない。
地獄で悪魔の胃袋にでも引きこもっておれ！」

それだけ言うと、袁紹は胸の傷を押さえてその場に座り込んだ。

（痛い……これは、かなりかかるな……）

袁紹は唇の血を拭いながら思った。

自分はもう死んでいるから、どんな傷を負っても死ぬことはない。

ただ、生前と同じ苦しみだけは残っている。

（ああ、そうか……生きていれば、これほど苦しむ前に死ねるのだな）

死人である自分は、苦しみを味わいながら傷が治るのを待つしか

ない。

死ぬことはなくても刺されるべきではなかったと、袁紹は後悔した。

気がつくつと、頭から角を生やした小さな鬼が側に来ていた。

小鬼は袁紹の顔を見上げて、驚いたように言った。

「いやあ、見事に落としてくれたなあ。

旦那さん、なかなかやるねえ」

袁紹は、答えなかった。

袁紹が黙っていると、小鬼はおどけたように続ける。

「あんだ、表の旦那さんやろ？

裏ならともかく、表の旦那さんができるなんて……意外やったな

あ

そう、自分はいくまで自分の表層にすぎない。

心の奥の感情は……裏の自分は、今も自分の背後から自分を見ている。

袁紹の後ろで、少年が笑みを浮かべてつぶやいた。

「当然だよ、この人とぼくは元々一人なんだもの。

それに、あんな奴は……地獄に落ちて当然、だろう？」

途中から、声が大人のように低くなった。

少年はいつの間にか、袁紹とそっくりの姿になっていた。

袁紹は背後にたたずむもう一人の自分に目をやり、ふつとため息をついた。

これは自分が壊れないために切り離してしまった自分。
少しでも楽になるために、心の深淵に閉じ込めてしまった自分。
心の底で、いつも苦痛にまみれていてくれた自分。

もう一人の袁紹は、体中血に濡れた姿をしていた。

彼は表の自分に向かって、言い聞かせるように告げた。

「まあ、あやつの事はもう気にするな。
やり方が分かったなら、次を試さねば」

そう、次は救ってもらえる事を祈って。

「そうだな、いずれにせよこの魂は直さねばならぬ」

袁紹は振り返り、うなずいた。

魂が完全な形でないと、人は冥界に行けない。

袁紹の割れてしまった魂では、冥界への道が見えない。

だから誰かが自分の全てを許して……抱きしめてくれないと……

…。

救ってくれる誰かを探して、袁紹は易京楼を後にした。

袁紹（金網の部屋にて（後書き）

見事にバッドエンドです、はい。

公孫？はもともと袁紹と仲が悪かったせいか、見つけるヒントをことごとく「袁紹が悪い」という方向に曲解してしまいました。いくら力が強くボス敵を倒せても、謎解きができなければグッドエンドにはいけません。公孫？が袁紹のことを上辺しか知らなかったのも、一因でしょう。

次は袁紹のことをよく知っている人物、息子の袁譚^{エンタン}が登場します。袁紹の悪夢もこの回よりずっと明らかになりますので、ご期待ください。

袁譚（霧の中にて（前書き））

さて、袁紹は今度は息子を招いて新章開始です。

袁紹自身は知っている方もいると思いますが、息子となると知っている方はかなり少ないのではないかと思いますので、紹介を置いています。

袁譚^{エシタン}・顕思^{ケンシ} 生年？ 没年205年

袁紹の長男であるが、袁紹が三男の袁尚^{エシヨウ}をかわいがって後継者にと考えていたため、袁紹の死後後継者争いを起こした。袁紹の生前から、本拠地の冀州ではなく青州の太守として遠ざけられていた。後継者争いの最中に一度曹操に降伏し、また裏切って反逆するなど信用できない人間だったようだ。

袁譚く霧の中にて

我が子を腕に抱き、私は光を見た。

この子が私を見て微笑む顔に、私は救いを見た。

子は無条件に親を愛してくれるのだと、愚かにも信じて……。

だから、私はあまり愛を知らないけれど、一生懸命愛して育てた。

よもや、それすら悪夢に変わる日が来ようとは……。

光を見た後の暗闇は、今までより何倍も暗く、深く、恐ろしかった。

だから私はこの闇を、あの子にも分けてあげようと思う。

「道が……見えない……」

白く冷たい霧の中で、袁譚は途方に暮れていた。

（どうしよう、さっきまで見えていたのに……。

これじゃ、下手すると成仏できないかも……。）

袁譚はおろおろと何度も向きを変えて、周りを見回した。

（ただでさえ散々な死に方だったのに、死んでからもこんな目に遭うなんて……）

袁譚は頭を抱えた。

そう、袁譚は死んだ。

敵に攻められ、討死した。

……そして、目の前に見えた光の道を辿って冥界に行こうとしていた。

問題は、その道を見失ってしまったことだ。

霧に巻かれたのは、あつという間だった。

袁譚の背後から包み込むように霧が流れてきて、気がついたら何も見えなくなっていた。

まるで、悪意ある何かが彼を捕らえたように。

白く冷たい霧が、袁譚の体をなぞるように流れる。

その向こうから何かに見られているような気がして、袁譚は思わず首をすくめた。

「ふふ……懐かしいな、私も初めはあのように戸惑ったものだ」

血と膿と錆にまみれた世界で、袁紹はほほえましげにほおを緩めた。

道を見失って戸惑う袁譚の姿に、袁紹は自分が死んだ時のことを思い出していた。

しかし、全く同じではありえない。

なぜなら袁紹には、初めから道が見えていなかったのだから。

袁紹が死んだ事に気づいたとき、周りに見えたのは生前と同じ風景だった。

袁紹は自分がどこへ行けばいいのか、何をすればいいのかも分らなかった。

自分の姿は生きている者には見えない。

声も届かない。

袁紹に与えられたのは、ひどい孤独の時間だった。

袁紹は寂しくなって、自分と同じように死んだ者を探し始めた。しかしそれは、さらなる孤独へとつながる道だった。

人口の多い冀州の城下町で、死人はそれなりに見つかった。

ただ、彼らの行動は袁紹のそれと全く異なっていた。

皆、何かに導かれるように一方向に歩いていく。

まるで、袁紹には見えない何かが見えているように。

袁紹は必死で後を追った。

しかし、それは徒労に終わった。

歩いていくうちに彼らの姿は薄くなり、やがて消えてしまうのだ。

何人目かの死人が目の前で消えた時、袁紹は絶望に泣き崩れた。

自分はきつと、冥界に行けないのだ。

重い罪を犯したせいで……いや、生まれてきたこと自体が罪だったのかもしれない。

だからきつと、もうすぐ地獄から迎えが来るのだ。

かくして、袁紹の足元に地獄の住人はやってきた。

それは三歳児ほどの大きさの、頭に一本角を生やした小鬼だった。

それでも袁紹は震え上がり、上ずった声で小鬼に問うた。

「そなた……わしを地獄に連れてゆくのか？」

意外にも、子鬼は首を横に振った。

「ちやいますわ、ボクみたいな小鬼にそんな力ありませんもん。取って食ったりしませんから、安心しなはれ」

袁紹はとりあえずほっと胸を撫で下ろした。

しかし、状況が変わった訳ではない。

それならばと、袁紹は小鬼に尋ねた。

「そなた、わしがなぜ冥界に行けぬのか分かるか？」

それを聞くと、子鬼はおかしそうに笑って答えた。

「もしかして、自分で気付いてへんのかいな？」

旦那さん、魂割れてまっせー！」

「は？」

袁紹は一瞬、言われた意味が分からなかった。

魂が割れていると言われても、自分の体が割れている訳ではない

し……。

袁紹が戸惑っていると、小鬼があきれたように言った。

「旦那さん、後ろ後ろ！」

言われるままに振り返って、袁紹は息が止まるほど驚いた。
いや、生きていない以上息をする必要はないのだが。

すぐ後ろに、自分とそっくりなものがいた。

袁紹は思わず身を引いて後ずさった。

しかもそのもう一人の自分はひどく疲れ、望みを失ったような顔で、そのうえ体中が血にまみれていたのだから。

固まってしまった袁紹の袖をつかんで、小鬼がはしゃいだように言う。

「ほら、あれが旦那さんの魂の片割れや。

最近現世の妖怪たちが狡猾やよつてに、人間さんは魂が完全な形でないと冥界への道が見えへんようになってしもてん。

魂がこないになつてしもたら、そりゃー道は見えへんはずや」

袁紹は小鬼の言うことを頭半分で聞きながら、目の前に立つもう一人の自分を見ていた。

ふいに、もう一人の袁紹が口を開いた。

「無理もない、忘れたかったのだろう？」

魂を割って、己の一部を心の底に閉じ込めても……」

もう一人の袁紹が、袁紹に向かつて手を伸ばす。
その手が指先に触れた瞬間、袁紹は悲鳴を上げてその場に崩れ落ちた。

その手から伝わってきたものに、
長いこと忘れていた、恐怖と苦痛に耐えかねて。

毎日毎日、怯えて過ごしていた。

本当の母と引き離され、継母に邪険にされて育った。

明日、何が起こるか分からなかった。何が出てくるか、全く見えなかった。

「そうだ、私は……！！」

三人目の母が楽になる道を示してくれた時、袁紹は迷わずその偽りの道にとびついた。

自分を追い詰めた名家の威光を、自分がまとって生きる道に。

卑しい生まれを恨み、悪夢に染まった己の一部を捨てることと引き換えに。

よもや、それが死後冥界への道を閉ざしてしまうなど夢にも思わぬことだった。

袁譚（霧の中にて（後書き）

袁譚は自分が死んだことを理解している状態で、物語が始まります。

さらに今回、袁紹がどのように今の状態になったかが語られ、袁紹の目的が明確になってきました。ただし、目的が見えてもそこにたどり着けるかはまた別の話ですが…。

袁紹と霧の中にて（前書き）

袁譚編は、袁紹と家族のことについて語ることが多いため、前章より一話が長くなることが多いと予想されます。また、袁譚以外にも袁紹の一族でキーワードとなる人物が多いため、そのつど紹介を置いていきます。

全体的にも、公孫？編よりかなり長くなると思います。

袁紹く霧の中にて

「旦那さん、辛かったんやろなあ。
でも、このままやとほんまにずつとさまよう事になりまっせ。
そうならんためには、魂を直さんとあきまへん」

「直せるのか!？」

二人の袁紹の声が重なった。
偽りに逃げていようと、悪夢に埋もれていようと、今の袁紹が願うのはただ一つ。
冥界に行つて安らぎを得ることだった。

「どうすればよい!？」

二人の袁紹が、小鬼に詰め寄る。
子鬼は二人を見比べて、ちよつとひるんだような声で漏らした。

「ああ……こうして見るとやっぱ一人の人間や。
でもなあ、この魂を一つにするには、誰か他の人の力が要るんで
すわ。」

誰かが旦那さんの全てを認めて、許して、生きてていいよって言
ってくれたらええねん」

「ほ、他の人だと……!」

主人格の方の、表の袁紹は肩を落とした。
姿も見えず声も届かない誰かが、自分を助けられる訳がない。

「何か、手があるのか？」

血塗られた、裏の袁紹はいぶかしげに目を細めた。

「ま、心配しなさんな！」

そないな人には、地獄の力を貸しますわ。

そしたら、現世の妖怪と似た感じで他の人に見えるようになりま
すよってに」

小鬼は楽しそうにそう言った。

そう、地獄の力を借りて……。

かくして袁紹はその力で己の悪夢を顕在化させ、他人を引き込む
力を得た。

「さて、どうしてやろうか……」

裏の袁紹は境目の向こう側から、霧に囚われた哀れな息子を見つ
めていた。

体中にまわりついている血が、うずくように微動した。

「やめろ、本初！」

今回は私が行く！」

後ろから声をかけてきたのは、表の袁紹だ。

表の袁紹は裏の袁紹を、字で本初と呼んでいた。

裏の袁紹もそれは承諾している。

裏の袁紹が心の深淵に閉じ込められたのは、まだ多くの人が袁紹を字で呼んでいたような年だった。

袁譚が生まれたのは、それからずっと後のこと。
だから袁譚は、表の袁紹がずっと相手をしてきた。

「あの子に寄りそうなら、おまえではなく私だ！
最後に親として、もう一度あやつの真意を問うてみたい！」

その言葉を聞くと、本初は憎らしげに笑った。

「ふん、あのような男に情けをかける気か？
それとも、まさかあやつが私を救えるなどという希望を持っているのではあるまいな？」

「うつ……」

凶星を突かれて、袁紹は黙ってしまった。
目の前にいるのは自分なのだと、改めて思い知らされた。

本初は戸惑う袁紹を横目に、うんざりしたようにぼやいた。

「つくづく甘い男だな、貴様は。」

あやつの本心がどのようなものは、あの夜しかと聞いただろう？

……ああ、分かった、もう勝手にすれば良い！」

袁紹の表情が沈むにつれ、本初も眉間にしわを寄せて頭を抱えた。
やはり袁紹の味わう辛さも、本初にはもろに伝わってしまつらし

い。

「ならば行くぞ。

どちらにせよ、あやつはここに連れてくるつもりだ」

本初の許しを得て、袁紹はすぐさま剣を置いて立ち上がった。

久方ぶりに、あの子に会える。

生前ですら、遠ざけてろくに会わなかったあの子に。

袁紹は一瞬、親としての愛情に顔をほころばせた。

袁紹（霧の中にて（後書き）

袁紹は生前、長男の袁譚を中央から遠ざけていたため、死後内紛の原因を作ってしまった。その理由は三男の袁尚を溺愛したためと三国志演義には記されていますが、この章ではその辺りの原因を妄想して補完してみました。

なぜ袁紹が袁譚ではなく袁尚を選んだのか、その理由を悪夢の一つとして描いていきたいと思います。

袁譚、霧の中にて（2）（前書き）

袁譚の恐怖の旅が始まります。

袁譚は前章の公孫？ほど強い武将ではないため、怪物との戦いで少し手こずってしまいます。

しかしそれ以上に、袁譚は怪物たちの中に特別な感情を見出してしまいます。袁紹の実の息子であり、近しい人物であるがゆえの恐怖です。これからそれをじっくりと読み解いていきましょう。

袁譚く霧の中にて（2）

渦巻く白い霧の中で、袁譚はしばらくまごついていた。霧が晴れるまでは動かない方が良いと思ったのだが、しばらく待っても霧は晴れない。

（いつそ元来た道を戻ろうか……。

あつても、もうどっちから来たか分からねえ！）

霧は太陽の光すら覆い隠し、一面を薄い灰色に沈めてしまった。方向感覚が狂い、あまりの白さに気分が悪くなってくる。

そのうち、袁譚の耳をかすかな物音がかすめた。

（人がいるのか！？）

袁譚は飛び上がるほど喜んで、音の聞こえた方を向いた。大方、自分と同じように青州城で戦死した死者だろう。しかし、迷うにしても一人よりは誰かいたほうがいいに決まっている。

「おーい、おーい！」

大声で呼びかけながら、袁譚は音のした方に走った。霧の中で、かすかに動く影が見える。

しかし、それは人間の影ではなかった。地に伏せ、這い蹲るような……獣の影だ。

（なんだ、人じゃないのか）

落胆とともに、袁譚は足を止めて肩を落とした。

（獣かあ……でも、鼻が利く動物の方がこんな状況だと便利かも。臭いを辿って町とかに連れて行ってくれないかな）

袁譚がそう思う間にも、獣は近付いてくる。

シルエットは、犬のようだ。

しかし、手を差し出そうとした袁譚の表情は一瞬で凍りついた。

「ちょ、ちよつと待て、冗談だろ……！？」

袁譚は現れたモノのあまりのおぞましさに、震えながら後ずさった。

それは、普通の犬ではない。

腐ったように肉が露出して、目から有刺鉄線が生えて体中に巻きついて、

恐怖と狂気だけを人に与えるような、そんな怪物だった。

犬の怪物は、袁譚を見ると恨めしそうに唸り声をあげた。

袁譚は思わず剣に手をかけ、抜き放った。

しかし、その手はがくがくと震え、まともに振れそうにない。

感じるのだ。

相手は初対面の、しかも犬の怪物なのに、まるで積年の恨みを晴らそうとするかのような深い怨念を。

怪物は袁譚に見せ付けるように、凶悪な牙の並んだ口をかあつと開いた。

その顔が、歡喜に笑ったように見えた。

「う、うわあ!!」

袁譚は恐怖に耐え切れず、怪物に背を向けて一目散に逃げ出した。

後ろから、寧猛な咆哮が追いかけてくる。

ごうつと風を切る音と共に、袁譚の肩に鋭い痛みが走った。

「つつつ……!!」

袁譚は思わず肩を押さえて足を止めた。
押さえた手に、冷たい血がまとわりつく。

怪物は、袁譚の前に軽やかに着地した。

口には、袁譚の着物の破片をくわえている。

袁譚は驚愕した。

袁譚の左肩の鎧は、討ち取られる時に外れてしまっている。

（こいつ、おれの弱点を狙って……!!?）

こんな敵をまともに相手にはしてられない。

しかし、背を向けて逃げたと同じ目に遭うだけだ。

袁譚は焦燥に顔を歪め、チツと舌打ちして剣を握り直した。

（もういい、どうせおれは死んでるんだ！
逃げながら殺されるよりはマシだ！！）

死んでから殺されるという表現もおかしいが……袁譚は自分で思
っておいて苦笑した。

白銀の刃を怪物に向けて、袁譚は意識して呼吸を整えた。

怪物は、とびかかるタイミングを計るように地面を蹴っている。

袁譚は注意深く、剣を正面に構えて怪物に歩み寄った。

怪物が低い唸り声を立て、身を低くする。

「グウアオ！！」

突如、怪物が再び袁譚の左肩を狙って飛び掛った。

袁譚は、思わず身を引いてしまいながら、それでも素早く剣を左
に傾けた。

ガッン……と、重い衝撃が剣に伝わる。

怪物の頭が、剣の刃に激突して割れる。

「よし！！」

やはり、所詮は獣だ。

袁譚はほっとして、剣を納めようとしたが……できなかった。

犬の怪物は、割れた頭をもたげてまだ唸り声を上げていたのだ。

（な、何だこいつ！？）

袁譚は改めて身震いした。

頭が割れても生きていられる獣なんて、聞いたことがない。

「う、うわああ早く死ねよお!!」

袁譚は恐怖に駆られて、怪物を滅多切りにしていた。

ようやく怪物が動かなくなった時、袁譚は汗びっしょりになっていた。

（何なんだろう、こいつは……？）

袁譚はやっと、それが何であるかを考える余裕ができた。

しかし、考えたとして答が出るような代物ではない。

分かっているのは、自分は生きている間はこんなものを見たことがないということだ。

だが、そいつの袁譚を見る目は、以前から袁譚のことを知っていたようだった。

（……もしかして、生きている人には見えないのかもしれない。生きている間に、気付かずに怒らせるようなことをしたのかも）

袁譚の頭で思いつくのは、そのくらいだ。

だが、本当は何を怒らせていたのか、袁譚は全く分かっていなかったのだ。

袁譚く霧の中にて（2）（後書き）

袁譚は正史では情け深い性格であると記されていますが、演義では残忍で冷酷な性格になっています。この物語では、どちらかといえば演義よりの性格を採用させていただきました。愚かで、感情的で、自己中心的な袁譚…彼がこれからどのような真実に直面していくのか、惨劇的な意味でご期待ください。

袁譚と霧の中にて（3）（前書き）

この章では、袁紹の家族環境が徐々に明かされていきます。

今回、袁譚の会話の中に劉氏リウウという女性が出てきますが、この人は袁紹の後妻です。袁譚の本当の母ではなく、三男の袁尚の母親で、袁尚を跡継ぎにするよう相当激しく袁紹に迫っていたようです。息子が曹操に追い詰められて殺されても自分はちゃっかり曹操に保護されて生き延びている辺り、いろんな意味で女傑だったようです。

袁譚く霧の中にて（3）

それから、袁譚は何度となく同じような怪物に出会った。皆、袁譚を見つけると嬉しそうに尻尾を振りながら襲い掛かってくる。

（こ、ここは危険だ！

とにかく、ここから離れた方がよさそうだ！）

袁譚は霧の中から響く唸り声から逃げて、できるだけ一直線に走った。

どのくらい走っただろう。

袁譚はへとへとになって、とぼとぼと歩いていた。

「グルルル……」

また、近くで唸り声が聞こえる。

見れば、すぐ横に犬のシルエットが浮かび上がっている。

「う、うわあ!？」

震え上がった袁譚の手を、つかむものがあつた。

驚いて振り向いた袁譚の前に、袁譚の腰くらいの背丈しかない子供がいた。

「お兄ちゃん、こつち！」

子供の背後には、建物と思しき影があつた。

袁譚は子供に手を引かれて、転がり込むように廃屋に逃げ込んだ。

慌てて廃屋の扉を閉めて、袁譚はあはあと荒い息をついた。

「危なかったね、お兄ちゃん」

子供が、袁譚の顔をのぞきこむ。

その瞬間、袁譚はその子供の顔に懐かしいような感覚を覚えた。

（この子、誰かに似ている……？）

袁譚は思わず、その子供の顔をまじまじと見つめた。

子供の顔には、確実に自分の知っている面影がある。

確か、自分は以前に、この子によく似た同じ年くらいの子供を見たような気がする。

それは、古い記憶だった。

まだ自分も成人する前、汝南の実家で……。

（そうだ、こいつ袁尚に似てるんだ！！）

その子供の顔には、袁譚の兄弟たちと同じ面影があった。

それに気づいたとたん、袁譚はその子供に親近感を覚えた。

もしかしたら、親戚の子かもしれない。

「君、名前は？」

袁譚が聞くと、子供は怯えたように目を伏せた。

「言わないと、だめ？」

子供は消え入りそうな声で聞き返した。
その目には、深い憂いがある。

「言わないと、ぶつ？」

そこまで言われて、袁譚はしょうがないなあというように首を横に振った。

「言いたくないなら、別にいいよ。」

じゃあ、質問を変えようか。

君の姓は、袁だね？」

それを聞くと、子供は少しためらって、かすかにうなずいた。
袁譚の予想通りだ。

（この子はやっぱり、袁家の血を引いてる……。
でも、今生き残っている袁家となると……もしかして、父上の隠し子？）

袁譚は知っている。

父である袁紹の死後、正妻の劉氏が妾とその子供たちを皆殺しにしたことを。

（きっとこの子も、そうやって殺されたか……。
それを逃れて青州に隠れていて、戦に巻き込まれたのかも）

自分は確かに袁紹の長男である。

しかし、袁紹の子供を全て把握している訳ではない。

だいたい、青州の太守にされて遠ざけられてからは把握しようがないではないか。

（まったく、おれを後継者にしてくれたら、ここまでひどい事はさせなかったのに）

そう考えると、腹が立ってきた。

そもそも自分たちがこうなった原因は、父が三男を溺愛して自分を邪険にしたからではないか。

だって、自分は今まで父に孝行してきたし。

何も悪いことなんてした覚えがないし。

なぜ自分が邪険にされねばならなかったのか、袁譚には全く分かっていなかった。

「お兄ちゃん、怒ってるの？」

子供が少しだけ距離をとって、袁譚の顔色を伺うようにつぶやいた。

いつの間にか、怖い顔になっていたらしい。

「いや、おまえの事じゃないんだ。

ちよっと兄弟のことを考えててさ」

袁譚は慌てて愛想笑いを浮かべ、子供を安心させるように組んでいた腕をほどいた。

それでも近寄ってこない子供の顔を、袁譚は改めて見つめた。やっぱり、自分の兄弟たちに似ている。

（やれやれ、こいつも父上の偏愛と劉氏のせいでひどい目に遭ったのかな）

もしかしたら、そのせいで怯えているのかもしれない。

袁譚は少し試してみるつもりで、子供に話しかけた。

袁譚く霧の中にて（3）（後書き）

袁譚の記憶として劉氏が兄弟を皆殺しにしたと書きましたが、実はこれは実際に演義にあるシーンです。

劉氏は袁紹の死後、五人の妾とその子供を皆殺しにし、「死んでも袁紹に会えないように」とずたずたに切り刻んだとあります。そんな奥方と毎日暮らしていたら、それこそ袁紹の日常は針のむしろだったと思われます。

袁譚、麁屋にて（前書き）

袁譚は弟の袁尚と骨肉の争いを起こしたあげく、曹操に滅ぼされてしまいました。前回の会話にも、袁尚に対するよからぬ感情がにじみ出ています。袁尚についても、紹介を置いていきます。

袁尚・エンシヨウ 顕甫 ケンホ 生年？ 没年207年

袁紹の三男で最も愛されていたが、袁紹が後継者を決めずに没したため袁譚と争うことになる。曹操に追い詰められて遼東（満州南部）辺りまで逃げ延びたが、助けを求めた先の武將に首をはねられた。

袁譚、廢屋にて

「なあ、おまえは正妻の子？」

それとも妾の子？」

とたんに、子供はびっくりと肩をすくめた。

驚いて見開いた目に、恐怖の色が浮かぶ。

袁譚は、子供の警戒を解くように語り掛けた。

「正直に言っていていいんだよ、おれは妾の子供だからって殺したりしないから」

それを聞くと、子供はうつむいて、ためらいがちに答えた。

「ぼくは……妾の子……」

（やっぱりか！）

袁譚は心の中で手をたたいた。

やっぱり、この子は父袁紹の妾の子なんだ。

ならば、この子をひどい目にあわせたのは誰か、すぐに想像はつく。

間違いない、劉氏にやられたんだ。

「そっか、それじゃあ、おまえも小さいのに苦労したんだな。

大丈夫だよ、おれは逆らわない奴には優しいんだ」

そう言って子供の顔をのぞきこんだとたん、袁譚は思わずびっくり

と身を引きかけた。

子供は、心の中まで見透かすような暗い瞳で袁譚を見ていた。

子供が、ゆっくりと小さな口を開いた。

「じゃあ、お兄ちゃんは、ぼくたちをどうするの？」

間延びしたような、心に引っかかる声で、子供は袁譚に問いかける。

「殺さないで、どうするの？」

兄弟として、大切にしてくれるの？」

袁譚の背中に、冷たい何かが流れた。

自分がこんな風に質問されるのは、全くもって想定外だ。

子供は、蛇が這うように気味の悪い声で、言葉を続ける。

「ぼくを撫でてくれる？」

ぼくのお母さんとも仲良くしてくれる？」

好きな時に、お父さんとお母さんに会わせてくれるの？」

妙に具体的な例えに、袁譚はようやく答を考え付いた。

この子供が望んでいる生活が、どんなものか分かった気がした。

だが、素直にうんとは言えない。

この子は妾の子。

名門袁家を継げる子ではないのだから。

（かわいそうに、まだ小さいから世の中のことがよく分かってない

んだ…。

ま、こういうことは小さいうちに教えてあげないとね。
それが、嫡流の兄の務めだし)

一度ぐくりと唾を飲み込んで、袁譚は自分が思ったとおりの答を口にした。

「殺さないで、生きていけるようにはしてあげる。
でも、君のお母さんと仲良くするとか、いつでも両親に会わせてあげるってのは無理だな」

その瞬間、子供の目に涙が浮かんた。
それでも、袁譚は諭すように平然と続ける。

「だって、君のお母さんはおれのお母さんから父上を奪ったのと同じだろ。」

それに、君は、表に出られないってことは、平民の子だろ」

血と膿と錆にまみれた世界で、裏の袁紹……本初は煮えたぎる怒りに頭を抱えた。

さらに表の袁紹から伝わってくる痛みが、千の針のように心を刺しぬく。

このセリフは、かつて自分も言われたことがある。
そして、今のように何度も絶望のどん底に突き落とされた。

(おのれ、袁譚め……!!
迷うことはない、こやつもどうせわしを救うことなどできぬわ!
わしが壊れる前に、さっさと地獄に落とせ、袁紹!!!)

袁譚は、突然ひどい眩暈を覚えた。

周りの景色がぐにやりと歪み、平衡感覚がおかしくなる。

ただ、目の前で泣く子供の声だけがいやにはつきりと聞こえる。

うええーん　会わせて　お父さん　お母さん！

その声も、耳を貫くような耳鳴りにかき消されていく。

意識を失う寸前に、すぐ近くで父の声が聞こえた気がした。

袁譚……。

それは、深い悲しみと、憎しみのこもった声だった。

袁譚く廃屋にて（後書き）

袁譚は「当主の嫡子」というエリート意識から、「妾の子」を名乗る子供の望みを拒絶してしまいました。

さあ、本格的なサイレントヒルが始まりますよ。

袁譚と霧の中にて（4）（前書き）

袁紹と袁譚には、幼い頃の状況に大きな差があります。袁紹が妾の子として疎まれていたのに対し、袁譚は初めから名門の嫡子であり長男だった訳です。二人の育つ環境には、当然のように差が出てきます。

だから袁譚は袁紹の辛さを理解することができません。それが、ここからの惨劇につながっていきます。

袁譚く霧の中にて（４）

どれくらい時間が経っただろう。

袁譚は同じ廃屋の中で、目を覚ました。

さっきの子供が、心配そうにのぞきこんでいる。

「お兄ちゃん、寝ちゃったの……？」

さっきの会話が嘘のように、あどけない表情だ。

「ん、ん……？」

袁譚は、起き上がって子供の顔を見つめた。

さっきあんなに泣き喚いていたはずなのに、子供の顔にそんな気配はない。

（夢……だったのか？）

どうも頭がぼんやりしている。

子供は、そんな袁譚を気遣うように告げた。

「あのね、お兄ちゃんが寝てる間にね、霧がちよつとましになったの。

でも、まだ変なのが時々いるから、僕一人じゃ怖くて……」

その言葉につられて、袁譚は窓から外をのぞいた。

確かに、霧は薄くなっている。

白いカーテンの向こうに、別の建物の影が見えた。

しかし、その霧はさつきより、ずっと冷たく感じられた。

霧がほおを撫でたとたん、袁譚はひどい悪寒を覚えてふるふる
と震えた。

（出ていきたくないなあ……）

袁譚は本能的にそう思った。

しかし、ずっとこんな所にいてもらちが明かないことは分かっている。

霧がましになったなら、とりあえず外の様子だけでも見に行くべきだろう。

「しょうがないなあ、あんまり足手まといになるんじゃないぞ」

着物のすそをぎゅっと握っている子供に、袁譚は語りかけた。

平民の子でも一応兄弟なんだから、さすがに放り出す訳にはいかない。

扉を開けたとたん、霧が流れて袁譚の体を撫でる。

視界は多少きくようになったが、まだどこからか不気味な声が響いている。

小さな弟を後ろにくっつけたまま、袁譚は白い世界に踏み出した。

廃屋を出ると、そこは建物に囲まれた道の入り口であることが分かった。

袁譚自身、どこをどう走ってきたのか分からないが、とにかくここは市街地のようだった。

「離れるなよ、見失ったらもう面倒見きれないぞ」

部下に命令でもするように言って、袁譚はすたすたと歩き出した。

子供は袁譚の速さに、小走りについて来た。

それでも、袁譚が歩く速さを変えることはなかった。

だって、なんで名族の自分が平民の子に気を遣わなきゃいけないんだ。

面倒見てやるだけで、十分慈悲深い兄じゃないか。

しばらく行って、袁譚はあることに気づいた。

これだけ歩いているのに、誰一人すれちがう人間がいない。

街は、まさにゴーストタウンといえるほど静かだった。

（家の中にいるのか……？

でも、大声で呼んだらあの変な犬が集まってくるかも）

しーんとした空気の中、袁譚の足音と子供の荒い息遣いだけが響く。

子供はちよつと前から疲れてはあはあ言っているが、袁譚にはどうでも良かった。

突然、子供の足音が止んだ。

「ん？」

ふしぎに思った袁譚が振り向くと、子供は青ざめた顔で立ち止まっていた。

袁譚は少しいらついて、子供を急かした。

しかし、子供は立ち止まったまま袁譚のななめ前を指差した。
子供の足は、がくがくと震えている。

「お、お兄ちゃん……それ……」

袁譚が気付いて振り返ると、視界の隅に着物のすそが映った。

（なんだ、人がいたのか）

袁譚は単純にそう思って、声をかけようと向き直った。
しかし、事はそう単純ではなかった。
霧の中から現れたのは、人間のように人間ではなかった。

顔に、無数の釘で板が打ち付けられている。
明らかに釘が頭から突き出しているのに、それでも息遣いが聞
こえてくる。

それにこの召使のような上品な着衣…袁譚には見覚えがあった。

（馬鹿な、有り得ない……どうして化け物がこの服を着てるんだよ
！？）

袁譚の脳裏に、汝南の実家での記憶が蘇る。

名門袁家に仕える、誇り高き召使たち。
ちようどこんな服を身にまとして、家のために献身的に働いて
いた。

そして、さすが名門のお坊ちゃまですと袁譚に頭を下げて……。

その感触すら覚えているのに！

袁譚の背中を、嫌な汗が流れ落ちた。

さっきの犬の方がまだましだった。

訳の分からない怪物の中に見知った部分を見つけるのがこんなに怖いことだったなんて、袁譚は初めて気付いた。

怪物は足を引きずりながら、近付いてきた。

手には、血のしたたる包丁を持っている。

（こ、殺される前に殺してやる！）

袁譚は素早く剣を抜き放ち、怪物に斬りかかった。

迷うことなく走りこんで胸に突きたて、そのまま横に振りぬく。

どす黒い返り血が、袁譚のほおにかかる。

きれいな刺繍のスカートをひらつかせて、怪物が倒れた。

（ふん、化け物の分際で！）

袁譚の心に、罪悪感など生まれようはずがない。

だってこいつらは、尊いこのおれの体に傷をつけようとしたんだぞ。

その罪は、当然のごとく死刑に値する。

それにもし人間だったとしても、こんな下賤な奴らの命など塵みたいなもんだ。

袁譚く霧の中にて（4）（後書き）

招かれた人物が違っても、出現するクリーチャーは基本的に変化しません。招かれた場所によって出現するものはありますが、誰がそこに行っても同じ怪物が出現します。

ただし、その怪物をどのように解釈するかは招かれた人物によって異なりますが。

袁譚く霧の中にて（5）（前書き）

出現するクリーチャーには、袁紹の悪夢がこめられています。袁譚は袁紹に近い人物であるがゆえに、その怪物にこめられたメッセージをかなり正確に読み取ることができます。

袁紹ほどではないにしろ、袁譚も父が妾の子であるという状況から過去に不快な思い出をいくつも持っているからです。

袁譚く霧の中にて（5）

だが、塵も積もれば山となるという言葉袁譚は知っていたらうか。

子供が、突然震えながら袁譚にしがみついた。

「お、お兄ちゃん……後ろ、横も！」

はっと気がついて周りを見回せば、霧の向こうから同じような化け物が次々と歩いてくる。

幸い動きはのろいようだが、この数には恐怖を覚えた。

子供を突き放したのは、ほぼ反射的な行動だった。

「自分の命ぐらい自分で面倒みる！」

そう言い放つや否や、袁譚は子供を置いて走り出した。

こんな子供を連れていたら、怪物に捕まって殺されてしまう。

おれは名門袁家の当主なんだぞ。

こんな下賤の血が入った袁家の恥に付き合って落とすような安い命は持ち合わせていないんだよ。

背後で、かん高い子供の悲鳴が響く。

普通の人なら後ろ髪を引かれるこの声にも、袁譚の心が揺れることはなかった。

子供は、去っていく袁譚の後姿を呆然と眺めていた。期待はあまりしていないつもりだった。

しかし、こうして衝撃を受けてみると、やっぱり自分は息子への期待を捨てきれていなかったのだろう。

怪物たちが寄ってきて、次々と刃物や鈍器を振り下ろす。

「楽になりたい、楽になっていい、楽になればいい」

違和感のない痛みの中、子供の意識が薄れていく。

生きていたころは、死ねば永久に意識を失うのだから、楽になれると信じていた。

だから、自分を殺せば自分は楽になれるのだと……。

この怪物たちは、そういう負の感情から生まれた。

結局は、自分を終わらせたがる自分の一部だ。

死んでもなお自分を殺そうとやってくる辺り、やっぱり自分と同じようにあきらめが悪いようだ。

（でもね、僕は今ので分かったよ。

あきらめないと、どうしようもないことだってあるんだ……。

それをあきらめることが、どんなに辛くても……ね）

子供の体から流れた血が、霧に溶けるように消えていった。

どのくらい逃げ回っただろうか。

袁譚は霧に包まれた市街地をとぼとぼ歩いていた。

怪物は、倒しても倒してもきりが無い。

街から出ようと思っても、逃げるのに精一杯で方向など把握す

るひまもない。

そのうえ、さつき子供を見殺しにしてから、なんだか空気が重くて余計疲れが増してきた。

「はあ……はあ……一体いつまで続くんだよ？」

聞く人も無いのに無意味にぼやいて、袁譚はふと足を止めた。袁譚はいつの間にか、大通りに面した角に立っていた。

その大通りの風景に、袁譚は懐かしいものを感じた。

（あれ、おれはこんな通りを前歩いたことがある……？）

霧に包まれてはつきりとは見えないが、確かに袁譚の記憶と重なる部分があった。

もっとも、その記憶自体もかなり昔のことなので、薄い霧がかかっているようなものだが。

まだ袁譚が幼い頃、袁譚は両親に連れられてこの通りを歩いた。父袁紹と、若くして死んだ実の母に連れられて……。

あのころは、あんなに仲のいい家族で、幸せだったのに。

どこからおかしくなったのだろうか？

今更答を出しても、遅すぎる話ではあるが。

ただ、今袁譚がいるこの通りは、汝南にある実家の近くにあったことは確かだ。

（おれはいつの間にこんな所まで来たんだろう？）

袁譚は思わず疑問を覚えた。

自分は、青州で死んだはずだ。

それがこんな短時間で、汝南まで来られる訳がない。

これは、本当に現実なのか……？

そんな疑問が袁譚の頭をかすめた。

街には人が全くいない、現実のようで実は違うのかもしれない。

その疑問をさらに濃くするようなものが、目の前に現れた。

「これ、おれの実家だ……」

大通りを歩いていくと、思い出のとおり場所に、汝南の実家があった。

今はもう、戦乱に巻き込まれて、そのうえ袁氏を滅ぼさんとする攻撃のせいになくなっていたはずなのに。

実家は、思い出のとおりにきれいなままでそこにあった。

（どうしよう、入ってみようか？）

袁譚は迷った。

袁譚は怪物に追いかけ回されて、かなり疲れている。

ここに入って門を閉めれば、一時のやすらぎを得られるかもしれない。

（でも……）

それでも袁譚の胸には、底知れぬ不安があった。

この場所は現実にはないはずの場所、入ったら何が起こるか分から

ない。

外見だけ昔のままで、中まで同じかどうかは分からない。

そして何より袁譚をためらわせるものは、その家から発せられる不吉な気配だ。

霧はその家から立ち上っているようで、袁譚を招こうとするように揺れる。

家の門は、歓迎するように全開になっている。

（どうしようか……？）

こういうところで決断できないのは、父ゆずりの優柔不断な性格のせいだろう。

そうして迷ったあげくにどつぼにはまってしまつところも、また……。

考え込んでいる袁譚の背後で、かすかに犬の唸り声が響いた。

袁譚は飛び上がって驚いた。

「ひゃあああ!？」

すつとんきような悲鳴を上げて、袁譚は思わず目の前の門に飛び込んだ。

そして慌てて門を閉めようとしたとたん……門はまるで意思あるもののように、勝手に勢いよく閉まったのだ。

「あつ……!」

袁譚は実に間拔けな声を上げたが、もう遅かった。

押しても引いても、門は石のように微動だにしない。

霧が、袁譚を包むようにわざめいた。

もう逃がさない。

もう放さない、と。

袁譚は己の軽率な行動を後悔したが、もう後の祭りだった。

しかし、これから袁譚が味わう事になる後悔に比べれば、こんなものはまだ序の口だった。

袁譚く霧の中にて（5）（後書き）

袁譚は子どもを自分の親戚であると認識していながら、見捨てて逃げてしまいました。前章の公孫？にとって見捨てた子供はあくまで他人だったことを考慮すると、袁譚のほうがむしろ悪質であるといえます。

つまり、それだけ袁紹の怒りとこれからの悪夢も公孫？よりずっとひどいものになるということです。

袁譚の悔恨の館にて（1）（前書き）

さて、袁譚が悪夢の館に閉じ込められてしまいました。

公孫？編でも悪夢の館は出てきましたが、今回の館はそれとはまた別です。袁紹が悪夢を顕在化させた館は複数あり、それぞれに含んでいる悪夢の成分が異なります。それでも共通のクリーチャーは出現するので、今回は公孫？編で出現したクリーチャーの言葉を袁譚が正しく訳してくれます。

袁譚の悔恨の館にて（１）

袁譚は、ともかく家の中を歩き回ってみることにした。

あれだけ固く門が閉まっていれば、外の怪物は中に入っては来られないだろう。

ならば、外に出る方法は休みながらゆっくり考えればいい。

しかし、その甘い考えはすぐに打ち破られた。

怪物は、家の中にもいたのだ。

しかも外にはいなかった、口がばかいかい人型の怪物までいた。

それはぼろきれのように破れ果てた着衣をまとった、白けた肌の怪物だった。

腐ったような臭いのする息とともに、モゴモゴと何かをつぶやく。

「シヨウのくせニ……けがらわシイ……」

それを聞いたとたん、袁譚の頭の中で古い記憶がフラッシュバックした。

怪物が何を言っているかは、瞬時に解読できてしまった。

娼のくせに、汚らしい！

それは袁譚が幼い頃、汝南の実家で聞いた言葉だ。

まだ袁譚が物心ついたばかりの頃、つい遅くまで起きていた時に偶然耳にした。

袁家の重鎮である白けた肌で太り気味の男が、父に向かって言い

放った言葉だ。

娼って、何？

なんで父上が言われるの？

それからしばらくして、袁譚は父の本当の生まれを知った。

父は袁家の当主、袁成の嫡子ではない。

本当は、袁逢が娼婦に産ませた子供だったんだ。

それを知ったとたん、袁譚は体中をかきむしりたいほどの嫌悪感に襲われた。

あんな汚らわしい下賤の血が、自分の体にも流れている……？

生まれた時から袁家の嫡子として育ってきた袁譚には、耐え難い屈辱だった。

そのやり場のない怒りは、自然と父に向かった。
すなわち……父上が自分を汚したんだ、と。

それから袁譚は、心の底で父を軽んじるようになった。
ただ、現状で父に逆らうとまずいので表には出さなかったはずだが……。

怪物の言葉は、袁譚にとってこの上なく不快な記憶を呼び起こさせた。

袁譚は激昂して、怪物の口に剣を突っ込む。

「人間じゃないなら黙ってろ！！」

しかし、怪物は喉を貫かれながらも、鋭い爪で袁譚の体を引っか

いた。

幸い胴体は鎧が覆っているので大した傷にはならないが、袁譚はひどい恐怖を覚えた。

生命力もさることながら……怪物の自分を傷つけようとする執念が恐ろしかった。

「はあ……はあ……ちくしょう!!」

袁譚は夢中で怪物を切り刻んだ。

さっきの召使の怪物といい、なぜこの怪物たちは自分の過去を掘り返すのだろう。

見ず知らずの化け物の方が、よっぽど気楽だったに違いない。

（こいつらの出所は、一体……？）

それを考えると、袁譚は身の気がよだつような感覚に襲われた。

この怪物たちを生み出している者がいるとすれば、そいつは袁譚の近い人物であるに違いない。

でなければ、どうしてこんな手の込んだ嫌がらせができるものか。

（袁家に恨みをもつ人物……か……？）

袁譚は反射的にそう思った。

だが、それが自分の家族だとは思わなかった。

自分をひどく苦しめるこの悪夢が、よもや自分を生み出したのと、

同じ親から生み出されたなどとは……。

袁譚は、館の中を歩き回った。
館の中はだいたい袁譚の記憶に似通っていたが、異なる部分も各所にあった。

例えば、庭に植えられた木が小さかったり、自分の部屋がなかったり。

まるで、袁譚がいなかった時のように。

袁譚の存在とつながる痕跡はことごとく存在しなかった。

（何だ、これ……？

ここは、おれがいない袁家……？）

そんな中、袁譚は祖母の部屋を見つけた。

その部屋は、雰囲気的に老人の部屋とは思えなかった。

一言で言えば、若いのだ。

（違う、おれが知ってるこの部屋はこんなじゃなかった！）

ただ、祖母にも若い頃があったことは袁譚の頭でも想像がついた。

もしかしたら、ここを生み出した主は、過去の袁家を知っているのかもしれない。

その部屋には、怪物はいなかった。

袁譚は休憩も兼ねて腰を下ろし、ふとそばにあった手紙に手を伸ばした。

筆跡は、間違いなく祖母のものだ。

＜袁逢様へ

率直に申しますと、私はあの子を甘やかしたくなかったのです。あの女のように、ただ暴力を振るった訳ではありませんわ。あれは、れっきとした躰の一環なのです>

袁譚には意味の分からない内容だったが、袁譚はとりあえず読み進めた。

<私もできる事なら、あの子を傷つけたくはありません。でも、あの子はあの娼婦を思っ泣き叫ぶ限り、名門の当主にはなり得ませんわ。

私はあの子の幸せを思っ、心を鬼にしているのです>

袁譚にも何となく雰囲気は分かった。

祖母は、名族にふさわしくない行動をする子供を正しくしつけようとしているのだろう。

なぜ死んだ祖母の手紙がここにあるのかは、想像がつかないが。

おかしいところは他にもあった。

袁逢様……それは父袁紹の実父であり、袁譚の祖父である。

彼は、袁譚が幼い頃にとくに他界しているはずだ。

だとしたらこれは、過去の手紙？

（だったら、あの子っ……！！）

袁譚の背筋に寒気が走った。

祖母のいうあの子という存在に、袁譚は心当たりを覚えてしまった。

「うわあああ……！」

袁譚は叫び声をあげて、弾かれたように部屋から飛び出した。もう一時も、あの部屋にいたくない。

あの手紙の内容を想像すると、気が狂ってしまいそうだ。

（そんなはずない……！）

父上は半分平民かもしれない、だけど……心は生まれながらに高貴なはずなんだ！

おれの父親は名族の当主なんだ、娼婦みたいな人間のクズのために泣き叫んだりしないんだよ……！）

袁譚は湧き上がる疑念を……確信に変わる前に振り払って走った。

生まれながらに名族のお坊ちゃんであった袁譚には、父のそういう態度が不快で許せなかった。

袁譚と悔恨の館にて（1）（後書き）

今回の館は袁紹が最終的に落ち着いた三人目の母がいる家です。そのため、元になった家は自動的に袁紹に受け継がれ、そこで袁譚が生まれました。つまり、この館は袁譚と袁紹の共通の思い出が詰まっている訳です。

次回では、ついに袁譚が父袁紹と対面を果たします。

袁譚と悔恨の館にて（2）（前書き）

ようやく袁紹と袁譚が対面を果たします。

しかし、ここまで読み進めた方は知つてのとおり、袁紹は表と裏の二人に分かれてしまっています。ここで袁譚の前に現れた袁紹は、果たしてどちらなのでしょう？ストーリーの流れと会話から推理してみてください。

袁譚の悔恨の館にて（2）

わき目もふらずに走っていると、たいていろくな事にならない。
袁譚はいくつ目かの角を曲がったとたん、何かに足をとられて派
手に転んだ。

「いった……ていうか、臭い！！」

袁譚の足にからまっていたのは、人の足ほどに太いミミズのような怪物だった。

そしてそれは、鼻が曲がるほど臭かった。

まるで、その場所一帯が廁になったような臭いだ。

怪物は頭をもたげて、口から糞尿の臭いがする液体をばらまいた。

「うぶっ！？」

思わず口を押さえた袁譚の周りに、ぼたぼたと赤黒い液体が降り注ぐ。

あまりの悪臭と屈辱に、袁譚は世界が歪むような眩暈を覚えた。

何で、自分がこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

おれは、何も悪いことした覚えなんてないのに。

袁譚はもう、逃げるしかなかった。

普通に攻撃してくるならともかく、これはすさまじく陰湿だ。

相手の体を傷つけるのではなく、

相手の心をすり減らして折るためだけの攻撃。

生まれながらに名門の長男であつた袁譚には、今まで全く縁のないものだった。

いや、少なくとも自分がされたのは初めてだった。

袁譚は息がきれるまで走って、ほうほうの体で開いていた部屋に逃げ込んだ。

「ちくしょう、何だよあいつは……！」

このおれに、あんな屈辱を味わわせやがって。

おれは別に悪いことなんてしてないんだよ！」

それに応えるように、部屋の奥から幼い声が響いた。

「悪いことしなくても、やられることはあるよ。

だってぼくは、実際にああいう目に遭つたんだから」

声のした方に目をやって、袁譚は愕然とした。

「お、おまえ……どうしてここに！？」

そこにいたのは、ついさっき袁譚が見捨ててきた子供だった。

確か、怪物に囲まれたまま放り出して、断末魔を聞いたような覚えがあるが……。

あの状況から、どうやって逃げ出してここまで来たというのか。それも無傷で。

だが、袁譚にそこまでのことを考える頭脳はなかった。

袁譚の心にわき上がったのは、いらぬ心配をさせられたという理不尽な怒りだった。

袁譚はにわかに憎たらしい顔をして、子供をのしり始めた。

「おい、てめえ逃げ道を知ってやがったな！？」

だったら、なんでおまえより尊いこの兄を連れて行かなかったんだよ！

兄弟の命を何だと思ってやがる！！」

自分が兄弟と思しきこの子を捨てて逃げたことなどすっかり忘れて、袁譚は子供を責めた。

しかし、子供はさっきのような弱気ではなかった。

「ええー、だって、先に逃げたのはお兄ちゃんじゃん？」

まるで袁譚をからかうように、意地悪く言い返してくる。

袁譚のことなどまるで敬っていないような、人を小ばかにした表情。

袁譚は、自業自得にも関わらず一瞬で堪忍袋の緒が切れてしまった。

「てんめええ！！！」

袁譚は大人気ないほど激昂して、子供につかみかかった。

しかし、袁譚の手が子供に届くことはなかった。

さつき街中の廃屋で経験したあの感覚……世界が歪むような感覚が袁譚を襲い、阻んだ。

周りの景色がぐにやりと歪む。

袁譚はひどいめまいを覚えて、立ってもいられず床に這いつくばった。

そんな袁譚の目の前で、子供は平然として口を開いた。

「あーあ、やっぱり徹底的にだめだなあこいつは。

こんなのを後継者にと一瞬でも思った自分に反吐が出そうだ」

「な、何、言つて……？」

袁譚には、子供の言っている意味が分からなかった。

だってこの子は自分の兄弟で、後継者争いとかそういうのには加わる資格もないはず……。

その間にも、部屋の異変は進行していく。

きれいだった壁や床が腐ったようにぼろぼろになり、血のような汚れがはびこっていく。

子供の足元を中心に、穢れた血が意思あるように流れ出す。

「おまえの頭の悪さは分かってるつもりだったけどね。

いくつヒントを出しても、結局ぼくが誰なのかは分からずじまいでさー！」

その言葉に、袁譚ははつとして子供を見上げた。

子供の体が歪み、だんだん大きくなっていく。

それと同時に、声も徐々に低く、大人びていく。

「私は確かに妾の子、だけとおまえの兄弟などではないよ。

おまえの体には、直接私の血が流れているんだから。」

だって私は、おまえの……」

お父さんなんだから

袁譚「悔恨の館にて」(2) (後書き)

さあ、館が裏世界に変貌しました。

サイレントヒルでも、表世界より裏世界の方が危険度は増しますが、その分悪夢の主の心を強く感じ取ることができます。この血塗られた世界で袁譚は何を感じ取り、どのような真実に直面するのか……恐怖もシナリオも加速して、そろそろ中間地点です。

袁譚と悔恨の館にて（3）（前書き）

袁譚は前章の公孫？よりだいぶ力が弱く、かといって頭もあまりよくありません。しかし、袁譚は袁紹と血のつながりがあるため、袁紹も何も知らせずボス敵と戦わせるようなことはしませんでした。そんなことをすれば、袁譚が負けることは目に見えているからです。袁紹たち死人は、肉体的ダメージを受けても死にはしません。が、体がある程度再生するまで行動不能になってしまいます。そういう意味では、悪夢の主を撃破するという選択肢も脱出を目的とするなら有効といえるでしょう。

袁譚と悔恨の館にて（3）

袁譚の手をついている床は、さっきまでのきれいな床ではありえなかった。

木が腐り、ほこりが積もり、さらに血のようなシミが一面にはびこっている。

「ちょ……待ってよ、そんな……！」

しかし、何より袁譚を震え上がらせるのは、周りの変化ではなかった。

袁譚は、目の前に立つ者の姿を驚愕の表情で見つめていた。

それは、袁譚がよく知っている男だった。

「嘘でしょ、こんな……！」

それは袁譚が人生の大部分を共に過ごして来た近しい人。

この世に袁譚を生み出してくれた、かけがえのない存在の片割れ。

袁譚の目の前に佇むそれは、父である袁紹その人であった。

袁紹は、凍てつくような冷たい目で袁譚を見下ろしている。

その体は血にまみれて、どす黒い気配に満ちている。

袁紹は動けない袁譚に向かって、怒りのにじんだ笑みを浮かべて言った。

「久しぶりだな、譚よ。」

いや、初めまして……と言っておこうか。
おまえは表のわししか知らぬであろうからな」

そう、これは裏の袁紹だ。

袁譚の知らない、袁紹のもう一つの心だ。

さつきあつさりと見殺しにした子供……表の袁紹とは、似て非なる存在だ。

「父上……なのですか？」

袁譚はやつとのことで、父に向かう言葉を紡いだ。
目の前にいるものは確かに父の姿をしている。
しかし、表情や雰囲気は自分の知る父とはかけ離れている。

「ああ、そうだ。

名家の建前が邪魔で表には出られなかったが、ずっとおまえを見ておったぞ」

袁譚には、父が何を言っているのか分からなかった。
ただ、これが自分の知る父ではないことは感じられた。
袁譚は、勇気を振り絞って目の前の父に声をかけた。

「あなたは、本当に父上なのですか？」

本当に父上なら、なぜおれをこんな目に遭わせるのですか？」

袁譚の率直な疑問に、袁紹はニヤリと口角を上げた。

「のう、譚よ。

わしがなぜ未だに彷徨っておるか分かるか？」

わしはな、訳あつて死んだ後に冥界への道が見えなかったのだ」

袁譚の質問に対する答ではない。

だが、それでも袁譚は聞き耳を立てた。

（冥界への道……おれが死んだ直後に見たあの光の道のことか？）

なまじ実体験があるだけに、無視はできない言葉だ。

袁譚もそれを見失つてここに来たのだ。

もしかしたら、父はそれに関する何かを知っているのかもしれない。

「譚よ、わしは生きている時、辛いことがあつて魂が割れてしまったのだ。

おかげで、冥界への道が見えず彷徨うはめになった」

袁紹は遠い目をして、悲しそうに告げた。

「辛くて、苦しくて、そうでもしなければ生きていけなかったのだ。

だが、この魂を直さねば冥界には行けぬ。

誰かが、このわしのありのままを認めて、救ってくれなければな」

袁譚は、黙つてそれを聞いていた。

（そうか、それで父上はここから逃れたくておれを呼んだのか……！）

だつたら話は早い。

自分が父上を救ってあげれば、全て解決するのではないか。
袁譚は頼もしい笑みを浮かべて、父に向かって言った。

「ならば、この譚が父上をお救いしましょう！
だって父上は譚をこの世に生み出してくれたのです、父を助けぬ
子がどこにおりましようや！」

その言葉を聞いたとたん、袁紹は声を上げて笑い出した。

「くつくく…ははははは！！」

「な、何がおかしいのですか！？」

袁譚が慌てて言い返すと、袁紹はさもおかしそうに答えた。

「おまえがわしを救う、だと？

何を血迷っておる！

おまえはわしを蔑み、ひどい目にあわせた張本人だろうが！！」

「へ？？」

あっけにと取られている袁譚に、袁紹は低い声で告げた。

「妾の子は、家を継ぐのもだめなら父母と暮らすことも許さぬ。

自分が助かるためなら、平気で見捨てる程度の存在。

妾の腹から生まれたこのわしを、ついさっき見殺しにしたのは誰
だ！！」

それを聞いたとたん、袁譚の顔からさーっと血の気が引いていっ
た。

父の言うことは確かだ。

ついさっき、自分はあれと同じ姿の子供を見殺しにした。

（や、やばい……！）

袁譚は、思わず後ずさっていた。

しかし、そんな袁譚を阻むかのように、背後から何者かが袁譚をはがいじめにしたのだ。

目の前で、血塗られた姿の父が歩み寄る。

「のう譚、わしは魂が割れてしまつてなあ……」。

おまえの知っている表のわしと、この血塗られたわしと今は二人いるのだ。

表のわしは……そう、おまえの後ろにいる」

そのとたん、袁譚を羽交い絞めに使っていた手がぐつと袁譚の首をつかんだ。

がくがくと震える袁譚の背後で、低く、怨念に満ちた声がする。

せつかく、育てたのに。

せつかく、死んでからもチャンスを与えてやったのに。

「ひつ……！！」

袁譚の喉から、くぐもつた悲鳴が漏れる。

今自分の後ろにいるのは、自分を育ててくれた方の父上……？

「大丈夫だ、わしらはもう死んでいるから、怪物に引き裂かれても死にはせん。

ただ、表のわしはまだおまえにやられた分の体の再生が追いつい

ていなくなてなあ……。

「ま、顔を合わせて見るといい」

袁譚と悔恨の館にて（3）（後書き）

袁譚は、袁紹との会話の中では正しい選択肢を選んだはずでした。にも関わらず、すでにバッドエンドのフラグが濃厚になっています。これは、袁譚がここにくる過程で行動の選択を間違え続けたためです。少年の姿をとって現れた表の袁紹との会話、怪物に追われて彼を見捨ててしまったこと……具体的に挙げればきりがありません。それ以前に、袁譚は遠い過去にとんでもない過ちを犯しています。それがどのような過ちかは、読み進めていただければ分かるでしょう。

袁譚の悔恨の館にて（4）（前書き）

苦手な方には先に警告しておきますが、今回からはかなり残酷描写が入ります。具体的に思い浮かべてしまいやすい方はお気を付けてください。

袁譚、悔恨の館にて（４）

裏の袁紹はそう言ったが、袁譚には振り向くことなどできなかった。

父の顔を見るだけでも恐ろしくて、そのうえ自分が何をやらしかたかなど……。

そんな袁譚のあごを、後ろから回された手がつかんだ。
首をねじ回すような強引さで、袁譚の顔を横に向けていく。

「のう譚、久しぶりだなあ？」

視界に入った袁紹の顔に、袁譚は体中を震わせて絶叫を放った。

「ひっぎいやああああ！！！！」

父の顔は、ところどころ肉がえぐれて、骨が露出していた。
ほおを食いちぎられて、奥歯まで見える歯を怒りに噛み締めている。

間違いなく、あの怪物どもにやられたのだ。

表の袁紹は、尻餅をついた哀れな息子の襟首をつかみ上げて言った。

「い、痛かったぞ……譚……。
あれは痛かった！」

袁紹の目から、真紅の涙が流れた。

怪物どもに、いいように弄り殺された。
無慈悲に去っていく、息子の後姿を見ながら。

「……分かるか、譚よ？」

自分の子に捨てられる親の気持ちが！

自分の子に蔑まれる、妾の腹から生まれた親の心が！」

袁譚は、何も言えなかった。

体中が馬鹿になったみたいに震えて、言葉が出なかった。

（こ、こんな……はずじゃ……！）

これは大失敗だ。

今までうまくいくと思っていてその通りにならなかった事は多いが、それでここまで怖い目に遭ったのは初めてだ。

何より、袁譚は今まで、その感情をうまく隠して生きてきたはずだ。

それを最後の最後で、死んでから暴かれてしまうなんて。

表の袁紹の手が、袁譚のほおを滑る。

「譚よ、おまえがわしをどう思っていたかはよく分かった。
痛いほど分かった。

だから、今度はわしからおまえに痛みを返す番だな」

袁譚の背後で、ひたひたと忍び寄る足音がする。
裏の袁紹が、歩み寄ってきたのだ。

（い、嫌だ、どうしてこんな……！！）

袁譚は頭の中で叫んだ。

父が自分をどうする気かは、容易に想像がつく。

きっと、さっきの父上みたいに、怪物どもにぐちゃぐちゃにいたぶられるんだ。

もしくは、父上自身が自分に手を下す……？

（ど、どうしてこんな目に遭わなくちゃいけないんだ！

おれは名門袁家の当主だぞ？　ちゃんとそれに見合う生き方をしてきたはずなんだ。

そのおれを、こんな目に……こんな妾腹の野郎のせいで！！）

「ふざけんなあ……！」

父の手を振り払ったのは、一瞬のことだった。

目の前で、表の袁紹が体勢を崩して倒れる。

案の定、体が再生しきっていないせいで本来の力が出ないようだ。

行きがけの駄賃にその手を踏みつけながら、袁譚は脱兎のごとく部屋を飛び出す。

捕まってたまるものか、それだけが袁譚の心を占めていた。

（だって、父上におれを傷つける権利なんかあるものか！

おれは半分平民の父上より高貴な血が濃いんだ……おれは生まれながらに父上より偉いんだよ！）

初めてそう思ったのは、いつの事だっただろうか。

もう、思い出せないくらい前だし、思い出せないくらいのなりゆきだったような気がする。

夜、実家の庭で、年下のあの子に向かって……。

袁譚の脳裏に、おぼろげな記憶が蘇った。

だが、今の袁譚にはどうでもいいことだ。

今はとにかく、あの化け物から逃げることだ。

袁譚が出て行った部屋で、表の袁紹は床に倒れたままぼろぼろと涙をこぼしていた。

自分はあるひどい息子に期待をかけていたのか。

あまりの悔しさに涙が止まらない。

「だから言っただろう、あやつはしょせん自分の事しか考えておらぬと」

裏の袁紹が、顔をのぞきこんで告げる。

「おまえはそれを知っていながら、それでも希望を捨てられなかった。」

だが、それも今日で終わりだ。

あやつはわしが処分するから、おまえはここで休んでいればよい！」

その残酷な言葉に、表の袁紹は黙ってうなずいた。

これは、自分の本音だ。

いくら表で取り繕っても、隠しきれない自分の意志だ。

今はそれがはっきりと分かっている。

袁紹の内に積み重なった恨みは、親子の情よりも深かった。

「譚よ……」

走り去った裏の自分に聞こえないように、表の袁紹は息子の名を呼んでいた。

袁譚と悔恨の館にて（４）（後書き）

袁譚は己の罪を責める父親を拒絶し、一人逃げ出す道を選んでしまいました。しかし袁譚が抗えば抗うほど、袁紹の怒りは増していきます。袁譚が抜けられない底なし沼にはまってしまっていることは、読者の皆様の目にはもう明らかでしょう。

そのうえ袁譚は未だに、自分が父親に対して何をしているのかが分かっていません。そのため、今回袁紹は袁譚にそれを教えるために、悪夢を振るうことになるのでした。

袁譚「悔恨の館にて」(5) (前書き)

スーパー悪夢タイム!!!

時を超えた手紙や他人の記憶の追体験はサイレントヒルでもよく使われている手法です。今回は残酷&恐怖描写が当社比150%で、袁紹の過去の悪夢が暴きだされます。

追いつめられる袁譚の恐怖をじっくり味わってやってください。

袁譚、悔恨の館にて（5）

血塗られた廊下を、袁譚は必死で走っていた。

足を踏み出すたびに、床を覆う血と膿が何ともいえない感触でねばりつく。

「はあ、はあ、はあ！！」

前方から、背後の扉から、横道から、次々と怪物が襲い掛かってくる。

なりふり構わずに必死で切り払って、傷つきながらも走り続ける。

だが、それも無駄な抵抗にすぎなかった。

自分が父を拒絶し、蔑んだ時点で、もう運命は決まっているのだ。

「譚どこにいるのだ？」

後ろから、父の声が響いてきた。

「おまえはわしに会いたかったのだろ？」

たっぷり相手をしてやるぞ。

さあ、親子で一騎打ちだ！！」

その声には、喜びすらにじんでいた。

父は、自分を追い詰めることを心底楽しんでいるのだ。

床がぎしぎしときしみ、足音が迫ってくる。

袁譚は大慌てで横道に入って姿をくらまし、どうにか父をまこうとした。

そして、怪物がないのを確認して厠に隠れたとたん、世界が歪んで幻を見た。

後ろから、誰かが自分の頭をつかんでいる。

汚物にまみれた厠の穴が、目の前にある。

鼻をつく悪臭が胃の中まで入り込んで、吐き気を催してくる。

「おい、手を放すんじゃないぞ」

背後で、誰かが言った。

「袁家の恥とはいえ、一応長男だからな。
本当に糞尿に落ちたりしたら、袁逢様にどんな仕置きをされるか」

「でもよう、奥様はこいつを痛めつけたくてたまらないんだろ？
だからって、何でおれたちがこんな臭い所に一緒にいてやらなきゃいけないんだ。

……このガキさえいなければなあ！」

別の男の声が聞こえ、頭に爪が食い込む。

彼はただ、強烈な悪臭と吐き気をこらえながら、屈辱にまみれた時間を過ごすしかなかった。

その恐怖と苦痛が、現実のもののように袁譚を貫く。

体がかめて嗚咽しながら、袁譚は悟った。

これは父の記憶なのだ、と。

気がつけば、目の前に何かがうごめいていた。
よく見れば、先程臭い体液を撒き散らしていたのと同じ怪物ではないか。

（こいつ……もしかしてここで生まれたのか？）

太いミミズのような姿でのたうつそれは、目も鼻も無残に縫い付けられて塞がれていた。

もしかしたら、こいつらは父上の苦痛が生み出したもの？

袁譚がそれを考えたとたんに、扉のすぐ近くで父の声がした。

「どうした譚、一騎打ちが怖いのか？

仕方がないだろう、ここの怪物は全てわしの一部なのだから。

それも含めて一騎打ちだ！」

袁譚は震え上がった。

父が、すぐそばにいるのだ。

廁には、扉が一つしかない。

気付かれて先手を打たれたら、逃げ場がない。

袁譚は悲鳴をあげたいのを必死でこらえて、父の足音が過ぎ去るのを待った。

どのくらい時間が経っただろう、袁譚は耳を澄まして遠ざかっていく足音を聞いていた。

目の前の怪物は、さっきからじりじりと近寄ってきている。

本当はもう少し父上が遠くに行ってくれとありがたいんだけど……。

（潮時か。

たぶん今なら大丈夫なはず……！）

袁譚は一息ついて、勢いよく扉を開けて厠を飛び出した。

とたんに、周りをうるついていた犬の怪物が一斉に飛び掛つてきた。

「し、しまった……！！」

それでも走りぬけようとする袁譚の体を、悪意に満ちた鋭い爪と牙がかすめる。

その瞬間、袁譚はまた幻を見た。

頭から、肉料理の食べかすをかぶっていた。

後ろから、その臭いをかぎつけた犬たちが追いかけてくる。

まだ子供であつた袁紹の、己の体より大きくて怖い犬たちが。

それでも大人から見れば小さめの犬なのは、袁紹が間違つても命を落とさないようにとの配慮なのだろう。

あの氣にくわないおばさん……袁術おじさんの母上がやったんだ。

そう考えると、確かに父上はかわいそうなのかもしれない。

（あんな目に遭わされたなら、名門を憎んでもしょうがないのかも……）

何とか幻覚を振り切つて、袁譚はかすかにそう思った。

これほど無神経な袁譚にもそう思わせるほど、この記憶にこめられた恐怖は大きかった。

それからも、袁譚は家のあちこちで袁紹の忌まわしい記憶を味わった。

命令ですから我慢してくださいねと、袁紹を囲んで痛めつける召使たち。

父袁逢がいない夜の孤独と恐怖。

先の見えない霧につつまれたような毎日。

袁譚はそのたびに怪物に傷つけられながら、それでも自分を信じて逃げ回った。

自分は何も悪いことをしていない。

だって、父上を傷つけたのは袁術おじさんとその母上じゃないか。

だったら自分が罰を受ける理由なんて、これっぽっちもないはずだ。

袁譚と悔恨の館にて（5）（後書き）

今回紹介された袁紹の悪夢で、それぞれのクリチャーがどのような意味をもっているか分かっていただけだと思います。全ては名家のしがらみによって袁紹が体験した地獄の日々に通じています。

そんな父の思い出を追体験させられながらも、まだ自分の潔白を信じ続ける袁譚… 次回は、袁譚の運命を決めた最初にして最大の過ちが語られます。

袁譚と悔恨の館にて（6）（前書き）

ここまで読み進めていただいた皆様には、袁紹と袁譚のすれ違いがはつきりと分かってきていることでしょう。袁紹は袁譚が生前から自分を蔑んだことを根にもっていて激しい攻撃をかけますが、袁譚は自分は生前何も悪いことをしていないと思っています。

いじめなどでは、加害者はそれをすぐ忘れてしまっても被害者はずっと覚えているもの。袁譚の最初の過ちが、袁紹の悪夢の中で語られます。

袁譚、悔恨の館にて（6）

気がつくと、袁譚の眼前に中庭が広がっていた。怪物はいないようだったので、袁譚は足早にそこを走り抜けようとした。

しかし、その瞬間、またも幻が袁譚を襲った。

星がきれいな夜だった。

自分は、酔いを醒まそうとふらりと中庭に入った。そこで目にしたのは、まぎれもなく少年であった頃の袁譚の姿だった。

袁譚は、こちらに背を向けて誰かと話していた。傍らには、もう少し年下の少年がいる。

（あれは……いとこの袁耀だ！）

袁譚はその少年に見覚えがあった。

あれは間違いなく、袁術おじさんの息子、袁耀だ。そして、確かに自分はこんな夜に袁耀と話した記憶がある。

「ふーん、袁譚は自分が袁家を継げると思ってるんだ？」

袁耀はいかにも馬鹿にするような口調で袁譚に言った。こついうところは、父親の袁術にそっくりだ。

「あはは、従兄さまは夢見がちですねえ。だいたい、従兄さまには平民の血が混じってるんだから、ボクが

上に決まってるじゃないか！

あなたのお父様だって、ボクのお父様よりずっと下賤に近いくせに」

そうだ、こいつは自分の血筋を徹底的にあざけりやがったんだ。

そして、それにムキになって対抗した自分、袁譚が口にした言葉は……。

「ふん、それはあくまで父上の話だろ。」

おれはおれで、父上とは違うんだよ！」

今思い出すと、袁譚の背中に冷や汗が流れた。

「いいか袁耀、父上は半分平民だけどな、おれは4分の1平民なんだ。」

確かに父上の血は穢れているかもしれないけど、おれには袁家を継ぐのに十分な濃さの高貴な血が流れてる。

てめえの父親がおれの父親より上だからって、おれまで一緒にするなよ……！」

そうだ、この時から、自分は父上を蔑むようになったんだ。

傲慢な従弟にばかにされて、それが腹立たしくて……。

その時は成り行きで口にしたただけなのに、いつの間にかそれが本心になっていた。

自分の身に降りかかる不幸を、全部父の生まれのせいにして。

しかし、自分もそれまで口には出さなかったが、同じような気持ちを無意識に抱いていたのかもしれない。

だから袁耀に問われた時、自然とああいう答が出たんだ。

長らく忘れていたことを思い出しながら、袁譚は自分が犯したとてつもなく大きな間違いに気付きつつあった。

自分は今、父袁紹の記憶を追体験しているのだ。

その中で、自分と袁耀の会話を第三者として聞いているということは……。

あの夜は、確か袁家の皆が集まって宴を開いていたはずだ。自分はどうせ誰も聞いてないだろうと思ってあんな事を口にしたが……。

父上が、自分と袁耀の会話をこんなにはつきり覚えているということは……。

聞かれていたんだ、父上に。

幻が消えてからも、袁譚はしばらくそこから動けなかった。

体が鉛のように重くて、足が動かない。

驚愕のあまり息がつまって、うまく空気が吸えない。

（じゃあ、何だ……父上は、初めからおれの気持ちを知っていて……！？）

袁尚をかわいがったのも、おれを冀州から追い出したのも、あの夜から全部父上の中では決まってたってことか！？）

思い返してみれば、父袁紹は自分と顔を合わせたくなかったのかもしれない。

本心ではあんなことを思っていないながら、上っ面だけですり寄ってくる息子が嫌でたまらなかったのだろっ。

自分がもし同じ立場だったら、そんな息子は首をはねてしまっかもしれない。

袁譚は身勝手にも、そう思った。

「ふふふ、どうした譚よ？

懐かしい夢でも見たか？」

後ろから、砂利を踏みしめる足音とともに、父の声が響いた。

「ち、父上……！！」

袁譚は飛び上がりそうなくらい身をすくめた。

振り返るとそこには、血塗られた剣を片手にゆっくりと歩み寄ってくる父がいた。

「ひいひい……じ、じいめんなさいい……」。

あの、そ、その……っ、つい出来心で……！」

袁譚は震えの止まらない口で、うまく聞き取るのも難しいような声で謝った。

それを聞くと、袁紹はふと足を止めた。

だが、袁紹の口から漏れたのは、許しなどではなかった。

「くつくつく……ふふふあはははは……！」

突然、袁紹は声高らかに笑い出した。

そして、尻餅をついている袁譚を見下ろして嘲うように言った。

「ああ……おかしい！」

おまえ、まさか今思い出したのか？

わしはあの夜からずっと苦しみぬいていたのに、そうか……おまえには忘れるほどちっぽけな事だったか……！」

どうやら袁譚の中途半端な謝罪は、袁紹の怒りの炎に油を注いだようだ。

いや、この期に及んで謝っても、父が許してくれるとは思えない。

袁譚は、こっそりと地面の砂利を握った。

「ふふふ、息子よ、覚悟！」

袁紹がすぐ目の前で剣を振り上げた瞬間、

「せりゃあああ……！」

袁譚は渾身の力をこめて、父の顔めがけて砂利を投げたのだ。幾多の固い小石が、袁紹の顔に襲い掛かる。

「うぐっ！？」

父が思わず顔を覆って目を伏せた隙に、袁譚は再び脱兎のごとく逃げ出した。

どうせ許してもらえないなら、もう謝る必要はない。

力の限り父に抗い、できれば倒してここから抜けてやる。

そうだ、おれは自分より下賤な父上に地獄に落とされる筋合い

はないんだ。

袁譚と悔恨の館にて（6）（後書き）

今回、また袁家でマイナーな人物が出てきました。袁耀^{エンヨウ}は袁紹の異母弟である袁術の子で、袁譚のいとこに当たります。父である袁紹と袁術の関係は子世代にも影を落としていたため、袁譚がこのような不遜な言葉を浴びせられてしまった訳です。

しかし、袁譚が父を本当に尊敬して愛していれば、あの場面でもこんなセリフが出ることはなかったでしょう。これが袁譚の最初にして最大の間違いです。

袁紹の追憶の実家にて（1）（前書き）

父と己の罪を拒絶し、袁譚は逃げまどいます。

そんな袁譚を襲う最後の悪夢が、祖母の部屋にありました。今回は袁紹がまだ幼かった頃、袁紹の魂が割れるきっかけになった悪夢が語られます。

袁紹の追憶の実家にて（１）

再び暗い廊下を走りながら、袁譚の足はある場所に向かっていた。

館が変貌する前、怪物がいなかった祖母の部屋だ。

あの部屋は、どうも特別な感じがする。

もしかしたら、あの部屋にここから抜け出すための何かがあるのかもしれない。

いや、何もなくても、怪物がない部屋でしばらく休めればそれだけでもいい。

今はとにかく、体勢を立て直さなければ。

袁譚は、父が後ろにいない事を確認して、するりと祖母の部屋に滑り込んだ。

そこには、確かに袁紹にとって重大な何かがあった。

うまくいけば、確かにここから出ることもできたかもしれない。ただし、袁譚の手に負えるものかどうかは別として。

部屋に入ったとたん、袁譚はまたもや幻に襲われた

きれいに整った部屋に、凜とした高貴な女性がたたずんでいた。

その女性は、袁譚が知っているよりずっと若い姿をしていた。間違いない、これは祖母、袁紹の３人目の母親だ。

「さあ紹、今日からおまえは私の子になるのですよ」

突然父上と引き離された袁紹の前で、知らない女の人が出た。

「安心なさい、おまえが私の子になってくれる以上、あの女のような乱暴はしません。」

だからおまえも、私のことを母として敬うのですよ」

女の人は、微笑みながら袁紹のほおを撫でた。

しかし、袁紹は体を固くしたまま、震えていることしかできなかった。

ここに来る前、袁紹は2人目の母に、袁術の母に虐げられていた。

父はそんな袁紹の身を案じて、父の兄袁成の養子に出してくれたのだ。

しかし、これまで袁紹は名家の威光をあがめる人々からひどい扱いを受けてきた。

袁紹の心には、その恐怖が刻み込まれていた。

目の前の新しいお母さんが、自分をいじめない保障がどこにあるというのか。

「ひっ……！！」

袁紹の目に、涙が浮かんだ。

それは確かに新しいお母さんに失礼だったかもしれない。

しかし、袁紹にとってその反応はごく自然な、傷跡をかばうのと同じような行動だったのだ。

「まあ、どうしたの？

お母さんよ」

女の人は困ったように、袁紹の頭に手を置いた。
しかし、袁紹はがたがたと震えたままだ。
女の人の表情が険しくなってきた。

袁紹は、ただただ恐怖に支配されていた。
これまでの経験からして、こういう身分の人がこういう顔にな
ったあと、自分の身に起こるのは……。

袁紹には、想像するだけで耐えられなかった。
そして、あるうことが母親になってくれるその人の前で叫んでし
まったのだ。

「うあああ助けてえーっ！！ お母さーん！！！」

袁紹の目から、堰をきったように涙があふれた。
立ってもいられずに尻餅をついて、両手ではうように後ずさる。

「ご、ごめんなさい……ごめんなさい！！
いい子にするからぶたないで、お母さんを殺さないで！！
いや、助けて……もう嫌あーお母さんに合わせてえーっ！！！」

袁紹は完全にパニックに陥っていた。
目の前の人が誰でも鬼に見えるほど、袁紹の心は磨り減ってしま
っていたのだ。

そんな袁紹の反応に、新しい母親はぎりつと唇を噛んだ。

この子は、私を母親だと認めてくれない。
この子が私の子になってくれなければ、私はどうなるの？

彼女は、袁紹が自分の子になってくれることが本当に嬉しかった。

だってそうすれば、自分は袁家当主の妻としてきちんと役割を果たせるのだから。

彼女は、袁成との間に子がなかった。

袁家の跡継ぎを生むという崇高な役割に選ばれておきながら、未だそれを果たせていない。

袁紹が養子に来るといふ話は、そんな彼女にとって天の助けだった。

（だから私が、袁紹を袁家の跡取りとして立派に育てなければ！）

彼女は、半ば脅迫のようにそう思っていた。

だって、自分は今まで子がいないことで肩身が狭い、申し訳ない思いをしてきた。

あんなぼんくら息子でも、腹に宿した袁術の母がうらやましくて気が狂いそうだった。

袁紹を立派に育て上げれば、自分はやっとそれから解放される……。

だけど、袁紹は自分を受け入れてくれない。

このままでは私は一生楽になれないかもしれない。

この子さえ言うことを聞いてくれれば……彼女の頭に、血が上っていった。

袁紹く追憶の実家にて（１）（後書き）

この三人目の母とのシーンは、袁紹の運命を決めるほどの重大な悪夢であるため、書き綴るうちについ長くなってしまいました。

次回もこの悪夢の後半、それが終わるといよいよ袁譚のボス戦です。脱出を決意した袁譚はその意思を貫き通すことができるのか、愚かで高慢な息子の結末を見届けてやってください。

袁紹の追憶の実家にて（２）（前書き）

袁紹の記憶はまだ続きます。今回のキーパーソンとなっている袁紹の三人目のお母さん、彼女もまた心に悪夢を抱えた人間でした。

今でも結婚して子供ができないと両家の親から重圧がかかるというのに、子供を残すことが最高の孝行とされる儒教の国で、しかも名門の血統を託されて結婚した彼女が、子がないことでどれだけ精神的に追い詰められていたかは想像に難くありません。

そんな彼女の妄執が袁紹を追い詰め、悪夢は連鎖していったのです。

袁紹の追憶の実家にて（2）

「お静かになさい！！」

気がついたら、彼女は目の前の子供に手を挙げていた。

ほぼ無意識にその手は振り下ろされ、ぱーんと乾いた音が響く。

「いやあああ！！」

袁紹はじんじん痛むほおをかばうように、体を丸めた。

そこで初めて、彼女は自分が子供を殴ったことを認識できた。

（あ、あら……？）

彼女は一瞬、自分が何をしたか理解できなかった。

自分は子供を殴った、袁紹はそれを怖がって泣いている。

これでは、まるで……。

あのいやらしい袁術の母と同じじゃないか。

（ち、違う、これは違うのよ……！

私は、あんなひどい事をしないわ！）

彼女は、自分を説得するように言い放った。

「そう、これは賤なのよ！

あなたが将来袁家の当主になって、輝かしい人生を送るための！」

彼女はそう言いながらも、袁紹に手を挙げては振り下ろしていた。

だって、妾の子として蔑まれて一生を送るよりは、袁家の当主として生きたほうが幸せでしょう？

あなたのために言っているのよ。

これはあなたを幸せにするための、愛の鞭なのよ。

そう自分に言い聞かせながら、彼女は袁紹に暴力を振るった。
しかし、袁紹にとってその行為は袁術の母と同じだということに
変わりはない。

養子に出しても一向に良くならない袁紹の様子から、袁逢はついにそれを察知するに至る。

そこで彼女が袁逢に出した弁明の手紙が、先程袁譚が読んだものだ。

＜私もできることなら、あの子を傷つけたくはありません。＞

でも、あの子はあの娼婦を思っ泣き叫ぶ限り、袁家の当主にはなりえませんわ。

私はあの子のために、心を鬼にしているのです＞

変化は、袁紹の方にもあった。

疲れ果てた袁紹に、彼女はこう言ったのだ。

「私を母だと思いなさい。そうしたら、私はもう殴らないから。

1日耐えれば次の1日、3日耐えれば次の3日は優しいお母さん
でいてあげるから。

あなただって、毎日痛いのは嫌でしょう？」

始めは袁紹も、信じていなかった。

しかしある日、もうどうでもいいと思って彼女をお母さんと呼んだら、本当に殴られずに撫でてもらえた。

（ああ、こうすれば痛い目に遭わずに済むんだ！）

それに気づいた袁紹の行動が変わるのは早かった。

袁紹はそれから毎日のように彼女を母上と慕い、孝行するようになった。

しかし、本当の母のことを忘れることはできなかった。

袁紹は毎日のように、夜になると本当のお母さんに会いたいとこっそり涙を流した。

それが彼女に見つかるのに、それほど時間はかからなかった。

ある夜、袁紹がまた実の母を思って泣いていると、側に彼女が来て言った。

「あのねえ、お母さんはここにいるんだから、もう泣くのはおやめなさい。

あなたを産んだのは誰でもない、私になったの。

あなたの母はただ一人、私なのよ！」

袁紹は泣き止んで顔を上げたが、彼女に向けられた視線は明らかに不信感をにじませていた。

それがまた、彼女のプライドを傷つける。

この子だけは誰にも渡さない。

この子は私以外の誰の子でもない……。

それに、嫉妬もあった。

袁逢に気に入られた娼婦はこうして袁紹を産んだのに、どうして袁家当主の妻である自分は子供に恵まれなかったのか。

そんなどろどろとした感情が、彼女に残酷な言葉を吐かせた。

「あなた……もしかして、またあの地獄の日々に戻りたいの？ 私だけをお母さんとして、ちゃんと袁家の嫡子として務めてくれれば、あなたはもう地獄に落ちなくてすむのに……」

彼女は袁紹に、実母を捨てればあなたは救われると説いたのだ。

これまで散々地獄を味わってきた袁紹に、選択の余地はなかった。

だが、それは同時に袁紹自身の心をも裏切る行為だった。

実の母を忘れるなんてそんな事はできない。

しかし、このままでは自分が生きていけそうにない。

迷った末、袁紹は実の母を慕う心を悪夢とともに切り離れた。

そうして、袁紹の魂は表と裏の二つに分かれた。

現世で生きるために、冥府への道を閉ざすことになった。

袁譚は、息も絶え絶えでその苦痛を味わっていた。

知らなかった、父がこんな体験をしていたなんて。

袁紹の気持ちは袁譚には理解できないが、無理矢理体に押し込まれる苦痛だけは十二分に理解できた。

袁紹の追憶の実家にて（２）（後書き）

袁紹の悪夢の追体験は、ひとまずここで終わりです。

次はいよいよ袁譚のボス戦ですが…招かれた場所が前章と異なっているため、ボス敵も同じではありません。

しかし、勘の良い読者の皆様の中には、すでにボス敵が誰なのか分かっていてもいるかもしれません。

袁譚と悔恨の館にて（7）（前書き）

記憶の再生がとぎれて、ついにボス戦です。

これまで自分が名家の嫡子であることに驕り、高貴な血筋だから持ち上げられて当たり前と思って生きてきた袁譚に、高貴な血筋だからこそその悪夢に縛られた女の妄執が襲いかかります。

果たして袁譚は、無事に勝利し脱出することができるのでしょうか。

袁譚と悔恨の館にて（7）

「かわいい、私の子……」

ようやく幻覚から開放された袁譚の耳に、祖母の若い声が響いた。

目の前に、艶やかな着物のすそが見える。

「祖母上……？」

信じられないながらも顔を上げた袁譚は、一瞬で凍りついた。

目の前で袁譚を見下ろしていたのは、明らかに人間ではありえない姿をしていた。

彼女の、首から下は人間の形をしていた。

しかし、首から上はこの世の生物とは思えない禍々しさを放っていた。

彼女の顔には、真っ白でつるつるしてのっぺらぼうのようだった。

そこに、真っ赤な紅をさした、妙に上品な口だけが存在している。

そして頭から伸びる長い黒髪は、その一束一束が蛇のようにうねり、それぞれの先端は手になっていた。

「かわいい、ワタシの子……」

袁譚を抱きしめようとするように、頭から伸びた無数の手が鉤爪のついた指を広げた。

その瞬間、袁譚は無様に屍餅について叫んだ。

「うぎゃああー！！！！」

袁譚は恐怖にすくんだ体を何とかばたばたと動かして、後ずさり始めた。

それを見たたん、怪物の口元が怒ったように歪む。

「お静かニナサイ！！」

怪物の叫びとともに、無数の手が袁譚の体をつかんだ。力が抜けて足腰立たない袁譚を、無理矢理立たせるように引っぱり上げる。

「そう、ワタシの言うトオりにすればいいの……。
かわいいワタシの子！」

鋭い鉤爪が袁譚の体にぎりぎり食い込む。

（そうか、こいつは……父上の中の祖母上なんだ！
きつと父上には、祖母上がこんな風に見えていたんだ！！）

袁譚は苦しい息の下でそれを悟ったが、もはやどうすることもできなかった。

怪物は袁譚の足や腕をつかみ、恐怖で硬直しているそれを強引に動かそうとする。

「ぐっふっ……ひ、ぎい……！！」

袁譚が悲鳴を上げると、怪物は優しくたおやかな手つきで袁譚の顔を撫でた。

母が子のほおを撫でる、丁寧なしぐさ。

泣く子をあやそうとでもしているのだろうか。

たとえそれが子にとって恐怖しか生まなくても、彼女の心に迷いはないのだ。

「は、放せこの化け物！

放せつつつてんだよー！！」

袁譚はどうか剣を握った手の手首だけを動かし、怪物の髪から伸びる手に斬り付けた。

その手は予想に反して、豆腐のように柔らかく、すんなりと切れた。

「ああアア……！！」

怪物がか細い悲鳴を上げる。

袁譚はその声に少しだけ罪悪感を覚えたが、それはさらなる悪夢の始まりに過ぎなかった。

怪物は痛みにも身を悶えながら、それでも凜とした口元を袁譚に向けた。

「諦めません……いかに拒まれヨウと、ワタシは……！！

ワタシは、袁家の母！！

おまえは何がナンデモ、ワタシの子になるのデスー！！」

怪物の叫びとともに、切ったばかりの傷口がぼこりと盛り上がった

た。

ゆらゆらとうねる髪の束が伸びて、切り口からメキメキと新しい手が生えてくる。

それは、執念だ。

子を孕めなかった彼女の、袁紹にかける執念の手なのだ。

さすがの袁譚もこれには驚いた。

「う、うわ、放せ放せよおお!!」

暴れる袁譚に腹を立てたのか、怪物が普通に肩から生えた手を袁譚に向かって突き出す。

上品な着物の袖から、透けるように白い肌がのぞいた。

と、突然その肌が不自然な形に盛り上がった。

「コレはワタシの役目……ワタシを縛る鎖……今度はアナタが、ワタシの身代わりになって頂戴!」

白い肌を破って血糊とともに現れたのは、太い鎖だった。

先に重たそうな分銅までぶら下がっている。

そう、彼女自身も、名家の役割に囚われた身なのだ。

だから今度はその鎖を子供に押し付けて、自分は楽になろうというのだ。

痛々しく自身の血に濡れた何本もの鎖を、怪物は袁譚めがけて振りかぶった。

重い金属音とともに、冷徹な分銅が袁譚に迫る。

すでに他の怪物どもに散々傷つけられ、満身創痍の袁譚には、ひ

とたまりもなかった。

どす黒い鉄の塊が、無慈悲に打ち込まれる。
時折袁譚の体から響く鈍い音は、骨が折れる音なのだろう。

「ひゅっ……ぐざい……！」

断末魔の悲鳴すら無残にとぎれさせて、袁譚の意識は奈落の底に落ちていった。

ただ怪物の叱咤する声だけが、袁譚の耳に残っていた。

誰かがおれを引きずっている……。

袁譚の意識がかすかに浮上した時、袁譚は襟首を何者かにつかまれて引きずられていた。

もちろん袁譚を助けるつもりなどない。

墓から掘り出した死体を無理矢理連れ歩くような、強引な手だ。

「譚よ……」

その手の先から、父の声がした。

だが、抵抗するのもおつくうなほど、袁譚は疲れ果てていた。
体中がバラバラになったように痛くて、指一本動かせなかった。

袁譚、悔恨の館にて（7）（後書き）

哀れ、袁譚は祖母の幻影に勝てず、逆に倒されてしまいました。
しかし、死人は死なないため、負けてもここで終わりにはなりません。

袁紹は動けなくなった息子を引きずって、どこに連れて行くのでしょう。次回、表と裏、二人の袁紹の袁譚への思いが語られます。

袁譚（金網の部屋にて（前書き）

重傷を負って行動不能になった袁譚を、袁紹は引きずっていきま
す。

すぐ地獄落としにしないのは、父親としてまだ言いたいことが残
っているからです。

今回はきりのいいところが見つげづらかったので、いつもより若
干長いです。

袁譚と金網の部屋にて

次に袁譚が目覚めたのは、妙に熱気のコもった場所だった。仰向けに横たわる袁譚のほおを、下から吹き上げる熱い風がなでていく。

「ここは……？」

袁譚はかすれた声でつぶやいた。どうにか動く指で床をなぞると、どうやら固い網のようになっていると分かった。

熱風は、その網の間から吹き出していた。

妙に生臭い熱風……。

それは汗ばむように熱いのに、どこか背筋が凍るような寒気を引き起こした。

「譚よ……」

すぐそばで、父の声がした。

慌てて振り向くと、血塗られた方の父がそこにいた。

起き上がることもできず震える袁譚のほおを、父の冷たい指がなぞる。

袁紹は物憂げな表情で袁譚を撫でながら、独り言のように言葉を紡いだ。

「実に短い間だったな、こちらのわしがおまえとこうして話すのも。」

まあ、それももう終わりだ……。
おまえはおまえの心にふさわしい、卑しい場所に落ちて頭を冷や
すよいい」

袁紹は、さび付いた床の金網をゆつくりと指でなぞった。

「この下に何があるか分かるか？」

そこがおまえにふさわしい場所、そう、地獄だ」

「地獄……？」

ぼんやりとしたまま聞き返す袁譚に、袁紹はうつろな表情のまま
答える。

「そう、地獄だ……罪を犯した者を苦しめ、罰するための場所だ。
わしはおまえのせいで、生きながら地獄を味わった。

そこまでのことをしたおまえを、のうのうと安らかな冥界に行か
せると思ってたか？」

袁紹の声に呼応するように、地の底からひととき強い熱風が吹き
上げた。

その風がほおを撫でるたび、袁譚は刺す様な痛みを覚えた。

体中が痛いのにそれでも際立って感じられるほど、その感触は
苦痛だった。

袁紹はぐつたりとした袁譚の指先を、そつと持ち上げてもてあそ
んだ。

「ああ、全くもって虚しいものだ。

わしの精をもって生まれた子が、わしはいらぬと言っただから……。

子を成すということが、これほど虚しい結果になるとは思わなかったぞ」

袁紹は闇よりも暗い目で袁譚の顔をのぞきこみ、告げた。

「のう譚よ、わしがいらぬということは、どういう意味が分かるか？」

わしの存在から生まれたおまえ自身の魂もいらぬ……そういう事だろう？」

「！！」

ぼんやりしていた袁譚の目が、急に見開かれた。

袁譚にとって、その事実が初耳に近かった。

今までも聞いたことはあったけれど、これほど実感を伴って耳に響いたのは初めてだった。

「ちよ、待って父上……おれはそんな意味で……！！」

かすれた声で慌てて言い返す袁譚を遮って、裏の袁紹は無慈悲に続ける。

「もうよい、おまえの偽りはもうたくさんだ！

その身がいらぬというならば、望みどおり地獄に捨ててやる。

要らぬ者にふさわしく、地獄で悪魔に食われているとよい」

そう言って、裏の袁紹はさっと手を振り下ろした。

袁譚の背中が、ふいに支えを失った。

「え……？」

金網が外れたことに気づいた時、袁譚の体はすでに落下を始めていた。

動かない体が、すうっと下に沈んでいく。

目の前で、裏の袁紹がかすかに笑った。

唇が、さようなら、と動いた。

その瞬間、袁譚はようやく己の運命を確信した。

自分は父に逆らったせいで、地獄に落とされるのだ、と。

しかし、落ちていく袁譚の体をつなぎとめるものがあつた。

何者かの手が、袁譚の手首をつかんで引き止める。

すぐるような思いでその手の主を見上げて、袁譚は驚愕に目を見開いた。

それは、袁紹だつた。

血塗られていない、表の袁紹だ。

ずっと自分を育ててくれた、優しい父なる袁紹だ。

「あ、お父上……！」

「愛しい譚よ……！」

二人の声が、重なった。

「譚、おまえという奴は……なぜ、こんなになるまで気付かなかったのだ……！」

表の袁紹の目から、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれた。
冷たい死者の涙が、袁譚のほおに降りかかる。

「いや、おまえに何も言えなかったわしにも落ち度はある。

しかし、わしはおまえと……こんな終わりを迎えたくなかった
！

我が血を継ぐ子を成しておいて、この手で地獄に落とす方の身にもなってみよ！！」

袁紹の嗚咽とともに、手の震えが袁譚に伝わっていく。

袁譚は、あっけにとられて何も言えなかった。

父が、自分のために泣いている。

自分と別れるのが悲しくて、泣いている。

あんなにひどい事をした自分を、まだ泣くほど愛してくれている。

「父上……なぜ……？」

そう問うだけで精一杯だった。

ここまでされても愛してくれる父の心は、袁譚には想像もつかなかった。

袁紹はそんな袁譚に、優しく微笑んで答えた。

「子は親を無条件で愛するとは限らぬ……だが、その逆はどうであるうな。

わしにとって、おまえを初めて腕に抱いた瞬間は最高に幸せであ

った」

その答えに、袁譚の眼からどつと涙があふれた。
今まで数十年生きてきて、気付かなかったぬくもりがそこにあった。

袁紹は親として、袁譚を無条件に愛してくれていたのだ。

問題は、袁譚が名家の誇りにかまけてそれを感じようとしなかったことだ。

ゆえに、今袁譚は地獄への穴にぶらさがっている。

「愛しい譚よ……こんなにも愛して育ててきた我が子。
だが、わしにはもうおまえを助けてやれぬ！」

袁紹はぎゅっと袁譚の手を握り締めた。

「おまえは愛しい我が子……だが、おまえへの恨みはもはや愛情な
どで抑えられるものではない！」

愛しい……が、許せぬ！ 裏は生前からおまえを許す気などなかった！

そのおまえがすぐそばで媚を売るのが辛くて、不快で、苦しくて……！！」

だからせめて、生きているうちに手にかけないように、
青州に出して、お互いのために遠ざけていた。

「のう譚よ、おまえはこれから地獄に落ちる、これはもう決めたことだから止められぬ。」

しかし、最後に賭けをしようではないか」

「賭け？」

袁譚は思わず首をかしげた。

これから地獄に落とされるのに、この上何を賭けるというのだらう。

袁紹はかすかに震える声で、袁譚に告げた。

「わしはこれからも、人に助けを求めて魂を直す手伝いを求めていく。

だが、もしおまえが言うように、わしが卑しく劣った人間で……救われる価値のない人間ならば、いずれわしも救われずに地獄に落ちることとなるう」

袁紹はしばらくだすようなかすれた声で、言葉を続ける。

「もしも、おまえの考えが正しくてわしが地獄に落ちることになったら……その時は必ずおまえを見つけ出して、ずっと側にいてかわいがってやる。

同じ釜で煮られ、同じ串に刺されて、絶え間ない責め苦の中でずっとおまえを愛してやる！」

袁譚のほおの上で、袁紹の涙と袁譚の涙が混じり合う。

袁紹の手をかすかに握り返して、袁譚は心から父に感謝した。

父の心にあるのは、憎しみだけではなかった。

こんなに深い憎しみの底で、まだ自分を愛せる人間がいることが袁譚には信じられなかった。

袁譚と金網の部屋にて（後書き）

高慢で家の名誉におごり高ぶった袁譚を、妾腹の子としての袁紹は許せず、しかし父親としての袁紹は一生懸命愛そうとしました。袁譚に対するこの感情のもつれには、袁紹の割れてしまった魂が非常に具体的に表れています。

今回、袁譚編の最終話で、袁紹は袁譚に一つの提案をしました。これからの物語に続いていく重要な内容を含んだ最終話、どうぞお見逃しなく。

袁紹と金網の部屋にて（前書き）

袁譚編もついに最終話です。

袁譚は袁紹の一族ということのでつい気合が入ってしまい、前章よりだいぶ長くなってしまいました。しかし前章は単なる導入だったので、本編であるこの章からはこのくらいの長さでいいのかもしれない。

父の悪夢に囚われて袁譚は最期に何を思うのか、親子の愛が滲み出す最終話です。

袁紹、金網の部屋にて

袁譚の手が、力を失いずると滑っていく。
もう、別れの時も終わりだ。

袁紹は最後に息子の顔を目に焼き付けるように、袁譚の顔を真っ直ぐ見つめて言った。

「最後にこれだけは言っておく。
短い間であったが、わしに希望をくれてありがとう」

それは、感謝の言葉だった。

「おまえは、終わりのない暗闇にいたわしに、最初に光を見せてくれた。

たとえその後さらなる闇に放り込まれようと、あの十数年、おまえがわしの希望であったことは確かなのだ。

おまえのおかげで、わしは人生の何分の一かを希望と共に過ごせた。あの幸せな時間は、何物にも代えられぬ！」

袁譚と袁紹の手が、徐々にほどけていく。

最後に名残惜しむように互いの指先を確かめあつて、袁譚は地獄への暗い道に沈んでいった。

「さらばだ、譚！
また会おう！！」

すごい速さで遠ざかる父が、涙ながらに叫んだ。

袁譚はもう豆粒のようになった父に向かって、しっかりとうなずいた。

こんな優しい父を、何で自分はあるのに蔑んでいたんだろう？

袁譚は落ちながら思った。

その理由は、今の袁譚には分かっていた。

自分も祖母と同じように、名家という形だけの価値に囚われていたんだ。

それに構うあまり、かけがえのない親子の愛すらも見えなくなっていたんだ。

分ければ分かるほど、自分の愚かしさに反吐が出そうだった。
そんな自分を最後まで愛してくれた父が、神様のように思えた。

（次に生まれ変わる時は、また父上の子供がいいな……）

袁譚は短い人生を思い返して、そう思った。

（今度こそ、父上に一杯孝行して、親子で幸せになるんだ。
父上がどんな生まれでも、父上だから大好きって言うんだ。
それで、父上にたくさん撫でてもらうんだ……）

地獄でまた会いたい、とは思わなかった。

だってそれは、あんなに愛しくて優しい父上が、地獄に落ちる
ってことなんだから。

いつの間にか、自分が落ちてきた穴は針の穴のように小さくなっ
ていた。

それを見上げたまま、袁譚は蚊の鳴くような声で最期の言葉を紡
いだ。

おとうさん　ごめんなさい

袁譚の心には、これまで一度も味わったことのない、心の底からの後悔があふれていた。

死んでから一生で初めてというのはおかしいけれど、本当に初めての謝罪と後悔だった。

願わくば、父が地獄で自分を探しに来ませんように。

願わくば、父が誰かに救われて安らぎを得られますように。

そして願わくば、地獄で罪を償った後に、再び父と会えますように。

初めて知った清らかな祈りを胸に、袁譚は底知れぬ深淵に飲み込まれていった。

「うつく……うつく……」

袁紹の嗚咽が暗い部屋に響く。

袁譚の姿が見えなくなっても、表の袁紹はしばらく穴から離れられなかった。

そんな表を尻目に、裏の袁紹はもう次のことを考えていた。

「さて、あれは役に立たなかったが、わしは少し気が晴れたぞ！
しかし死人は皆考えが凝り固まっておるのかもしれないな。

今度はいつそのこと、生きた人間を引き込んでみるか……」

裏の袁紹はまだ泣き止まない表を横目でちらりと見てささやく。

「どうだ、譚がだめなら熙と尚にでも会ってみるか？
あやつらももう、袁家を再興する事などできまい！」

「それはならぬ！！」

悲鳴のような叫び声で、表の袁紹は即答した。

袁家を再興する事はできないから……裏の袁紹が言わんとすることはすぐに分かった。

確かに、袁譚と違って次男の袁熙と三男の袁尚は明確に父を蔑んだことはなかった。

しかし、本心までそうかという保障はどこにもない訳で……。

「嫌だ、もうこれ以上我が子を手にかけさせてくれるな！！」

あの子らには触れず、命運のままにさせてやりたい。

あの子らは私に絶望を与えなかった、ならばこちらも知らぬまま
でいてよいだろう！？」

表の袁紹の必死の訴えに、裏の袁紹は不服ながらもうなずいた。

「分かった、ではあの二人に手は出さぬ。

だが、その代わり生きた人間を引き込むのは試させてもらうぞ」

その提案には、表の袁紹も素直にうなずいた。

正直死者が生きた人間を巻き込むのは悪い気もするが、袁紹もありぐずぐずしてはいられないのだ。

袁譚に別れ際に言った言葉……自分も救われなければ、やがて地獄に落ちる。

他人の霊を巻き込んで勝手に地獄に落とし続けて、そんな事を

いつまでも続けられる訳がない。

いずれ罪に染まった魂は、地獄からの迎えにあずかることになるだろう。

そうならないためには、多少手荒な方法でも早く救ってくれる人を探すしかない。

袁紹としても、その辺りはもう手段を選んでいる余裕がなかった。

「よし分かった、生きている人間だな。
では、我らの故郷、南へ！」

あえて二人の息子から離れるように、袁紹の魂は南へと浮遊していった。

後には、地面を黒く穿つ涙の跡だけが残っていた。

袁紹（金網の部屋にて（後書き）

ここまでで、書き溜めた部分は終わりです。そのため、ここからは更新頻度があくんと遅くなります。

次の章からは、メジャーな人物を招いて物語を展開していきますので、どうぞご期待ください。

劉備く汝南の街道にて（前書き）

袁紹の悪夢は救われないうまま、新章に突入です。

今回招かれるのは、三国志において主役を張る人物、仁徳の人劉備玄德です。この人物は有名なので知っていらしゃる方が多いと思いますが、一応紹介を置いていきます。

劉備・玄德 リュウベキ ゲントク 生年161年 没年223年

漢王朝の復興を目指し、後に蜀漢の皇帝となった人物。関羽、張飛という二人の豪傑と義兄弟の契りを結んでいる。かつて袁紹と敵対する公孫？に仕えていたことがあるが、官渡の戦い辺りでは袁紹に身を寄せていた。袁紹の弟である袁術を討伐しており、さらに義弟の関羽が袁紹軍の武將を二人討ち取っているなど、袁家の運命に意外と多くからんでいる。

劉備、汝南の街道にて

救世主、それは文字通り世を救い、天下万民を救うものだ。

彼は誰にでも手を差し伸べてくれる。

彼はどんな貧しい、身分の低い人間にも希望を与えてくれる。

彼は巨悪を打ち倒し、自分たち大衆を楽にしてくれる。

言うことは夢物語でも、現実に救世主と呼ばれるのはたいていの場合人間である。

そしてその救世主は、だいたい民衆の好みに合っているからそう呼ばれるのだ。

もし救世主にお願いしたら、私も救ってもらえるだろうか？
私が立場上、民衆が目の敵と憎んでいる人間の同族でも？

「あちゃー……こりゃ取り返せそうにないな」

茂みに伏せて様子を伺いながら、張飛は小声でぼやいた。

視線の先には、古城が横たわっている。

その城壁には、「曹」の旗が所狭しと並んでいた。

「うむ、確かにこれではもう手を出せぬ。

ここは見つからぬうちに、早々に引き上げましょう兄者！」

隣にいた関羽も、難しい顔でつぶやく。

第二人の意見を耳に、劉備は残念そうにため息をついた。

（自分の城を持つのは、難しいことだな……）

目の前の古城は、数年前は劉備たちが拠点にしていたのだ。

ここを足場に、袁紹との全面対決に向かう曹操の背後を突こうとしたが、うまくいかなかった。

結局劉備たちはいつものごとく敗走し、今は親族の劉表に身を寄せている。

「分かった、ここはあきらめて荊州に帰ろう。」

竜が淵に潜むは天に昇らんがため……いつかまた、天の時がくる」

もはや言いなれたセリフをさらりと口にして、劉備は古城に背を向けた。

劉備たちは駒を並べて、汝南の街道を疾走していた。

汝南、そこはかつて袁家の本拠地だった場所である。

袁紹も袁術もそこで育ち、一時は袁術がそこを治めていた。

だが、その日と未来にしか目もくれない劉備にそんな事は知る由もない。

「兄貴、霧が出てきたぜ！」

さっきまであんなに晴れていたのに、気がつけば劉備たちの周りを白い霧が覆いつつあった。

「これはいかん……道を見失うなよ！」

二人の義弟に声をかけて、劉備は先の見えない霧の中に突っ込んでいった。

霧がそこから消えた時、三兄弟の姿もまた、霧のごとくそこから消えていた。

「うわああーん助けてくれええー」

暗い部屋に、情けない男の泣き声が響く。

血痕めいた汚れが染み込んだ冷たい台に、肥満体の男が一人拘束されていた。

表と裏、二人の袁紹は鏡に写したように同じ姿勢で、その男を見下ろしている。

「うるさい術、少し黙れ」

「泣くことが皇帝の仕事なのか？哀れなものよ！」

両方から、袁紹は容赦なくその男を責め立てる。

この拘束されている男こそ、袁紹の異母弟にして悪夢の元凶の一人、袁術であった。

「全く、おまえが死んでもう何年になると思っている？

公孫？もそうであったが、おまえもたいがい往生際が悪いな」

表の袁紹はあきれたように、台の上でもがく弟に言葉をかけた。

この無様な弟は、死に方が無様であったばかりか、未だに未練を断ち切れずに彷徨っていたのだ。

一時は玉璽を手に入れて皇帝を名乗り、贅沢三昧に遊び暮らしていた。

北でがんばっている兄の事など目もくれずに、己の野望に夢中になっていた。

そして気がついたら味方がいなくなってしまい、兄を頼るしかなかった。

袁術を発見したのは、汝南に入ってからかつての故郷に足を向けた時だった。

袁術は死した時のままぼろぼろの衣をまとい、一人の味方もなくさまよっていた。

「誰か、誰か水をくれえ」……。

お、おれは袁家の当主にしてこの国の皇帝、袁術だぞお」……」

袁紹はその姿を見て心底頭を抱えた。

汝南の実家は、すでにだいぶ前になくなっている。

そもそも、袁術が贅沢をしすぎて領土が荒廃したために、袁術自身が一族を南陽に連れて行ったのではないか。

それなのに、今また庇護を求めて汝南に戻ってくるとは……。

（こいつの頭の悪さだけは、死んでも化けても生まれ変わっても変わりそうにないな）

（仕方ない、奴は所詮その程度の男だ。

まあ、捕まえて仕置きをしてやるにはちょうどいいではないか！）

裏の袁紹の意地悪な提案に、表の袁紹もうなずいた。

この愚かな弟に復讐したいのは、表も裏も同じ考えだ。

そうして、袁紹はまず己の悪夢に弟の袁術を捕らえた。
それは復讐であると同時に、もう一つ少し卑怯な目的のためでもあった。

「さて、術よ。」

これからおまえを殺した者たちが、ここにやって来るぞ！」

裏の袁紹は楽しそうに告げた。

「劉備玄德……確かおまえは奴に追い詰められたのだろう？
そして味方も食糧もなくなり、行き倒れて死んだ。
私はその後流浪となった劉備を受け入れたが……私がおまえの事で劉備を恨むと思ったか？」

裏の袁紹は、凍りつきそうに冷たい視線で袁術を見下ろしていた。

表の袁紹もこればかりは、全く止める気にならなかった。

幼い頃、ずっとひどい目に遭わされてきた。

大人になってからも、ずっと心の底で憎んできた。

うわべで仲良くすることはあっても、心はこの男を許したことはなかった。

裏の袁紹が弟を責めるのを見ながら、表の袁紹はふいに気配を感じて立ち上がった。

この悪夢の世界に、異質なものが侵入してきたのだ。

「来たか！」

その声はまるで、神の降臨を見たように喜びに満ちていた。
今この悪夢に入ってきた男こそ、袁術の仇であり万民の救世主、
劉備玄德である。

劉備、汝南の街道にて（後書き）

劉備玄德は仁徳を旗印とし、天下万民を救うことを目標にかかげる人物です。

袁紹は自分を救ってもらうために、天下の救世主になろうとする劉備を悪夢に招きました。

しかし、劉備は生前の袁紹にとってよくないこともしでかしている諸刃の剣です。天下の救世主は袁紹を救うことができるのか、これまでとは違った流れで新章スタートです。

劉備と霧の中にて（１）（前書き）

袁紹はついに生きた人間を悪夢に引き込むようになり、最初の客として劉備玄德を選びました。

袁紹と劉備の間にはいくつか因縁がありますが、実際に劉備が袁紹の側にいたのは非常に短い時間です。そのため、劉備は袁紹のことを公孫？以上によく知りません。何も知らない劉備が袁紹の悪夢を前に何を思うのか、それもこの章の鍵となります。

劉備、霧の中にて（１）

「どつどつ……」

劉備はゆつくりと馬を止めて、後ろを振り返った。
霧の中に、かすかに大柄な影が浮かぶ。

「関羽、張飛、固まって歩こう！」

この霧では、もはや馬で移動するのは危険だ。」

「分かった、兄者！」

劉備はひらりと馬から下り、霧を掻き分けるように二人のもとへ歩いた。

一面白い視界の中、行き先に手を伸ばして探りながら歩く。
不意に、その手が温かい別の手に触れた。

「兄貴！」

それは、張飛の手だった。

そのうち張飛の側にいた関羽も姿を現し、三人はほっと一息ついた。

いくら戦場を渡り歩いてきた劉備とはいえ、ここまでの異常事態は初めてだった。

馬に乗って走っているだけで、バラバラにされそうな霧の迷宮……。

昔黄巾賊討伐で相手にした妖術使いでも、ここまでではなかった。

劉備たちはとりあえず、馬を近くの木につないでそろそろと歩き始めた。

「どこかに民家でもあればよいが……」

不安げにつぶやく劉備の両側で、関羽と張飛が霧の中に目をこらす。

武器を前に伸ばせば先端がかすむほど、その霧はすさまじかった。

ただ白く、何も見えない。

明日をも知れぬ状況に慣れている劉備たちも、さすがに気味悪さを覚えた。

湿った空気に、三人の足音だけが響く。

歩けども歩けども真っ白で、本当に自分達が移動しているのかすら分からなくなってくる。

不意に、霧の中に犬らしき遠吠えが響いた。

「おお、人がいるのかもしれない！」

久しぶりに聞いた自分たち以外の音に、劉備の表情がぱっと明るくなった。

犬はだいたい人里にいるものである。

この犬が自分の居所を他の者に知らせてくれるかもしれない……

劉備の足は自然と、その声が聞こえた方に向かっていった。

肌を撫でて流れる霧を掻き分けて、劉備たちは歩いた。

犬の声は、だいぶ近くなってきた。

「関羽、張飛、見落とすでないぞ！」

二人の義弟に注意を促して、自らも霧の中に目をこらす。すぐ数メートル先で、おうおうと吼える声がする。それは、喜びを感じさせる声だった。

突如、霧の狭間に黒い影が映った。

形は確かに犬のようで、こちらを見て尻尾を振っている。

その影が、突然劉備に向かって走り出した。

「あっ！？」

劉備が向き直る間もなく、犬は劉備に向かって突っ込んでいく。そして大きく飛び上がると、口が裂けたかと思えるほどの大口を開けた。

まさか攻撃されるとは思っていなかった劉備には、身をかわす余裕などなかった。

その瞬間、劉備の耳元でぶんと風を切る音がした。

「おりゃああ！」

犬の牙より早く、張飛の蛇矛が犬の頭をかち割る。

犬はきやいと情けない声をあげて、どさりと地面に転がった。

「おお、助かったぞ張飛！」

戦闘でこの二人に助けられるのは、劉備にとってよくあることだ。しかし、それでもいちいちお礼を言うのを劉備は忘れない。それもまた、劉備の徳によるものだ。

その言葉一つで、関羽と張飛はこれからも劉備に尽くそうという気になる。

「へへっ兄貴の相手はあんな獣じゃねえだろ？」

張飛が照れたように鼻をこすりながら言う。
だが、そのほがらかな義兄弟のひと時は、そう長くは続かなかった。

「兄者、これは……」

関羽が、柄にもなく困惑した声を漏らした。

劉備と張飛が振り向くと、関羽は青ざめた顔を上げた。
関羽の足元には、たった今倒した狂犬が転がっている。

「どうした、関羽？」

劉備は少しいぶかしんで、関羽に歩み寄った。

一歩進むごとに、霧のベールがはがれて狂犬の姿が露わになる。

「ああっ！ー！？」

その狂犬の真の姿を目にしたとたん、劉備は思わず悲鳴を上げた。

有刺鉄線がからみつき、血にまみれたいたましい皮膚。

目があるはずの場所には有刺鉄線が生えているのみで、目があるに
こにあつた痕跡はない。

口は、普通の犬の口をさらに上下に無理矢理引き裂いたように
裂けていた。

明らかに、普通の犬ではない。

いや、この世のものと思えない。

劉備はこの未知なる恐怖に、一瞬気圧されて立ち尽くしてしまっ
た。

「何だよ、これ……？」

張飛があっけにとられたようにつぶやく。

しかし、答えられる者はいない。

劉備たちのうち、誰一人として今までこんな生き物を見たこと
がない。

妖怪や妖術の話聞いたことはあっても、現実に見るのは
これが初めてだ。

劉備の背筋を、ぞっとする何かが駆け抜けた。

まるで自分たちが、今まで自分たちがいたのとは全く別の世界に
迷い込んでしまったような……。

霧の中から、また不気味な唸り声が響く。

劉備は周りを固めている二人に、できるだけ落ち着いた声で指示
した。

「関羽、張飛、一層警戒してくれ。」

霧が晴れるまで、気を抜くでないぞ！」

元来た道を戻れないのは、もう分かっている。

真っ白に視界を遮る霧は、もはや方向感覚すらも奪い去っていた。

だったらとにかく歩いて何かを見つけ、機に応じて対処するまでだ。

冷たく湿った霧が、劉備のほおをいとおしむように撫でる。

その感覚に思わず小さく身震いして、劉備は霧の中に踏み出した。

劉備、霧の中にて（1）（後書き）

劉備が袁紹のことを知らないように、袁紹もまた劉備のことをよく知りません。ただ、劉備が行く先々で人々に歓迎され、民を救うという信念のもとに行動していることくらいは耳に入っています。

だから袁紹は「救ってもらう」という目的のために劉備を選んだのですが、それがどのような結果になるかは、読み進めてのお楽しみです。

劉備く霧の中にて（2）（前書き）

今回は劉備たちが生きた人間であるということだけではなく、袁紹側の目的も前回までとは異なっています。

公孫？↓地獄の力を使う肩慣らし

袁譚↓救いへの希望を捨て切れていないが、主たる目的は復讐
それに対し、劉備は初めから救ってもらうのを主目的に招いて
います。そのため、袁紹自身の対応も、これまでとは異なったもの
になるでしょう。

劉備く霧の中にて（2）

表の袁紹は、期待に満ち溢れた顔をしていた。

劉備がこの呪われた世界に足を踏み入れてくれただけでも、素直に嬉しかった。

「さて、わしは行くぞ。

あやつをここに案内せねば！」

軽やかに腰を上げて、いそいそと扉に向かう。

そしてにわかに振り返ると、哀れな弟に向かって言い放った。

「くくく……おまえと見比べれば、わしでもそれなりに良い君主に写るだろうな。

特におまえを倒そうと息巻いていた劉備なら、なおさら……。

おまえはわしを貶めた償いに、わしが救われるための生贄になる

のだ！」

途中から、言葉は裏の袁紹に引き継がれていた。

だが裏の袁紹は表とは違い、どこか不安げな顔をしていた。

「……あまり救いに期待するなよ、人は裏切るものなのだ」

去っていくもう一人の自分を気遣い、裏の袁紹はため息をつく。

劉備はきつと、子供を怪物から助けるとは思う。

だが、それが本当に自分の救いにつながるかどうかは、まだ分からないのだから。

劉備たちは霧の中を進んでいた。

時々現れる狂犬は、関羽と張飛が速攻で始末してくれる。しかし、人型の怪物が現れた時は少々戸惑った。

影が人でなければ、躊躇なく攻撃できる。

しかし、人型の影が近付いてきたらそうはいかない。

「恐ろしい……私は未だに、これが人ではないと確信を持てぬのだ」

足元に転がる人型の怪物を見下ろし、劉備はかすかに震える声で漏らした。

壊れた人形のように手足をあらぬ方向に向けて、それは横たわっていた。

血の気のない肌を上品な着物で覆い、その姿は一見良家に仕える召使を思わせる。

しかし、その顔面には頭の後ろまで突き抜ける長い釘が打ちつけられている。

頭を釘で打ちぬかれて動いているなど、明らかに人間ではない。それでも、劉備はそれが人間ではないかと思わずにいられなかった。

感じるのだ。

この召使の足運び、息遣い、そして衣装の衣擦れに。

この召使は実際に誰かに仕えて、人として生活していたのだと。

「……ともかく、一つはつきりした事がある」

恐怖に乱れかけていた息をどうにか整えて、劉備は二人の義弟に言った。

「このようなものを放置しては、民が危険にさらされる。

これが元は人間だったならなおさら、放つてはおけぬ。

もし我々にどうにかできるものならば、これの元は世のために退治するべきであろう」

「そうですな」

関羽と張飛も、至極真面目な顔で同意した。

民を守り世を平和に導く、それが劉備たちの揺ぎ無き行動理念なのだ。

劉備は、自分が盗賊に襲われたときも、近辺の民のことを考える人間だ。

今自分が相手にしているものが民のためになるかならないか、それが彼にとっての判断基準といってもよい。

「ちつ、それにしても、ずいぶんと悪趣味な怪物だぜ。

こんなのを生み出した奴は、きっと大層悪い奴なんだろうな！」

怪物の死体に唾を吐きかける張飛をたしなめながら、それでも劉備はうなずいた。

こんな怪物を生み出すような輩は、間違いなく民を苦しめる。ならば自分は、そのような存在から民を守らねばならない。

たとえ何か事情があつたとしても、巻き込まれる多くの民のことを思えば……。

そんな事を考えている劉備の耳に、早速助けるべき者の声が響いた。

「た、助けてえー!!」

まだあどけなさが残るような、少年の悲鳴だ。

ゆるゆると流れる霧の向こうから、小さな足音と共に聞こえてくる。

劉備はすらりと剣を抜き、さつと身をひるがえした。

「行くぞ、二人とも!」

劉備の凜々しい声に従い、関羽と張飛もそれに続く。
やることは一つ、悲鳴の主を助けることだ。

「うわああん!!」

真っ白な霧のベールを裂いて、少年が飛び出してきた。
そのすぐ後ろから、例の狂犬が姿を現す。

劉備は素早く少年の前に出てかばってやり、同時に関羽が狂犬を一刀両断にした。

犬の体を取りまいている有刺鉄線が切れ、鉄の棘が犬の体をさらに引き裂く。

劉備はそれに吐き気を催しながらも、そのおぞましい光景から少年を守ってやっていた。

狂犬にとどめを刺すと、劉備は腕に抱え込んでいた少年をゆるゆると放してやった。

少年の不安げな瞳が、おずおずと劉備の顔を見上げる。

「大丈夫だよ、私は人間だ」

劉備は開口一番、優しく、はつきりとした口調で少年を安心させてやった。

それで少し落ち着いていたのか、少年は劉備の腕にしだれかかるようにして小さく息を吐いた。

劉備は脱力した少年の背中を、温めるように撫でた。

「もう心配することはない、私がおまえを守ってやる。
この化け物どもにおまえを食わせたりはしない！」

劉備がそうやって声をかけても、少年は相変わらず不安そうなままだった。

「本当に...?」

少年が、か細い声を発する。

劉備が視線を合わせるようにかがんでのぞきこむと、少年はまだ信じられないというようにつぶやいた。

「本当に、守ってくれるの？」

この地獄から、ぼくを救ってくれるの？」

「ああ、助けるとも」

劉備は陽光のように暖かい笑顔で、少年の問に答えた。
それを聞くと、いままでずっと怯えていた少年の顔が少しだけ和らいだ。

それは、劉備にとってこれまで何度も繰り返してきた行為だ。

劉備はこれまで、たくさんの虐げられた子供たちを見て、励ましてきた。

戦で親を失った子供、圧政に苦しむ民の子供、働けど働けど楽にならない歪んだ社会の小さな犠牲者たち。

そんな子供たちはだいたい、こんな不安そうな目をしていた。

（かわいそうに、救ってやらねば！）

そう、これはいつもと同じ、民を救う行為だ。

民は自分たちに世直しを期待し、守ってもらうことを望んでいる。ならば、救世主たらしめる自分たちにはそれに応える義務がある。

劉備は優しい眼差しに強い決意をこめて、顔を上げた。

劉備と霧の中にて（2）（後書き）

劉備は基本的に民に優しいので、少年の姿をとった袁紹を優しく受け止めてくれました。しかしこの時点で、劉備はそれが袁紹だと分かっていません。

果たして劉備の優しさは、それが袁紹であると分かってからも続くのでしょうか？

劉備く霧の中にて(3) (前書き)

劉備が前の二人と異なる点は、優しいだけではありません。

劉備は一人ではなく、関羽と張飛と一緒に戦ってくれるのです。

その二人が一騎当千の豪傑であるせいで、劉備たちは多少の怪物ではびくともしません。チートといえるくらいの強さで、倒せるものであれば軽く蹴散らしてしまいます。

そのせいで、今回のエンディングは前章とはなかり異なる予定です。
すが…。

劉備く霧の中にて（3）

「とにかく、どこか安全な場所を見つけた方がよさそうだな」

関羽が、霧の中をにらみながら言った。

劉備も、少年を抱き寄せるようにしてうなずく。

「うむ、我々だけならまだ何とかなるが、この子をどこかに避難させなければ。」

かといって、この霧の中建物も容易に見つかるまい。

安全な場所が見つかるまで、この子を守って歩くしかあるまい」

「ちっ、しょうがねえな！」

張飛のその答えに、少年は少しだけ安堵した表情を浮かべた。

だが、その奥にあるかすかな嫉妬の眼差しは、霧のベールに隠れて劉備たちには見えなかった。

劉備たちは、しばらく霧の中を歩いた。

三人で子供を守るように囲み、子供に歩調を合わせて進んでいく。

まさに、民を守る君主の鑑だ。

「大丈夫が、辛いなら休んでも良いぞ」

時々、こんな優しい言葉までかけてくれる。

少年はそんな劉備の愛情に、照れたようなすまなさそうな微笑を浮かべた。

今まで、自分が子供の時にこんなに優しくしてくれた人間がい

ただろうか。

こんな風に心を温めてくれる人間が……。
自分が知っているのは、その逆の方が多かったのに。

（ああ、やはり世の評価は間違っておらぬ。

この男は、優しい……！）

少年の手が、きゅつと劉備の手を握った。

劉備はそんな少年を抱きかかえるように、歩みを止めて前を見据える。

「大丈夫だ、必ず守ってあげるからね」

劉備の視線の先には、ゆらゆらと近寄ってくる怪物たちの姿があった。

関羽と張飛が、得物を構えて前に出る。

先頭にいた犬の怪物が、霧を裂いて飛び掛った。

「いくぞ張飛！」

「おう、兄者！」

勇ましいかけ声とともに、まずは張飛が鋭い突きで狂犬を打ち払う。

狂犬は何匹も襲い掛かってくるが、張飛は落ち着いた表情でそれぞれを空中で打ち落としていく。

犬の後から歩いてくる人形は、関羽が偃月刀で一氣になぎ払う。

しかし、怪物が来るのは前方だけではない。

少年を守る劉備の背後から、霧に紛れて人形が忍び寄る。

「危ない！！」

ふいにすぐ後ろで響いた金属音に、少年ははっと顔を上げた。振り向くとそこには、人形の振り下ろす包丁を見事に受け止めている劉備の姿があった。

だが、直前まで気付かなかったらしく体勢はよくない。受け止めてはいるものの、これでは反撃できそうもない。

突然、劉備は剣を持つ手を片方放した。

そして目にもとまらぬ速さで鎧の下に突っ込み、隠し持っていた短剣を抜き放つ。

「くらえっ！！」

相手の攻撃を止めたまま、劉備は人形の懷に短剣を突き立てた。哀れな人形はか細い悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちるしかなかった。

数分後、怪物たちは皆地面に伏して動かなくなっていた。

「ほら、もう大丈夫だよ」

劉備は柔らかな微笑みを浮かべて、少年の頭を撫でる。それにつられて、少年の顔にも自然と笑みが広がる。

「おじさん、強いんだね！」

そう、劉備たちは強い。

劉備一人ではそう強くもないのかもしれないが、関羽と張飛とい

う豪傑が常に守ってくれている。

一人一人の強さが、絆によってからみ合い何倍もの力を発揮する。

その絆が、まぶしく、そして羨ましかった。

もし自分もそこに混ぜてもらえたなら、きっと救われるような気がした。

「おじさんは、ぼくを救ってくれるよね……」。

この地獄から、助けてくれるよね……」

期待に目を潤ませた少年の問に、劉備は自信たっぷりに答えた。

「ああ、必ず助けてあげるからね。

決して、君を見捨てたりしないよ」

血と膿と錆にまみれた世界で、裏の袁紹は少しだけ顔をしかめた。

（むう、あの数をいとも簡単にこなすとは……）。

さすがに玄德は前の二人とは違うな）

迎えにいった自分を拾ったところで多数の怪物に襲わせるのは、相手の覚悟を試す試練のようなものだ。

これまで、公孫？も袁譚もそこで自分を放り出して逃げている。ここで違う反応を見られたというだけで、袁紹の心は大きく揺らいでいた。

もし、本当に劉備が他の二人とは違う結末を見せてくれるなら、

もし、劉備が自分を地獄から救い出してくれるなら、
この楽しい復讐劇もすぐ終わりになるのかもしれない。

（全く、寂しいものだな）

暗い感情の塊である裏の袁紹にとって、今の状態は復讐の絶好の機会だった。

自分が救われてしまえば、袁紹は結局生前にためた恨みを晴らせないまま終わることになる。

表の袁紹には悪いが、それは少しもつたいない気がした。

それに……正直、袁紹が劉備に対して抱いている感情はいいものばかりではない。

特に、劉備が二人の豪傑を従えているところを見ると、胸を焦がす業火のような感情がせり上がってくる。

かつて、袁紹の側にも二人の豪傑がいた。

袁紹は彼らを、心から信頼して支え合っていた。

それを奪ったのは……。

あの時のことを思い出すと、今すぐにでも劉備を殺しに行きたくなる。

しかし、それでは自分は救われないのだ。

今はこの感情を抑えて、自分を救ってもらわなくてはならない。

（まあ、仕方がないか……わしとて地獄に落ちるのを望む訳ではない。

劉備がわしを救えるというのなら、なるべくように任せるか）

今の袁紹にとって、劉備は久しぶりに見た大きな希望だ。

自分を救ってくれるならそれほど妨害はすまいと、裏の袁紹は闇
の中で静かに思った。

劉備、霧の中にて（3）（後書き）

劉備の態度が優しいと、袁紹の態度もそれに応じて優しくなります。

裏の袁紹は怪物の出現をある程度制御できるため、裏の袁紹の敵意を弱めることができれば怪物は少なくなります。袁譚の時とは正反対の現象です。

ただし、裏の袁紹は暗い感情の塊であるため、その敵意や疑心を完全に取り去ることはできませんが。

劉備く霧の中にて（4）（前書き）

袁紹は今回もまた、劉備たちを悪夢の館に招きます。

今回の館は前二章のどちらとも異なる場所で、前章とはまた別の悪夢がこめられています。しかし、この場所にこめられているのは、悪夢ではあっても袁紹にとって非常に大切な感情です。

そしてその感情をあえて劉備たちに見せることで、袁紹はより確実に救ってもらおうとするのです…。

劉備く霧の中にて（４）

それから、劉備たちはあまり怪物に遭わなくなった。
まるで何かが導いているように、前方の霧が時折薄くなる。

「あ、兄者！今、建物が…！」

張飛が叫んだ。

濃淡をつけてたなびく霧の隙間に、黒い楼閣の影がちらりとのぞいた。

よく目をこらすと、いつの間にか道の両側にも建物が見える。

どこからともなく、一陣の風が吹いた。

とたんに霧が透けるように薄くなり、周りの建築物が姿を現す。

そこは、華やかな廓が立ち並ぶ、花街のような場所だった。

いつも美女が男を呼び込むはずの窓は閉まり、入口も全て固く閉ざされているものの、

そこは間違いなく、男が欲を満たすために存在する街の形をしていた。

「遊郭か……」

劉備は霧に紛れて、困ったような表情が惡そうな顔をした。

劉備も若い頃は、学問の傍らで時々こついうところで遊んでもいたのだが……。

民を救い義を掲げる今の劉備にとって、ここはあまり好ましい場所ではなかった。

立ち止まってしまった劉備をよそに、少年は突然すたと歩き出した。

「あ、おい、どこ行くだよ!？」

張飛が慌てて止めたが、少年の足は止まらない。
揺れる霧の中に突き進みながら、少年はぼろりと口にした。

「お母さんがいるの」

「お母さん?」

張飛が聞き返すと、少年は前を向いたまま答えた。

「うん、ぼくを産んでくれたお母さんだよ。
育ててくれたお母さんじゃないよ」

その言葉から、劉備はどうにか少年の生い立ちを悟った。
この子は、この遊郭にいる女の子供なのだ。
そしていつもはここから離れたところで、母親と引き離されて育っていたのだと。

霧の向こうに、ひとときわ高い屋根が見える。

黒い塔のようにそびえるそれは、おそらくこの街で一番高級であろつ楼閣の影だった。

大通りの突き当たりに、その門はあった。

これほどの異常事態にも関わらず、門は開きっぱなしになっている。

そして誰か大事な人を迎えるかのように、きれいに掃き清められ

ている。

「お母さん……」

子供とは思えないほど感慨深げに、少年はつぶやいた。

よほど会いたかったのだろう。

少年は目にも留まらぬ速さで門の中に飛び込んでいった。

「あつ待て、一人では危険だ！」

関羽が止めるのも聞かず、少年は楼閣の中に吸い込まれていく。劉備たちも慌てて、少年を追って門の中に駆け込んだ。直後、劉備たちの背後で門が勢いよく閉まった。

確かに、外にも中にも誰もいなかったのに。

門はまるで意志があるように、一瞬で固く閉ざされていた。

「ちょ、何だよこれ!？」

張飛が慌てて門に手をかけ、体重をかけて力一杯押す。だが、門は微動だにせず、きしむ音すら立てない。

「これは、閉じ込められた……のか……?」

劉備は啞然としてつぶやいた。

「畏、だったのかもしれませぬな」

関羽がため息とともに漏らした。

劉備はこっそりと肩を落として、心の中で最初からを振り返ってみた。

確かに、少しおかしかったのかもしれない。

こんな異常事態のただ中に、他の人が誰もいないのにあんな子供だけがいて。

拾ったとたんに大量の怪物に襲われて、子供についてこの楼閣に引き込まれて。

だが、それでも目に前に困った人間が現れると放っておけないのが劉備の性分だ。

これまでに、そうやって情に訴えられてはめられたことはそれなりにある。

よく考えれば今回もその繰り返しかと、劉備は唇を噛んだ。

自分には悪意なんてなかったのに、いつの間にか命を狙われていた。

そういう事は、劉備の人生の中で何度もあった。

例えば、徐州で呂布を受け入れた時。

例えば、曹操の配下として都に凱旋した時。

ちよっと前、河北の袁紹の元にいた時もそれに近かった気がする。

「いい加減、私も学ばねばならぬか……」

守ってくれる関羽と張飛のことを思って、劉備は静かに自分に言い聞かせた。

「とにかく、出られぬ以上ここにも仕方がない。

今はこの廓を調べてみるしかあるまい」

劉備はそう言つて、霧にかすむ楼閣を見上げた。
関羽もそれに答えて、青龍刀を握りなおす。

「そうですね、我らをここに引き込んだという事は、怪異の元凶はここにいます。」

元を断てば、この怪異も治まるでしょう」

三人はうなずき合つて、妖氣漂う楼閣に足を踏み入れた。

楼閣の主がどんなつもりでこの門を開いたのか、その訳を完全に履き違えたままで。

劉備と霧の中にて（4）（後書き）

劉備は一時的に袁紹のもとにいましたが、結局いづらくなって劉備の方から袁紹を欺いて出ていくという結果に終わっています。

そのため、劉備は袁紹という人物にあまりいいイメージをもっていないません。

表向きは穏やかでも、すぐ人を疑いあらぬ罪を着せようとする…なぜ劉備があらぬ疑いをかけられたかは、後に語られます。三国志ファンの方なら、すでに知っているかもしれません。

劉備く愛惜の館にて（1）（前書き）

新たなフィールドで、新たなクリチャーが出現します。

遊郭を思わせる館に出現するそのクリチャーを見て、劉備たちは何を思っているのでしょうか。そしてそれは、袁紹のどのような悪夢を象徴しているのでしょうか。

劉備と愛惜の館にて（１）

楼閣の中は、相変わらず静かだった。

怪物はいるが、外よりは少ない。

部屋にはきれいな調度品が並べられ、そこにいたであろう遊女の生活感すら感じられた。

美しく整え、活けられた花。

一般の娼婦とは一線を描する、上品な品の数々。

ただ、それは全くといっていいほど人間のもので、劉備たちが想像した妖怪じみたものではなかった。

女さえいればいつでも客を迎えられる優美な雰囲気、そこにはあった。

「母上ーっ！」

突如として、さっきの少年の声が廊下に響いた。

驚いた劉備たちが部屋から出ると、少年が廊下の角を曲がっているのが見えた。

「どうする、兄者？」

「追うぞ、手がかりはあれしかない！」

張飛の間に短く答えて、劉備は少年を追って走った。

そして角を曲がったとたん、今度は急に止まるはめになった。

そこにいたのは少年ではなかった。
人間でもなかった。

外にはいなかった、新種の怪物だ。

柔らかそうな肌に包まれた歪な肉塊。

そこから、4本の手と4本の足が突き出している。

よく目をこらして見れば、二人の人間がからみあっているかのような……。

それを目にしたとたん、劉備は吐き気を覚えて口を押さえた。

だが、その反射は正しかった。

怪物はこちらに気付くや否や、体の前面にある口からべたべたの粘液を吐き出してきた。

「ぶえっ何だこれ!？」

その攻撃は意外に遠くまで届き、関羽と張飛も顔面にそれを食らってしまう。

特に毒はないようだが、気持ち悪いことこの上ない。

威力はなくとも、こんなものを食らってひるまない者は滅多にいないだろう。

「大丈夫か、二人とも。」

次が来る前に仕留めるぞ！」

劉備は怪物に向かって走りこみながら、すらりと右手で剣を抜いた。

同時に、左手を鎧の中に突っ込み、もう一本の短剣を抜き放つ。

雌雄一对の剣による二刀流、これが劉備の戦い方だ。

「どけっ!！」

動きののろい怪物の、まずは足を薙ぐ。

重そうな体から足を2本切り落とすだけで、怪物の動きは格段に悪くなる。

それを補うかのように、突き出した手の一部が床についた。

それでもまだ、怪物には三本の手がある。

二本を二刀でしのいでも、その間をぬって一本の手が劉備をつかむ。

「くっ!?!」

たった一本なのに信じられない力の強さだ。

決して放さぬとでもいうように、劉備を無理矢理に抱き寄せる。

歪な胴体の肌に、突如として鋭い歯の生えた口が現れた。

「あっ!?!」

劉備は大きく目を見開いたが、もう自力で反撃できる体勢ではなかった。

思わず顔を歪めた劉備の耳元で、風が唸った。

ざばつと肉が裂け、血潮が飛び散る。

劉備がほおに風を感じた時には、怪物はきれいに二つの肉塊になっていた。

「兄者、ご無理はおやめください」

「ああ、すまぬ関羽……」

心配そうに顔をしかめる関羽の前で、劉備は心底すまなさそうな顔をした。

また、情に流されて畏にはまり、助けられてしまった。自分は一体何度これを繰り返すのだろうと、劉備は自嘲した。

「で、どうするんだ、兄者？」

二人に水を差すように、張飛が口を挟んだ。

張飛の視線の先には、廊下に点々と続く足跡がある。

「これを辿っていきや、あのガキンとこに行けるかもしれないぜ？」

劉備は着物の汚れを払うと、気を取り直して前を向いた。

「行こう、我々には民を守る義務がある。

たとえ畏であろうと、この先に潜む魔物は倒さねばならぬ」

劉備は、足跡を辿って歩いた。

怪物は意外なほど少なく、遠くに見つけたものは襲ってこないこともあった。

それが逆に、不気味に思えてくる。

「くっ……くっくっ……」

突然、誰もいない廊下に子供の泣き声が響いた。声は、さっきの少年にそっくりだ。

「会わせて……母上に会わせて……」

劉備たちが黙って聞いていると、声は劉備たちの側から少しずつ遠ざかっていく。

それに呼応するように、かすれていた足跡が急に鮮明に浮かび上がる。

きれいに磨かれた床に、濡れたような足跡がぼつぼつと続いていく。

足跡の周りには、まるで姿の見えない少年が泣いた跡のように小さな飛沫が散りばめられていた。

畏かもしれないと思っても、劉備の心はちくちくと痛んだ。

この怪異は魔物のもので、この痛みは人間のものであるように感じられた。

だとしたら、少年はただ、無念を利用されているだけかもしれない。

（どちらにしろ、まずは正体を見極めねば）

劉備は姿なき声について、楼閣の階段を登っていった。

劉備と愛惜の館にて（1）（後書き）

裏の袁紹が心を落ち着けているため、今回は怪物たちがあまり積極的に襲ってきません。袁紹自身が、劉備を受け入れようと努力しているからです。

しかし、逆に劉備はその意図を計りかね、これまでの「自分に悪意がなくても害された」経験からいつもより疑い深くなってしまっています。

果たして、袁紹は劉備に事情を聞いてもらえるのでしょうか。

劉備く愛惜の館にて（2）（前書き）

この館でもこれまでの館と同じように、時を超えた手紙などによって袁紹の悪夢が語られます。

劉備たちを導くように響くすすり泣きと涙の跡は、袁紹の幼少時の悲しみがにじみ出たものです。この悪夢の中で、袁紹は誰にどのような感情をもって泣いているのか、館の名前もヒントになります。

劉備と愛惜の館にて（２）

足跡は、ある部屋の手前で止まっていた。
最初に関羽が少し扉を開けてのぞいたが、怪物の姿はなかった。

「大丈夫です兄者、ここは安全です」

入ってみると、そこは廓にふさわしくないほど上品な部屋だった。

飾り気の無い木彫りの机。

その周りには書物と子供の玩具が置かれている。

まるでそこだけ、良家の子供部屋を切り取って貼り付けたような感じがした。

机は、それ自体は磨かれているにも関わらず、墨で盛大に汚されていた。

もう少し近付くと、劉備にはそれが意味のある言葉だと分かった。

「お母さんに会いたい！」

本当に、ぼくを産んでくれたお母さんに会いたい！

あのおばさんをお母さんと呼ぶのはもう嫌だ！>

「これは……？」

あの少年が、書きなぐったのだろうか？

それを考える間にも、今度は部屋の外からすすり泣く声がした。

「会えない……まだ、会えない……」。

でも、信じています。こうしてがんばっていれば、きっといつか会えるって……。

だから私は、その日を信じて、針のむしろの日々を渡っていけます」

さつきより、いくぶん大人びた声だった。

さつきの少年が、もう少し聞き分けのよい年になったような……。

「成長している!？」

驚いた劉備たちが部屋から出ると、そこにはまた新たな足跡があった。

その足跡は、さつきより明らかに大きくなっていた。

「やべえな、兄者……」。

これって、早く捕まえた方がいいんじゃないか？」

「うむ、事態が進行しているなら急いだ方が良い」

関羽と張飛にせかされて、劉備は再び足跡を辿り始めた。

しかし、その足取りにはわずかながら迷いが生まれていた。

成長した少年の声に、劉備は既視感を覚えたのだ。

（私は、以前あれと会っている!？）

幼い面影だけでは分からなかったが、声は琴線に触れるものがあった。

劉備は確かに、あれに近い声で話しかけられた記憶があった。

ふと、劉備の脳裏に城内の風景が浮かんだ。

外は真っ白な雪に埋もれている。

火を焚いていても底冷えのするような寒さの中で、その人はどこか影のある柔和な笑みを劉備に向けて……。

あれは誰だったのだろうか？

確かに自分は、この子に似た声を知っているのに。

さつきより大人びた声は、確かにその時のものに近い。

しかし、劉備はそれが誰であるかを思い出せなかった。

忘れた、というより、その人物自体にあまり感銘を受けなかったのだろう。

（やれやれ、曹操殿くらいの人物ならば、すぐ思い出せそうなものだが……）

劉備は心の中でため息をつきながら、足跡の続く次の部屋に入った。

その部屋のつくりは、さつきの部屋とよく似ていた。

いや、つくり自体は全く同じで、ただ置かれているものが異なっていた。

玩具はなく、書物が多くなっている。

机は高くなり、きれいな絹張りのいすが加わっている。

同じ部屋で、しかし主が成長したような、そんな感じだった。

机の上に広げられた紙に、またも母を想う文章が書き残されていた。

る。

<母上、お元気でお過ごしでしょうか？

私は、新しい母上のもとで元気に過ごし、この名家に恥じぬよう学問に励んでおります。

いつか私の身が自由になるその時がきたら、必ず会いに行きます

>

いかにも良家の子息らしい、きれいな文字だった。

さっきの殴り書きと比べて、心にも余裕ができたようだ。

劉備は、このきれいな文字にも見覚えがあった。

そんなに昔ではない、近年のことだ。

戸惑う劉備の耳に、またしても部屋の外から声が聞こえる。

「なぜだ……なぜ会うことすら許されぬ……？」

私は、あなたに会うことだけを楽しみに生きているというのに！
いくら頑張っても、この気持ちが報われることはないのか

！――」

今度は、もうほとんど大人の声だ。

その声を聞いたとたん、劉備の脳裏に同じ声の記憶が浮上した。

よく参られた、この　はおまえを歓迎する。

ゆるりと休まれよ。

同時に鮮やかに見えてきた面影に、劉備はぎよつとして身をこばわらせた。

（そんな、まさかあの方が！？）

劉備は一瞬思い当ったその人物を、即座に否定した。

（有り得ない、そんな訳がない……）

あの人は名門の嫡子、そのようなそぶりは一切なかったし、あの話はデマだったはず）

その人物が実は妾の子、娼婦の子であるという噂は聞いたことがあった。

だが、本人とその周りはそれを否定していたし、噂の出所を考えるととても信用できる話ではない。

それにその人物はいかにも良家のお坊ちゃん、見るからにこんな苦しみとは縁のなさそうな人間だった。

これは何かの間違い、いや虚構の罠だ。

こんなものに心をからめとられてはいけない。

劉備はしっかりと気を持ち直して、再び部屋を出て足跡をたどった。

足跡はやはり、大人の足の大きさになっている。

関羽と張飛はそれを見て、ますます険しい顔になった。

「やっぱり成長してるぜ、兄者」

「うむ、魔物の住処に近づいているのだろう」

劉備は声で答えることなく、わずかにうなずくだけにとどめた。

足跡を見れば二人の言うことは正しい、しかし劉備にはどうも解せなかった。

階段を上り、足跡の主の居場所に近づくにつれて、むしろ空気が

澄んでいくような気がした。

まるで、彼にとって聖なる何かがあるような。

劉備と愛惜の館にて（2）（後書き）

劉備たちは袁紹の生前、あまり袁紹のことを気にかけていませんでした。

そのせいで、劉備たち（特に直接会うことがほとんどなかった関羽と張飛）は袁紹が発するメッセージをほとんど読み取れません。劉備ですら、これが袁紹であるということに確信が持てないほどです。

劉備たちは彼らなりにこの事態を説明しようと一生懸命考えているのですが…。

劉備、愛惜の館にて（3）（前書き）

劉備が早くも袁紹と対面です。

今回は袁紹の方が早く救われたいと焦っているため、劉備たちはそれほど危機に陥ることなくここまで来ることができました。袁紹も、劉備たちに悪夢を掘り返されたりして傷つくことはありませんでした。

スラスラと進んで終わりの近いように思えますが、こんな時ほど落とし穴があるものです。

劉備、愛惜の館にて（3）

ようやくたどり着いたのは、楼閣の最上階にある一番広い部屋だった。

しかし、楼閣の持ち主の部屋、という訳ではないようだ。そこも他の部屋と同様、女が男をもてなすための部屋だ。

「ここで、行き止まりか……」

張飛が息をのんでつぶやく。

おそらくこの部屋に、怪異の元凶であろう魔物がいる。

「いくぞ、二人とも。」

ぬかるなよ！」

劉備はじわりと汗のにじむ手を、扉の取っ手にかけた。

ばん、と勢いよく部屋の扉を開け放つ。

すぐさま関羽と張飛が前進して、部屋の中を見回す。

「おまえは……！」

その広い部屋の窓際に置かれた、豪華なベッドの前に彼はいた。

間違いない、劉備をこの恐ろしい場所に誘い込んだ、あの忌まわしい少年だ。

劉備は今一度、その子の顔をじっと眺めた。

育ちの良さを感じさせる整った面立ち。
気品さえ感じられる洗練されたしぐさ。

しかしその表情は、どこか意識が遠くにあるようにうつろだ。

確かに、この表情は記憶の中のあの人にそっくりだった。

数年前にあの人と話した時、実際にこの身で感じた、まさにその印象そのものだった。

少年は恐れる様子もなく、微笑みすら浮かべてそこに座っていた。

そして劉備たちの姿を見ると、唐突に立ち上がった。

「すまぬ、このような場所に引き込んだこと、まずは詫びよう」

身構える劉備たちに向かって、少年は意外にも頭を下げた。
彼の声は幼いままだが、口調は明らかに大人のものになっ
てい

る。
「事情あって、誰かの助けが必要なのだ。
それゆえ、危険を承知で呼び込んだ。
何も知らせずに恐ろしい目に遭わせたのは、悪かったと思っ
てい

る」
少年は確かに、すまなさそうな顔をしている。
それでも警戒は解かないまま、劉備は少年に話しかけた。

「あなたは、私を知っているようですが……？」

「うむ、わしは生前、そなたに会っておる。
その縁をもって、今少し力を貸してはもらえぬだろうか？」

少年はすぐのように言った。

だが、劉備はこれが真実なのか畏なのか決めかねていた。それを代弁するように、張飛が少年をしかりつける。

「やいやい、人様に何か頼むときはまず自分から名乗りやがれ！

正体を見せねえ野郎をホイホイ手伝う馬鹿がいるか。

手伝ってほしいなら、てめえの本当の姿を見せてみろってんだ！」

それを言われたとたん、少年の顔が引きつった。

その反応に、関羽が少年に青龍刀を向ける。

「正体を見せられぬようでは、妖怪と思われるても文句は言えぬぞ？」

少年は観念したように肩を落とした。

そして、不安を露わにした目で劉備たちを見上げて告げた。

「分かった、ならば本当の姿を見せよう。

ただ、そのためにはまた少々気分の悪いものを見せねばならぬぞ。

……あのようなもの、そなたには見せたくなかったが……」

少年は大きく息を吸い、ため息をつくようにゆっくりと吐き出した。

そのとたん、劉備の周りの景色がぐにやりと歪む。

「何だ！？」

戸惑う劉備たちの前で、ぼやけて見える少年の姿が成長していく。

背はすらりと高く、シルエットは品のある立ち姿で、この異変にも全く動じる気配はない。

やはりこの怪異は、この男が起こしているとみて間違いないだろう。

部屋の床板の表面が劣化してはがれ、血のような汚れが広がる。ベッドの飾りやカーテンは歪み、破れ、まがまがしい形に変わる。

辺りが急に暗くなり、赤みがかった闇が周囲を覆っていく。

再び視界がはつきりした時、世界はこれまでよりずっと深い悪夢に変じていた。

劉備、愛惜の館にて（3）（後書き）

館が裏世界に変貌しましたが、今回はこれまでと違って袁紹に相手を怖がらせるつもりがありません。劉備たちも、それなりに冷静に事態を受け止めています。

今回は間違いなく、これまでとは異なるシナリオになるでしょう。それが良いか悪いかは、別として。

劉備く愛惜の館にて（4）（前書き）

館が裏世界に変貌しました。

普通なら招かれた方が恐怖と不安を味わうものですが、今回はむしろ袁紹の方が恐怖と不安に苛まれています。袁紹にとって、嫌いでない人間にこの悪夢を晒すことは、自分が嫌われるかもしれないという恐怖と背中合わせの行為なのです。

劉備と愛惜の館にて（４）

「こ、こいつは……！！」

関羽と張飛は、変貌した世界を見てますます険しい顔をした。

普通に考えて、こんな恐ろしい世界の主がまともな人間の訳がない。

その悪夢の主は、さっきの少年と同じように目の前に佇んでいた。

「……ああ、やはり、貴方でしたか……」

すっかり知っている姿になった悪夢の主に、劉備はまだ信じられないながら声をかけた。

「袁紹殿……」

彼は確かに、劉備の知っている人間だった。

それどころか、劉備は彼の世話になったこともあった。

何度か顔を合わせて話をしたことはあったが、まさかこんな形でまた会うとは思ってもみなかった。

袁紹が、はにかむような笑みを浮かべて声を発した。

「久しいな、玄德。

あれから変わりはないか？」

顔も、声も、どこか不安げな表情も、全てあの時のままだ。

よく参られた、この袁紹はおまえを歓迎する。
ゆるりと休まれよ。

ただ昔と違うのは、袁紹はすでに死んだ人間であるということだ。

そう、この袁紹という人物は、もうこの世にはいないはずなのだ。

劉備はできるだけ袁紹を刺激しないように、柔らかな微笑みを作
ってその問いに答えた。

「見てのとおり、この身に変わりはありません。

ただ、あなたという強敵を失った曹操に攻撃をかけられ、汝南か
ら追い出されてしまいました」

それを聞くと、袁紹はすまなさそうに頭を垂れた。

「それは悪いことをした。

だが、わしも負けようと思って負けたわけではないのだ。

それに、人である限り天命には逆らえぬ」

その言葉に、劉備の肩から少し力が抜けた。

どうやら袁紹は、自分が死んだことは理解しているらしい。

ただ、どうしてそのうえで彷徨っているのかは聞いてみる必要が
あるが。

「袁紹殿、失礼を承知でお聞きいたします。

あなたはすでに、人の命を終えこの世にいるべきではないはず。
なぜこのように迷っておられるのですか？」

とたんに、袁紹は待っていたように嬉しそうな顔をした。

「おお、聞いてくれるのか！」

この時を、どれほど待ち続けただろう。

暗く醜い悪夢の底で、袁紹はずっとこの時を望んでいた。

もう自分を助けてくれる者はいないのではないかと、何度も思った。

悪夢に引き込んだ者にことごとく拒まれて、その度に失望を味わった。

だが、目の前にいる劉備はこれまでとは違う。

こうして聞く耳を持つてくれる人がいたことが、袁紹にはこの上なく嬉しかった。

（ああ、私は助かる……救われる……！

この救世主は、本当に私のような者にでも手を差し伸べてくれるのだ）

袁紹は劉備の顔をすぐるように見つめ、口を開いた。

「わしとて迷いたくて迷っている訳ではない、むしろ早く安らかに眠りたいとすら思っておる。

だが、生前の業がわしにそれを許さぬのだ。

わしが冥界で安らかに過ごすためには、どうしても他人の助けが要るのだ！」

今度こそと思うと、自然と声に熱が入った。

「わしが冥界に行くためには、割れてしまった魂を直さねばならぬ。劉備よ、このような招き方をして心苦しいが、どうか今一度わしに手を貸してくれい！」

袁紹がひとしきり頼み込むと、劉備は義弟二人と顔を見合わせた。

「どうするよ、兄者？」

明らかに疑いを持った表情で、張飛が劉備に問う。
反対側にいる関羽も、いぶかしそうな顔をしている。

（あまり余計なことは言ってくれるなよ……）

袁紹は心の中でつぶやいた。

劉備が誰よりもこの二人の意見に耳を貸すことはよく分かっている。

だが今この時だけは、他ならぬ自分の意見に耳を傾けてほしかった。

唐突にこんなことを言われても、信じてもらえないと思う。

しかし、信じてもらえなければ自分は永遠に救われない。

いくら信じがたいことでも、これはまぎれもない事実なのだから。

しばらく、沈黙の時間が過ぎた。

やきもきしている袁紹の前で、劉備が静かに口を開く。

「分かりました、できることであれば、お手伝いいたしましょう。そうすれば、貴方ももうこのような怪異を起こさなくて済むでしょうから」

真に袁紹のことを思った言い方ではない。

だが、協力してくれるだけでも袁紹にとっては十分な答えだった。

劉備く愛惜の館にて（4）（後書き）

劉備は、一応袁紹に手を差し伸べる道を選びました。
しかし、袁紹に対する疑いを捨てた訳ではありません。

袁紹はそんな劉備に自分を信じてもらうために必死で努力しているのですが…。

劉備、愛惜の館にて（5）（前書き）

救ってほしいという袁紹の願いに、劉備は一応手を貸すことにします。

多少の因縁はあっても、もともとそれほど仲が悪い訳ではないし、二人の利害が一致すれば両者細かいことは我慢できる人間だからです。

しかし、細かい火種はずっと彼らの心の中でくすぶり続けています。特に袁紹の方は、劉備の傍らにいる男への烈火のような怒りをずっと我慢しているのですから。

劉備と愛惜の館にて（5）

「それで、どのようにすれば貴方は救われるのです？」

時間が惜しいとでも言いたげに、劉備が率直に問う。

以前の袁紹ならばここで怒り出すところだが、今は袁紹も善は急げの心境だった。

「割れてしまった魂が、再び一つになればよい。

そのためには、このわしと片割れの両方に、慈悲をもって生きていていいと言ってもらわねばならぬ。

今から片割れのところに案内しよう、詳しいことは道すがら話す」

袁紹はそう言って劉備に歩み寄り、自ら部屋の出口に向かった。

あとは劉備を片割れのところに連れて行けば、自分は救われるはずだ。

大丈夫だ、許すのはお人よしな劉備の得意技なのだから。

今度こそ、自分の人選に狂いはなかった。

袁紹が部屋から出ようとしたとき、横から関羽が声をかけてきた。

「袁紹殿、一つ聞いてもよろしいか？」

「何だ？」

すんなりと応じた袁紹の前で、関羽は部屋の中央にある豪華なベツドを指差した。

正確には、赤茶けたカーテンに包まれたベッドの上だ。

「あそこに何かよからぬものの気配があるが、あれは息の根を止めずともよいのであろうか？」

その質問に、袁紹の眉がぴくりと動いた。

誰にでも、触れてほしくない部分はある。

そこに構わず手を突っ込んでくる人間は、無関心よりずっとたちが悪いのかもしれない。

袁紹は怒鳴りつけそうになったのを何とか飲み込んで、物憂げな顔で答えた。

「気にするな、ただの悪夢からこぼれた怪物だ。
襲ってこぬものより、襲ってくるものを気にせよ。
行くぞ！」

袁紹が歩き出すと、劉備たちも一応素直についてきた。
とりあえず、袁紹の大切なものは守られた……袁紹は心の中でそつと胸を撫で下ろした。

背を向けて去っていく袁紹の後姿を、それは確かにカーテンの中から見守っていた。

かすかに透けたカーテンの中で、大きな人影がうごめく。
人にしては、明らかに大きすぎる影が。

それに目があるかどうかは分からない。
だが、視線に敵意はなかった。

青白く細い指が、そつとカーテンをめくり上げる。

見えなくなった袁紹の背中に、温かい眼差しが注がれる。

それに顔があるかは分らないが……それは確かに優しくほほ笑んだ。

「イトしい……私の、本初……」

部屋の外も、中と同様に血と錆に埋もれていた。

しかも、ここに来るまでに怪物はほとんど倒したはずなのに、無傷の怪物たちが襲いかかってくる。

まるで新しく生まれたかのように。

「来るぞ、右だ！」

「下がってください、袁紹殿！」

怪物が現れると、関羽と張飛が前に出て相手をする。

その間、劉備と袁紹は後方で身を固めている。

と、劉備の背後でにわかに不吉な音がした。

ねちねちと、何か粘っこいものがうごめくような音。

気づいて振り向いた劉備は、おぞましい光景を目にすることになった。

廊下を覆う赤い血の汚れが、意思あるもののように固まっていた。

手も足もないのに盛り上がったかと思うと、いきなり表面が崩

れだす。

血の汚れが再び床に戻った時には、そこに一匹の怪物が生まれていた。

劉備の顔から血の気が引いていく。

あまりの嫌悪感に身をこばわらせた劉備に向かって、怪物は勢いよく走りだした。

「兄者、危ねえ！」

とつさに張飛が劉備の前に出る。

しかし、その必要はなかったようだ。

怪物が狙ったのは、劉備ではなく袁紹の方だったのだ。

「つ……失せろ！」

袁紹は一瞬驚いて目を見開いたが、すぐに気を取り直して迎え撃った。

勢いよく飛びついてきた怪物の頭が、袁紹の剣にくいこむ。

怪物はそれで短い生涯を終えた、しかし袁紹の方も勢いに耐え切れず背中から汚い床に倒れこんだ。

「あ……袁紹殿、大丈夫ですか？」

張飛に守られたまま手を差し伸べる劉備を、袁紹はさっきよりずっと悪意のこもった目で見つめた。

羨ましい、羨ましい、妬ましい！

私だって、そんな時期はあったのに！

あったのに……「のせいで！！」

袁紹の心中を感じ取ったのか、劉備がびくりと手を引きかける。袁紹はその手を取らずに、自分の手を床について立ち上がった。

「ふがないところを見せたな！」

自嘲するようにそう言って、袁紹は腹立ちまぎれに怪物を蹴とばした。

自分が弱いのは、生前から嫌というほど分かっている。

世間では武に長けているなどというが、それは一般の武將と同じくらいの意味だ。

劉備の義兄弟のような全てを蹴散らせる強さなど、持ち合わせていない。

だから劉備と同じように、あの二人と絆を結んでいたのに！それを奪った張本人に、自分は救いを請うしなくて……。

袁紹は気を紛らわすように、周りに散らばる怪物の残骸に視線を落とした。

そして、気遣うように寄ってきた劉備に問う。

「もし、この怪物がわしの心から生まれたものであるとしたら、おぬしはわしをどうする？」

「えっ……！？」

劉備は驚いた顔をしたが、怪物の出どころについてはすでに想像がついていただろう。

驚いたのは、袁紹自身の口からその言葉が出たことだ。

つまり、劉備は袁紹を偽りの多い人間だと思っている。

自分はそこまで信用されていないのかと思うと、自然と笑みがこぼれた。

劉備、愛惜の館にて（5）（後書き）

この話の途中までで、2ちゃんねるで書きためていた分は終了です。

これからも話は続いていきますが、これまで以上に更新が遅くなることをご了承のうえ、長い目で見てやってください。

劉備、愛惜の館にて（6）（前書き）

劉備に力を貸してもらいながら、袁紹は今度は楼閣の下に下がっていきます。

楼閣の頂上にある聖域とは逆に、己の最も醜い部分を晒す地下の暗闇に向かって…。

劉備と愛惜の館にて（6）

「しかし、今この怪物は袁紹殿にも害を……！」

必死で取り繕おうとしているのが、なお憎らしい。

あの時と同じように、うまく欺いて出られるとでも思っているのか。

こういう態度をとられると、こんなものに救われていいのかと思えてくる。

だが、袁紹はそこで頭を冷やした。

こんな奴でも、民を救い、世を直したいという志は確かだ。

ならば、自分が救うべき対象であると分からせればいい。

劉備は偽りを憎み、何にでも筋道を通したがる。

ならば自分がするべきことは一つ、劉備に対して隠し事をしないことだ。

生前は立場上いろいろと隠してきたこともあったが、地上の地位や名誉を全て失った今、それを隠し続ける理由はない。

袁紹は憂いをこめた口調で、劉備に語りかけた。

「おぬしの察しのとおり、この怪物はわしの感情から生まれたものだ。」

事実は事実、気を遣わずともよい」

己の罪を認める発言に、関羽と張飛もこちらを向いて聞き耳を立てた。

袁紹は構わずに続ける。

「ただ、魂が割れているせいで、わしにもこやつらを制御できぬのだ。

おかげで、危険な目に遭わせてしまったが……」。

ともかくわしの魂を直さねば、この悪夢を終わらせることはできぬ」

と、そこまで言つて、袁紹は一旦劉備の返答を待った。
しかし、言い返してきたのは張飛だった。

「やいやい、ずいぶんと責任逃れな言い方じゃねえか！
てめえは自分の感情に自分で責任も取れねえのか！？」

その言葉には、侮蔑と呆れがありありとにじみ出ていた。
自分のことは全部自分で始末しろとばかりの物言いだ。
袁紹は、こういう短絡的な頭の持ち主が大嫌いだった。

自分の感情を自分で全部制御できれば誰も苦労などしないのだ。
今のこの怒り一つを制御するのですら、こんなに苦しいのに。

袁紹が何も言えずにいと、関羽が後ろから張飛をたしなめた。

「言葉が過ぎるぞ、張飛！

感情というのは本来、思うに任せぬものなのだ。

人のことを言うくらいなら、おまえはおまえの酒癖を自分でどうにかできるのか？」

「うへっ……分かったよ兄貴」

痛いところを突いた一言に、張飛は一瞬でしおらしくなった。

そこでやつと、劉備が口を開く。

「袁紹殿の苦心、お察し申し上げます。
名家の当主などはしがらみも多いもの、それゆえの心労も多かったでしょう」

劉備は優しく眼を細め、袁紹に頭を下げる。

「そのためにこのような事態になってしまったのであれば、それは袁紹殿の意に沿わぬことです。

あなたの本心がこれを望まぬのであれば、私に手助けを拒む理由はありません。

微力ながら、力をお貸しいたしましょう」

偽りのない慈悲が、そこにはあった。

袁紹ははにかむように微笑みを浮かべ、劉備が差し出してきた手を握り返した。

「うむ、恩に着るぞ」

返した袁紹の言葉もまた、生前とは違い、嘘偽りのないものだった。

そうこうしているうちに、劉備たちは楼閣の一階に戻ってきていた。

これで地上は全部の階を回ったはずなのだが、袁紹は足を止めなかった。

正面の入り口とは反対方向にある、奥まった部屋に入っていく。

「袁紹殿、そこは……？」

袁紹あとについて部屋に入った劉備は、中を見るなり絶句した。

その部屋には、家具も装飾もなかった。

殺風景な床の上に、無数の黒い影が転がっている。

人の赤ん坊くらいの大きさのそれは、死んだように不気味な静寂の部屋を彩っていた。

「え、袁紹殿……それは一体……？」

劉備が震える声で聞くと、袁紹は悲しそうにつぶやいた。

「父上が名門の当主でなかったら、わしもこうなっていたかもしれぬ」

「！？それはどういう……？」

劉備の言葉が終わるのを待たずに、袁紹は床板の隙間に手をかけた。

ほこりの積もった床板がごとりと動き、その下にさらなる闇が口を開ける。

そこには、階段があった。

どこまで続くとも分からない、下へ向かう階段。

漆黒に塗りつぶされた穴の底から、この世のものならぬ瘴気が吹き上げてくるようだ。

腕には自信のある劉備たちも、これには息をのんだ。

袁紹は側にあつた蠟燭に火を灯すと、自ら率先して穴の中に踏み込んだ。

「この先に、悪夢に染まつたわしの片割れが待つておる。

下は確かに恐ろしい場所だ、だがおぬしらなら来られるだろう」

そこで一息ついて、袁紹は劉備に請うような視線を向けた。

「どうか、わしを信じて一緒に来てほしい。

この悪夢はわし自身ではどうにもならぬ！

おぬしらだけが頼りなのだ！！」

しばし、静寂の時間が流れた。

劉備は少しの間義兄弟たちと視線を交わしていたが、やがて袁紹の方に向き直つてうなずいた。

「分かりました、参りましょう。

あなたの真実を見届けることで、あなたが救われ、民がこの脅威から救われるならば」

やはり、完全には信用されていない気がするが、それでも十分な答えだ。

つまり袁紹は、民を脅威から救うために、救わねばならないと判断された訳だ。

だが、それでも救ってもらえれば結果は同じことだ。

袁紹は精一杯の感謝の笑みを浮かべ、劉備に告げた。

「すまぬ、死人の身でここまでしてもらえとは、おぬしに想われる民は幸せであらう。

わしももはや地上に守るものはない。

ここからは隠し事なく、わしの真実の全てを見せよう！」

これから冥府のごとく暗い穴に下りていくのに、袁紹の目には光が灯っていた。

劉備の仁徳が、袁紹にも希望の光を与えてくれたのだ。

（そうだ、わしはもう名家を守らなくてもよい。

この男に全てを晒して、今ここにいるわしを救ってもらおうのだ！）

袁紹は強い決意を胸に、自ら先頭になって階下の暗闇に身を沈めた。

全てを晒し、真実を語れば救ってもらえる…その確信が何よりも彼を支えていた。

たとえ真実を晒しても、

それを相手が真実と認めるかどうかはまた別の話だが…。

そんな考えは、今の袁紹の頭にはなかった。

劉備と愛惜の館にて（6）（後書き）

袁紹は生前、いろいろなことを隠し、周りと自分を欺いて生きてきました。

自分を守るためだったとはいえ、欺かれていた方は当然袁紹に不信を抱いています。劉備にとっても、袁紹は本音で接していません。たため、素直に信じることはできない状態になっています。

袁紹は劉備に全てを明かし、信じてもらおうと考えますが、うまくいくかどうかは読み進めてのお楽しみです。

劉備、深淵の地下牢にて（1）（前書き）

袁紹は劉備を、裏の自分が待っている地下牢まで連れて行こうとします。

袁紹は劉備にできるだけ不信感を持たれないよう、感情を押し殺して行動していますが、悪夢の中は袁紹自身の感情を逆なでする怪物に満ちています。果たしてそれらに遭遇して優しい面が壊れた時、劉備たちは袁紹にどんな感情を抱くのでしょうか。

劉備と深淵の地下牢にて（1）

地下の空気は、どんよりと重く淀んでいた。

光が差さないので暗闇かと思っていたが、道のところどころにか弱い光を放つ蠟燭が灯されていた。

はつきり見えるのはその周りのみ、自分たちの影でさえほぼ完全な闇となる。

「一本道なので迷うことはないであろうが……はぐれぬよう、気を付けられよ」

袁紹はそう言って、劉備たちの前を進んでいく。

突然、袁紹の歩みが止まった。

「袁紹殿？」

劉備が声をかけると、袁紹は渋い顔をして暗闇の奥を見つめていた。

漆黒に塗りつぶされた空間から、ずりずりと何かを引きずるような音が聞こえてくる。

「……怪物か？」

「うむ、すまぬが……多いぞ」

そろそろと蠟燭のある近くまで戻り、劉備たちは武器を構える。

袁紹は関羽と張飛の後ろに下がらせ、さらに劉備が守るようになり添う。

そうして臨戦態勢を整えたころ、怪物が悠長に姿を現した。

寝台の上に重なった肉塊は、上にいた奴と同じだ。

それに、顔に板を打ち付けられた召使いと犬も、外にいた奴と同じだ。

しかし、今度は別の怪物も混じっていた。

死人のように白けてぶよぶよとたるんだ肌をした、人型の怪物だ。

腕の先は昆虫のように細く、鋭い爪がぎらぎらと光っている。

その姿を見たたん、袁紹の眉間にしわが寄った。

「下衆が……！！」

そのつぶやきに反応するように、怪物たちが一斉に襲いかかってきた。

犬たちが、よだれにまみれた牙をむいて飛び掛かる。

それを打ち落とすと、今度は召使いが得物を振り上げて近づいてくる。

さらに、倒れる召使いの体を盾にして寝台の怪物が四本の手を伸ばす。

それでも、一本道で後ろから敵が来ないせいで、戦いはだいぶ楽だった。

関羽と張飛が大きな体で壁を作っているおかげで、袁紹と劉備のところまで怪物の牙は届かなかった。

いや、そもそも関羽と張飛に手が届く怪物がほとんどいない。

劉備を守るこの二人は、それほどに強いのだ。

袁紹はその二人の姿をできるだけ視界に入れないように、こっそりと目を伏せていた。

余計なことを考えてはいけない。

せつかく救ってもらえるのだから、下手な嫉妬に身を任せてはならない。

以前自分の前にもあった、同じような壁のことなど……

今は、思い出してはいけない……。

そうして袁紹が目をそらしている間にも、怪物は次々となぎ倒されていく。

仲間が少なくなったのに苛立ったのか、白けた肌の怪物がもごもごと口を動かした。

「シヨウのクセに……キタナらしい……!!」

それは、憎悪と怒りのこもった声だった。

「しゃべった!？」

突然の言葉に、関羽と張飛の刃が鈍る。

これまでの怪物は、不気味な声を立てることはあっても、言葉を話すことはなかった。

しかしこの怪物は確かに、今言葉を発したのだ。

「まさか……人間では……?」

人型の外見も手伝って、劉備の心に迷いを植え付ける。

怪物ならば、倒すのに容赦はいらない。

しかし、もし人間であれば、劉備たちは手にかかるのを大いにためらってしまう。

いや、人間でなくても、人間であつたような痕跡を見つけたとたんに……。

「関羽、張飛！

斬るな！！」

一瞬の迷いから、劉備が攻撃に待ったをかける。

「待て、手を止めるな！！

あれも人間では……！！」

袁紹は慌ててそれを否定したが、関羽と張飛は劉備の言う事しか聞かない。

二人が刃を逸らした隙に、白けた肌の怪物が袁紹のもとへ走りこむ。

「お止めください！どうかお話を……」

劉備は言葉で怪物を止めようとしたが、無駄なことだ。

この怪物もしょせん、袁紹の暴走した悪夢の一つに過ぎない。言葉をしゃべることはあっても、言葉を解することなどないのだ。

怪物はただ、袁紹の脳裏に刻まれた言葉を反復しているに過ぎ

ないのだから。

怪物の針金のような爪が、袁紹の体に迫った。

「シヨウのクセに……ゲセン、の……」

もともとと同じ言葉を繰り返しながら、袁紹の顔めがけて爪を振り上げる。

その瞬間、袁紹の顔に烈火のような怒りが広がった。

「黙れえええ！……！」

絶叫ともとれるほどの怒声とともに、袁紹の体が低く沈み込む。腕を空振りして前のめりになった怪物の下に潜るように、歩を進めて剣の切っ先を上には構える。

「下衆が、その口を閉じよ！」

袁紹の口から漏れたのは、劉備たちが聞いたこともない低く濁った声だった。

その顔には、およそ袁紹という人物に似つかわしくない、悪鬼のような怒りの形相が張り付いていた。

「袁紹、殿……？」

驚愕する劉備たちの前で、怪物の後頭部から血塗られた刃が突き出す。

怪物は、それ以上何も言うことなく、静かに倒れ伏した。

劉備と深淵の地下牢にて（１）（後書き）

袁紹は劉備と対面してから、ずっと感情を抑えて冷静に対応してきました。

苦手な人物を含む相手に冷静に対処するのは、思った以上に精神力を奪われるものです。怪物の言葉にキレてしまったのも、袁紹がそれだけ消耗している証拠なのです。

一方、劉備たちは袁紹の態度が豹変すれば、当然のように不安を覚えます。

袁紹はこのまま劉備の信頼を得、救ってもらえるのでしょうか。

劉備と深淵の地下牢にて（2）（前書き）

劉備たちは天下万民を救うという理想に燃えて生きています。彼らが抱えるべき地を持たない流浪の身のまま、もう中年にさしかかろうとしている現実を考えると、冷たい目で見れば彼らはとんでもない理想主義者なのです。

理想主義の人間は、自分の意に沿わない、又は理解できないシリオを認めることができません。

袁紹がいくらがんばっても、劉備がそれを理解できなければ…。

劉備、深淵の地下牢にて（2）

怪物が倒れてからも、袁紹は少しの間執拗に怪物を切り刻んでいた。

それでもどうにか己を押さえつけて手を止めると、袁紹は実に自分の悪そうな顔で劉備たちの方を向いた。

「見苦しいところを見せたな。」

ところで玄德、おぬしは……本当にわしを救う気があるのか？」

自分を救ってくれようとする恩人に、袁紹は懷疑の眼差しを向けずにいらなかった。

自分は、ここにいるのは自分の悪夢の産物であるとちゃんと説明した。

それに、あの怪物は明らかに自分を殺しにかかってきていた。

それでも、劉備たちは勝手に攻撃の手を止めてしまった。

いくら救ってもらえるといっても、その前に怪物に引き裂かれた訳がない。

「玄德よ、わしがここで倒ればおぬしらを導くことはかなわぬぞ。わしが倒れても片割れがいる限りこの悪夢は消えぬ、わしの導きなしでこの悪夢を彷徨い続けたいか――！」

そこまで言うて危機感をあおってやると、ようやく劉備は頭を下げた。

「申し訳ありません、つい言葉を解するなラと思ってしましまして

……」

必死で謝罪する劉備の姿に、袁紹はかるうじてそれ以上の叱責を抑えた。

お互い、これ以上顔を合わせる時間を伸ばしたくない。

袁紹自身、さっきの怪物に心の古傷を引っ掻き回されたせいで余裕をなくしつつあった。

そもそも、劉備だけならともかく、

その義兄弟と顔を合わせるのとはそれだけで苦痛なのだ。

特に、あのからみつきそうながい髭は何よりストレスだ。

あの男は、その長い髭が袁紹のどんな記憶を釣り上げるか自覚しているのだろうか？

「ともかく、今この悪夢に世界にはおぬしら以外の生者はおらぬ。

おぬしらは、おぬしらとわしのことだけを心配して先に進めばよい！」

自ら振った話を強引に打ち切って、袁紹は再び前に出て劉備たちから目をそむけた。

今はただ、一刻も早く片割れのもとにたどり着いてこの苦痛から解放されたかった。

しかし、歩き出そうとしたとたん、不機嫌な野太い声が袁紹を止めた。

「いい加減にしろよ、てめえ……」

幸いにして、最も苦手な方の義兄弟ではない。
しかし、性格だけで判断すれば最も嫌いかもしれない方だ。

「兄者はてめえを助けてやろうって言っただぞ？
なのに、てめえは都合の悪いことは隠してばっかじゃねえか！
おれたち以外に生きた人間がいねえとか、てめえが倒れても悪夢
が消えねえとか、そんなの聞いてねえんだよ！！」

張飛の言葉に、袁紹はぎりつと唇を噛んだ。

確かに、それを劉備たちに教えていなかったのは間違いない。
しかし、果たしてそれは教える必要があるのだろうか？
今まで自分がしゃべっただけの情報に従えば、自分も劉備たちも
簡単に助かるのに？

根ほり葉ほり聞こうとする人間は、嫌いだ。

だが、それでも袁紹は素直に応じた。

「そうか、ならば答えよう。

おぬしたちは何が知りたい？わしの何を聞きたい？
おぬしたちがそれで満足するなら、わしは正直に答えよう。」

生前の袁紹ならば、まずあり得ない言葉だ。

しかし、今はこう答える以外に救いを得る道はない。
さつき、自分の全てを嘘偽りなく晒すと、約束したのだから…
…。

全ては、この険しい道の先にある安らぎのため……必死で自分に

言い聞かせた。

「さあ、何が聞きたい？
言ってみよ！」

半ばやけになって、劉備たちに問う。

劉備は少し気まずそうに眼を伏せていたが、すぐに凜とした表情で口を開いた。

「あなたがどうしてこのような悪夢を生み出すに至ったのか、私には分かりません。

この悪夢の原因を、教えていただけないでしょうか？

そしてこの場所……見たところ遊郭のようですが、この場所がどのようにあなたの悪夢に関係しているかも……」

いきなりそこにくるか、袁紹は頭痛を覚えた。

義兄弟たちのように、もっと細かいところから入ってくれたら時間が稼げたのだが、こんな風に聞かれたら答えぬ訳にはいかない。

現に関羽と張飛はすでに袁紹に猛禽のような視線を向けている。

二人の握る武器の切っ先は、心なしか袁紹の方を向いているように思えた。

逃げ場は、ない。

袁紹は一度大きく深呼吸して、腹をくくった。

そして、自分は先頭に立って歩きながら、背後にいる劉備に向かって話しかける。

「玄德よ、おぬしは、わしが娼婦の子であると聞いたことがあるか？」

胸に、錐で刺されたような鋭い痛みが走る。

「おぬしも徐州にいたのなら、噂くらい聞いているであらう。わしの悪夢は、その生まれに由来しておる……」

背後で、劉備が息をのむ気配がする。
もう後には引けない。

袁紹は身を焦がすような羞恥と屈辱にがむしゃらに抗いながら、己の悪夢を語り始めた。

劉備と深淵の地下牢にて（2）（後書き）

袁紹は生きるために築き上げてきた名家の誇りを自ら踏みにじって、悪夢を告白するはめになってしまいました。

しかし、劉備が袁紹を信じられないのもある意味当然のことです。悪夢の世界のルール、袁紹の過去、劉備にとっては理解不能な不安材料がてんこ盛りなのです。

果たして、袁紹はこの溝を埋めて救いを手にできるのでしょうか。

劉備、深淵の地下牢にて（3）（前書き）

相手を追い詰めようとして、いつの間にか自分が追い詰められていたことはありますか？

相手を袋小路に追い込むことは、自分も袋小路に入ることです。

劉備を誘導するつもりが、袁紹は逆に自分の逃げ場を失ってしまっています。

劉備、深淵の地下牢にて（3）

「ひつぎゃあああ……！」

止める止めてくれ兄貴いいいい……！」

冷たい石牢の部屋に、男の絶叫が響く。

叫んでいるのは弟、責め苛んでいるのは兄だ。

固い石の寝台で、袁術は拘束された不自由な身でのた打ち回っていた。

その醜く肥満した体に、何度も鉄の鞭が振り下ろされる。

「おのれ、貴様が……！」

貴様さえいなければ、私はなあああ……！」

鞭を振り下ろすのは、袁紹だ。

返り血ではなく、元から血塗られた姿の裏の袁紹だ。

さつきから、表の袁紹から届くのはひどく不快な感情ばかりだ。

葛藤、屈辱、羞恥、否応のない敗北感……地下に入ってから、ずっとそんな感じだ。

（表め、無理をしおって……！）

表の袁紹が何をしているかは、だいたい分かる。

おそらく劉備たちに、悪夢の原因を白状しているのだろう。

自分が妾腹の子であり、屈辱に満ちた幼少期を過ごしてきたことを……。

それは、表の袁紹にとって心臓をえぐられるのに等しい行為だ。名家の当主として、誇りと栄光に満ちた生を歩むための人格である表にとって。

しかも、あんな元卑しい身分の放浪の武将に自分からそれを語るなど。

だから、表が劉備たちをここに連れてきたら、裏の自分がそれを語ろうと思っていたのだが……。

どうやら、劉備たちがそれを表に許さなかったようだ。

おかげで、裏の自分はさっきからずっと絶え間ない怒りに苛まれている。

この感情に身を任せたら、劉備たちが来る前に袁術を肉塊に変えてしまいそうだ。

（だが、それはならぬ！）

裏の袁紹は火のように熱い吐息を漏らし、鞭を振り下ろす手を止めた。

袁術には、劉備が来るまで意識を保ってもらわなければ。

劉備にとって自分は信用できない男だとは思う。

だが、袁術と比べてもらえば少しでもそれを緩和できると思う。

姑息な手だが、正直、袁紹一人で劉備の信用が得られるかは微妙なところだ。

これだけ苦しい思いをしているのだから、もう少し苦しい思いを

してもそれを回収できるに越したことはない。

そのためには何でもしてやる……袁紹はその一念で荒れ狂う感情を抑え続けていた。

表も、裏も……。

心に生じた地割れを無理やり踏み固めるようにして。

「……という事情だが、分かってもらえたか？」

ずきずきと痛むこめかみを押えて、表の袁紹はちらりと劉備の方を見た。

劉備たちは、どうにも信じられぬようなぼかんとした顔をしている。

袁紹はたった今、己の過去の悪夢を話し終えたのだ。

自分が卑しい身分の女から生まれたこと。

幼いころ、母親に会えず、心休まらない名家で苦しみ続けたこと。

その母親がいた楼閣が、ここの元になっていること。

「これが、わしの真実だ。

生きている間は名誉のために隠し続けてきたから、知らずとも無理はないが」

袁紹が自嘲をこめて言っていると、劉備は少しうつ向いて口を開いた。

「お噂だけは……聞いたことがありました。

呂布から聞いた話ですが、袁術があなたを娼婦の子と言いつらしている」

やっぱりそうかと、袁紹は心の中でうなずいた。

生前、袁紹と袁術はそれぞれが独立してからも仲が悪かった。兄弟同士で、お互いの力を削ぐために必死に策略を巡らしていた。その中で、袁術は自分に支持を集めるために、袁紹の生まれを暴いて貶めようとしていたのだ。

あの男は娼婦の腹から生まれたくせに、名門を気取る大嘘つきだ。

正しい袁家の血統は自分にある、だから自分の方に手を貸せと。

もちろん、袁紹はそれを否定した。

民衆の支持を失うのが怖いだけではない。

それを認めてはならない空気が、袁紹を支える側近の間に流れていた。

自分はこんなに偉い名門の当主に仕えているのだ。
そのようなことが真実であっていい訳がない。

そうですね、我が君？

認めてしまえば、自分が魂を割ってまで手に入れた幸せが一瞬で壊れてしまう気がして。

曹操や一部の識者からは道化のように言われようと、構わず自分を偽り続けた。

「にわかには信じられぬとは思いが……これに関しては、袁術が正し

かったという訳だ」

袁術の名を出してやると、劉備はますます困惑したようだった。袁紹はそんな劉備をなだめるように、静かに告げた。

「実はおぬしたちより先に、袁術をここに招いておる。愚かな弟だが、今はあれより他に証人がおらぬのでな。この先で……わしの片割れがあやつを監視しておる」

「そう……ですか……」

袁術がいると聞いて、劉備の表情が曇った。無理もない、自分が討伐した相手と顔を合わせるのだから。

「わしの真実に疑いがあるなら、直接袁術に聞くがよからう。そのうえで、わしが救うに値するか判断すればよい」

袁紹はあえて結論を出さずに、地下牢に向かって足を進めた。

劉備がこの真実を容易に認められないのは分かる。

劉備にとって、袁紹は常に名家の誇りを鼻にかけてお高くとまつた人物だったのだから。

生前、数十年かけて築いてきた印象を拭うのは想像以上に大変だ。

だが、劉備が真実を認めてくれなければ、袁紹は救われないのだ。そのためなら、憎い弟などいくらでも利用してやる。

「さあ、もうすぐ片割れのところだ」

暗い一本道の先に、光が見えてきた。

袁紹は無意識に足を速めて、その光に向かって突き進んでいった。

劉備、深淵の地下牢にて（3）（後書き）

途中でトラブルはあったものの、袁紹は無事に片割れのもとへたどり着けそうです。

裏の袁紹は袁術を拘束し、劉備たちを待ちかねています。

劉備たちは、袁紹の期待に応えることができるのでしょうか。

劉備、深淵の地下牢にて（4）（前書き）

袁紹はようやく劉備を袁術のもとに連れ込み、救われるシナリオを完結させようとします。

劉備が自分と袁術を比べることで自分を救うべきであると判断し、袁術を地獄落としたうえで劉備に救われる…これが袁紹の描いた筋書です。

果たして、劉備は袁紹を受け入れてくれるのでしょうか。

劉備、深淵の地下牢にて（４）

石牢の部屋では、裏の袁紹がにやにや笑いながら袁術を見下ろしている。

さっきまで振り下ろされていた鞭は止まっていたが、袁術の顔は色を失っていた。

「さあ、もうすぐ劉備が来るぞ」

そう言っていると、袁術は面白いように恐怖に顔を歪める。

「おまえは、生前の行いの報いを受けて地獄に落ちるのだ。そして、おまえの犠牲と引き換えにわしは救われる！！」

改めてそう口に出すと、胸がすく思いだった。

幼少期はずっと、袁術とその母親にひどい目に遭わされた。成人してからも、袁術には迷惑をかけられっ放しだった。そして死後でさえ、それらが原因で悪夢とともに彷徨うはめになった。

ようやく、それから解放される日が来るのだ。

表の袁紹が近づいてくるのは、気配で分かっていた。そして彼が、己の心に無理をかけてまでしっかり劉備を連れてくるのも。

すでに、小さな戸口の向こうから、足音が聞こえ始めている。何よりも待ち望んだ、解放の足音が。

「さて……」

裏の袁紹は、一度大きく息を吸った。

胸のつかえを吐き出すようにゆっくりと息を吐き、珍しく悪意のない凜とした表情になる。

ここが正念場だ。

裏の袁紹は部屋の入り口の前にたち、祈るように目を閉じた。

暗い道の先に、扉が見え始めた。

赤く錆びた、無機質な鉄の扉だ。

「ここに片割れと弟がいる。

玄德よ、よくここまで耐えてくれた。礼を言うぞ」

表の袁紹はできるだけ優しい口調で、後ろにいる劉備に感謝を述べた。

あくまで前を向いたまま、目を合わせずにだが。

袁紹の眉間にはしわが寄り、顔はひきつっているのを悟られないために。

耐えているのは、こちらだ。

よくここまで頑張ったと、本当に自分をほめてやりたいと思う。

今、劉備たちは事態を理解しかねているだろう。

この場であまり不自然な表情を見せるべきではない。

大丈夫だ、後は裏の自分に任せてうまく事を運んでもらうだけだ。
袁紹は胸に広がる安堵を感じながら、扉に手をかけた。

ぎいっと重い音がして、錆びついた扉が開く。

その先には、確かに袁紹にそっくりなものが佇んでいた。

全身が血に塗れた姿の、もう一人の袁紹だ。

裏の袁紹は、劉備たちが部屋に入ると礼儀正しく頭を下げた。

「このような所まで、よく参られた。
おぬしの慈悲に、心から感謝する」

そうやってあいさつしてやると、身をこばわらせていた劉備たちの表情が和らいだ。

しかし、劉備の表情はすぐに厳しいものに変わった。

「袁術……！」

劉備の目は、早くも拘束されている袁術を捉えた。

「あつあの野郎……！」

関羽と張飛も、怒りを露わにする。

当然だ、劉備たちは民の味方として、暴虐の偽帝であつた袁術を討伐したのだから。

袁術がどんな悪政をしてきたかは、むしろ劉備たちの方がよく知っている。

袁術に歩み寄る劉備に、裏の袁紹は静かに告げた。

「おぬしの助けを求めるなら、わしも何か民のためになることをせねばと思つてな。

といつても、わしはもう死んでおるから……せめてこの世に残っている暴君の魂を始末しようと思ひ立つた」

袁術の無残な姿を、憂いをこめた目で見ながら、裏の袁紹は続ける。

「そして彷徨っているこやつを見つけ、ここに捕らえておいた。我が弟ゆえ心苦しいが……こやつをこの世に放置してはならぬと思つた。

劉備よ、どうか今一度、こやつに引導を渡してやってほしい」

それを聞くと、劉備はごくりと唾を飲んだ。

そして、怒りを抑えるように一度深呼吸し、裏の袁紹の顔をしかと見据えた。

「袁紹殿のお気持ちは、よく分かりました。

しかし、引導を渡す前に、確かめることがあります」

裏の袁紹にも、それが何であるかはすぐに分かった。

袁紹の幼少時の真実を、確かめようというのだろう。

そうでなくてはと、裏の袁紹は心の中でほくそ笑んだ。

そうでなくては、表の袁紹がこんなにひどく消耗してまでここに連れてきた意味がない。

劉備の顔が、袁術の顔に近づく。

袁術の目が、これ以上ないほど恐怖に見開かれた。

「な、何だよ……てめえも結局、兄貴の味方なのかよ!？
お、おれは……皇帝なんだぞ!！」

震える声で、もはや意味をなさない言葉を絞り出す。

「ちくしょう、どいつもこいつも……おれは袁家の嫡子なんだぞ……」。

兄貴や曹操より、ずっと偉いんだぞ!？

なのに、何で……何でみんなして、娼婦の子や宦官の孫を盛り立てるんだよ!！」

「……その娼婦の子というのは、袁紹殿のことですね？」

都合よく袁術が発した言葉を、確認するように劉備が問う。
すると、袁術はニヤリと笑って劉備に言った。

「ああ、そうだ。あいつは売ってる女の腹から生まれたんだ。
ちゃんと夫に仕える堅気の女から生まれたおれやおまえとは違うんだよ！」

分かるよな、母親思いのおまえなら？」

「それは私を惑わすための嘘ではないのですか？
おまえは……簡単に嘘をつく人間だから」

劉備が懐疑の眼差しとともにそう言つてやると、袁術は大慌てで

首を振った。

「う、嘘じゃねえ！」

こいつは本当に娼婦の子なんだ、名家の当主になんかなれる奴じゃないんだ！！

嘘だと思うなら、袁家に昔から出入りしてる人間に聞いてみる！
？」

そこまで言われても、劉備は事の真偽を図りかねていた。

袁術は偽りの多い人間だ。

それに……袁紹も今は素直なふりをしているが、生前はそれなりに汚い手も使っていた。

他人に聞けと言われても、今この世界にいない人間には聞きようがないではないか。

判断できずに戸惑った末、劉備は関羽と張飛に声をかけた。

「おまえたちはどう思う？」

劉備、深淵の地下牢にて（4）（後書き）

袁術の反応は袁紹の思ったとおりで、袁紹の幼少時の真実をきちんと劉備に伝えてくれました。

しかし、劉備はまだ迷っています。

義兄弟たちの意見、そして袁紹の反応如何によつては…この章も終わりに近づいてきましたが、まだまだ先は分かりません。

劉備、深淵の地下牢にて（5）（前書き）

袁紹はついに、劉備に袁術を差し出して救いを求めます。
しかし、劉備はそれを受け入れるのでしょうか。

袁術は劉備にとって憎い敵。決断を託された義兄弟たちにとって
も、悪い話ではないのですが…。

劉備、深淵の地下牢にて（5）

表と裏、二人の袁紹の肩がかすかに震えた。

劉備は自分で判断できないと、結局義兄弟に判断を託す。
もしここでこの二人が、下手な答え方をしたら……。

心配する袁紹をよそに、二人は劉備に己の考えを述べた。

「私は、真実であると思います。」

そもそも袁術は己のためだけに動く小人物、袁紹が真に袁家の嫡流ならば袁術が家を二分する道理がありません。

名家ほどこしきたりが幅をきかすもの、長男の袁紹殿と家を二分できるといふことは、袁紹殿に傷となる何かがあるからと考えます」

幸い、関羽は袁紹を信じてくれた。

事実に基づいた、客観的な理論だ。

袁紹が嫡流の長男であれば、袁術が独立して大勢力になることがまずあり得ない。

慣例に従っても能力で比べても、明らかに袁紹が勝っているのだから。

「うむ、それは一理ある。張飛はどうなのだ？」

一方の張飛はちんぷんかんぷんな顔で考えていたが、そのうち顔を上げて答えた。

「難しいことは分からねえけど、信じるなら袁紹だろ？」

とにかく、袁術は殺した方がいい！
こいつだけは確かだ！」

「うむ、決まったな」

劉備は袁術の方に向き直り、剣を構えた。
その顔には、強い決意がみなぎっている。

「ひいいい！！」

袁術が、泣きそうな声で悲鳴を上げる。
劉備はそんな袁術に、凜とした声で告げた。

「おまえは生前、行く先々で民を苦しめてきた。
そのおまえをこの世に残しておけば、いつか妖怪に落ちて再び民
を苦しめるかもしれぬ。

私は民のために、ここで禍根を断つ！」

さらに劉備は、袁紹に向かって深く頭を下げた。

「袁紹殿のご決意は、よく分かりました。
世のためとはいえ、この悪霊はあなたの弟……苦しいご決断だっ
たでしょう。

それでもこの道を選んでくださったあなたに、感謝いたします」

劉備は大きく息を吸って、袁術の頭上に剣を振り上げた。

今こそ、裁きの時だ。

民を苦しめた暴君に、仁の裁きが下る。

そして兄を苦しめた弟に、復讐の鉄槌が下る。

劉備の義兄弟と二人の袁紹が見ている前で、劉備は一息に剣を振り下ろした。

ごうつと、風が呻る。

ざばつと肉が裂かれ、どす黒い死者の血が飛び散る。

「あああー!!」

表の袁紹が、顔を覆ってその場に崩れ落ちた。

同時に、裏の袁紹が呆けたような表情に変わり、乾いた笑い声を発した。

「は、はは……あはははは……!」

劉備はふつと息を吐きだし、剣についた血を振り落した。

「袁紹殿……」

劉備は表の袁紹を気遣うように、寄り添って背中を撫で始めた。表の袁紹の指の間から、ぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。

劉備の背後には、首と胴が別れ別れになった袁術の姿があった。

これで予定どおり、袁紹は救いを得られる……
そのはずだった。

裏の袁紹は、笑いが止まらなかった。

「くくくつははははは！！！！
あーっはっはっは！！！！」

目の前で、弟が殺されている。

かつて、兄である自分を執拗にいじめ抜き、死ぬほど辛い日々を与えた弟が。

成人してからも、自分が魂を割ってまで手に入れた幸せを事あるごとに壊そうとしてきた弟が。

自分が幸せになるために、こいつはいてはいけなかった。

正確に言えば、袁術はすでに死んでいるのでただ行動不能にしたに過ぎない。

時間が経てば、また首と胴がくつついて彷徨い始めるだろう。

だが、もうこの弟にこの世での時間は与えられない。
今から、自分がこいつを地獄に落とすのだから。

生前追いかけてまわされた相手に再び殺され、目が覚めたらそこは地獄の釜の底……

袁紹が袁術に与えたかったのは、まさにこの悪夢だけだ。

裏の袁紹は、満を持して剣を抜き放った。

「さあ、今から袁術の魂を地獄に落とすでしょう！
こやつの行先は、全くもって地獄がふさわしい」

それを聞いたとたんに、関羽がいぶかしそうに問う。

「地獄に落とす……？」

袁紹殿には、それができると?」

裏の袁紹は、構うことなく、剣の切っ先を床に向けて答えた。

「ふん、わしは地獄からその力を与えられておる。

本来は幽霊のわしが現世に干渉し、助けを求めるために必要な力よ。

だが、せつかくおぬしらが袁術を仕留めてくれたのだ、こういう使い方も世のためになるだろう?」

裏の袁紹の顔には、満足の笑みが浮かんでいた。

弟を葬る悲しみなど、あるはずがない。

そもそも、そういう感情を持たないようにしたのは袁術自身ではないか。

「おい待てよ、それはおまえの弟だろ?

おまえ、かわいそうとか思わねえのか?」

張飛が何か言っているが、それもどうでもいい。

自分は袁術のせいで、生前ずっとかわいそうな目に遭ってきた。その自分が、袁術をかわいそうな目に遭わせて何が悪い。

裏の袁紹は、湧き上がる歓喜を抑えきれなかった。

今までずっと押し殺し、我慢していた感情の波が一気に押し寄せてきたようだ。

それは、劉備に救いを求めるために感情に耐えていた反動でもあるのだろう。

裏の袁紹は、剣を手から落とすような自然な動きで、床に突き刺した。

とたんに、石の床の表面が蒸発するようにはがれ、その下から金網が現れる。

一瞬の間に、部屋中の床が音もなく金網に変わっていた。

劉備、深淵の地下牢にて（5）（後書き）

袁術を劉備に殺させ、袁紹は最後の一手を打とうとします。
すなわち、袁術を地獄に落とし、そのうえで劉備に救ってもら
うのです。

計画の成就の前に、袁紹はつい喜びの感情があふれてしまいま
した。

劉備の義兄弟たちの懷疑の眼差しもはや目に入らず、己の悲願
を達成すべく部屋を金網に変え…次回、ボス戦です。

劉備、金網の部屋にて（1）（前書き）

袁紹は劉備が袁術を手にかけるのを見て、喜びのあまり感情のたがが外れてしまいました。

あれほど憎んでいた袁術をようやく罰することができたので、袁紹にとっては当然の反応でしょう。

しかし、袁紹の本当の心を知らない劉備たちにとって、それは残酷な悪魔の表情に映るのです。

劉備、金網の部屋にて（１）

「え、袁紹殿……？」

劉備は変貌した部屋の様子に戸惑い、表の袁紹の背中を撫でていた手を止めた。

表の袁紹は、相変わらず顔を覆ったままひくひくとしゃくり上げている。

弟の死に涙を流し、悲しみに声を引きつらせている。

悲しんでいる……はず。

「く、うつく……く、くくくっ！
くくっ……くふ、ふっあはっ！」

嗚咽かと思われていた声がたがの外れた笑いに変わり、顔を押えていた手が下がっていく。

その向こうにあったのは、裏の袁紹と同じ歡喜の表情だった。

袁紹の表情は、今まで見たことがないくらい解放感に満ちていた。

まるで新しい世界が始まるような、希望と喜悅のみの表情。
悲しいのではなく、嬉さが極まって涙を流していたのだ。

（あれ……？）

劉備は、急速に心が冷えていくのを感じた。
ひどい違和感が、失望とともに一つの答えを導き出していく。

（何だ、結局、この人は……）

劉備は冷めた目をして立ち上がり、今度は袁術ではなく袁紹のために、剣を手にした。

巻き込まれた当初から、劉備はこれが一体何のしわざであるかを考えていた。

途中で少年の幽霊に導かれた辺りまでは、邪悪な妖怪のせいだと思っていた。

しかし、この楼閣の頂上で袁紹の幽霊に出会ったことで、状況は一気に明らかになったかに見えた。

袁紹は、自分がこの怪異の元凶であると告白した。

そのうえで、この悪夢を終わらせるために手を貸してほしいと懇願してきた。

劉備は、一応それに手を貸した。

理由は簡単、それ以外に手がかりがなかったからだ。

（だが、この『袁紹』が本当に袁紹殿である証拠はどこにもない）

『袁紹』は確かに生前の袁紹によく似ていた。

しかし、時々、生前の袁紹からは考えられないような表情、反応を見せることは気になった。

それに、袁紹は生前から隠し事が多く、正直あまり信用できる人物ではなかった。

（この悪夢の世界のことも、聞かなければ教えてくれなかったし。救いを求める者として、こういう態度はどうだろうか？）

それでも劉備は袁紹に手を貸し、この地下牢で袁術を手にかけて。理由は、袁紹の言葉に、態度に、仁の心を感じたから。民の為に、かわいい自分の弟を斬ってくれと頼んだ、その気持ちに心を動かされた。

これだけ民を思える人物なら、救うに値すると。

（だが、それは本当に民のためだったのか？）

袁術を斬ったとたん、二人に割れた袁紹は両方が笑い出した。袁術の死を心から喜ぶがごとく、歡喜に涙まで流して……。自分の弟が殺されたのに、これはいかなものだろうか。

袁紹は、自分たちをただ兄弟の争いに利用しただけだったのか。

（そもそも、『これ』は本当に袁紹殿だったのか？）

そのうえ、袁紹は袁術を地獄に落とすと言いだし、部屋の床を金網に変えた。

この力は明らかに人の力ではない。

それに、血のつながった弟を笑いながら地獄に落とすなんて、人間の心でできる所業か？

結論、この『袁紹』は袁紹のふりをした何かの可能性が高い。

もし本当に袁紹だったとしても、その心根は救うに値しない。袁術同様に、本格的に妖怪になる前に倒すべきだろう。

どちらにしろ、やるべき事は一つ。

民の安全のために、この人でなしを倒せ！

劉備の心中を察したかのように、関羽と張飛が武器を構えて劉備の守りを固める。

裏の袁紹はそれに気づくと、不機嫌そうに眉根を寄せた。

「どうした、これで民は救われるのだろうか？
なのに、なぜ今更わしに刃を向ける」

袁紹の問いに、劉備は静かに答えた。

「袁術はこの世にあつてはなりません、それはあなたのおっしゃる
とおりです。

しかし、あなたもまた、この世にあるべきではありません。
あなたは……おまえは、袁紹殿ではない！！」

「は？」

袁紹は、一瞬何が起こったのか分からなかった。

劉備は一体、何を勘違いしているのか。

自分を救ってくれるのではなかったのか。

戸惑う二人の袁紹に向かって、劉備はさも悲しそうに言い放った。

「残念だったな、おまえの演技はなかなかのものだった。

しかし、実際に袁紹殿と会っている私はだまされぬ！

袁紹殿は、おまえのような冷酷な人間ではない！」

ちよつと聞くと袁紹をほめているようだが、今はそれどころでは

ない。

「袁紹殿は確かに時々人を騙し、汚い手も使っていたが、民を安んじる優しい心を持ったお方だった。

あれほど優しく善政をしける袁紹殿が、肉親を笑って殺せる訳がない！

娼婦の子だの何だのもおまえが噂を利用したに過ぎない。袁紹殿は誇り高く、少し世間知らずで、人望の厚い真の名族であった！」

表の袁紹も、裏の袁紹も、言葉が出なかった。

確かに、自分は生前、周りからそう思われるように全力で努力してきた。

ある意味では、これはその成果ともいえる。

その時は、その嘘が死後自分の首を絞めることになるなど夢にも思わなかったのだ。

「ま、待て、玄德……私は本当に……！」

表の袁紹が弁解しようとしたが、それは関羽に阻まれた。

「問答無用！兄者に仇なす輩はすぐに成敗いたす！！」

動けない表の袁紹に向かって、関羽が偃月刀を振り上げる。

だが、それが振り下ろされる寸前に、裏の袁紹が表の袁紹を突き飛ばした。

偃月刀は二人の袁紹の間で、床にぶつかって火花を散らした。

「おのれ、ならばこちらも容赦はせぬぞ！」

裏の袁紹は憎たらしい顔をして、劉備たちをぎらついた目でにらみつけた。

「おとなしくしておれば、害する気はなかったものを！
裏切り者め、袁術と共に地獄へ落ちよ！！」

言っが早い、裏の袁紹はさっと手を振り下ろした。

劉備、金網の部屋にて（1）（後書き）

この話のボス敵は、袁紹自身です。

劉備が袁紹の真実を理解しきれず、袁紹をボスと認識してしまっただけです。

袁紹は逆上して劉備を地獄に落とそうとしますが…うまくいくでしょうか？

なぜなら劉備はこれまでの二人と違って、生きた人間なのですから。

劉備、金網の部屋にて（2）（前書き）

人は日々、様々なものに理想を抱いて生きています。

そして、その理想とかけ離れた現実を目の当たりにしたとき、「こんなはずじゃなかった」と失望の念を抱きます。結果、友情や愛情が破綻したりひどい場合は殺人のような重大な事件につながることもあるのです。

劉備、金網の部屋にて（２）

さすがの劉備たちも、手を振り下ろす前に攻撃することはできなかった。

できるのは、何が起こるかと思構えることだけだ。

金網の下からは、生臭い熱気が吹き上がってくる。
おそらくこの下に、彼のいう地獄があるのだろう。
どのように底に落とす気なのか……。

しばらく、時間が流れた。

金網は微動だにせず、劉備たちは相変わらずその上に立っていた。

裏の袁紹の顔が青ざめ、冷や汗が流れた。

「な、何だと……こんなはずは……！？」

金網が……地獄への口が、開かないのだ。

地獄に落とせさえすれば一瞬で勝負はつくのに、なぜか劉備たちにはそれができない。

それができなければ、力でも数でも劣る袁紹には勝ち目がないのに。

「あ……あ……」

表の袁紹の顔が、みるみる恐怖に歪んでいく。

さつきとは意味が違ふ涙で濡れた目をして、ぶつぶつと何かをつぶやき始めた。

「た、助けてくれ……わしを助けてくれ……。嫌だ！なぜ、わしがこのような……わ、たしを、守って……くれると、言ったのに……」

袁紹の声に反応したように、壁を覆う血の汚れがざわりとつこめく。

守って、誰か私を守って……

ただただそう願う袁紹の心に、懐かしい面影が浮かび上がる。

表の袁紹はもう、その面影にすぎるしかなかった。そこにいないにも関わらず、悲痛な声でその名を叫んだ。

「が、顔良——っ！！文醜——っ！！」

とたんに、壁の穢れが浮き上がって滝のように流れ出した。赤黒いしぶきをとばしながら、表の袁紹の前に盾となるように集まっていく。

びちびちといやらしい音を立てて、血は二つの塔を形作る。まるで二人の人間が、表の袁紹を守ろうとするかのように。

「な、何だこれは！？」

地獄には落とされなかったものの、予想外の怪異に劉備たちは見ていることしかできなかった。

血の塔は今や、完全に人の形になっていた。表の袁紹が流す涙と連動するように、表面の血が流れ落ちる。

そして、中に生まれたモノの姿が明らかになる。

それは、頭を包帯で包まれた、甲冑をまとった戦士だった。大柄で筋骨隆々で、表の袁紹をかばうように武器を構えていた。一方は大まさかり、一方は槍と弓を携えている。

その姿を見た途端、関羽は小さく唸った。

戦士のまといっている甲冑に、見覚えがあった。

あれは白馬、延津の戦いで本物の顔良と文醜に遭遇したときのこと。

彼らはまさしく、こんな甲冑をまといていた。

関羽が曹操の命令で、顔良と文醜を討ち取った時の話だ。そう、顔良と文醜はもうこの世にいないのだ。

それを証明するように、戦士たちの頭には縦にかち割られたような傷がある。

真つ二つに斬られて少しずれている頭を、包帯で無理やり結びとめている。

頭から走る一文字の傷は、胸で止まらず腹まで伸びていた。

背中を走る寒気とともに、劉備たちは悟った。

これは、怪物なのだ。

関羽に頭から切り下ろされたままの姿で、言葉も表情ももたないそれは、袁紹や袁術と同じような幽霊ですらなかった。

「おお、顔良……文醜……！」

表の袁紹が、嬉しそうにほおを緩める。

この怪物が、本当に顔良と文醜に見えているのだろうか。

いや、こちらの同情を誘うために悪魔が演じているに過ぎない。

劉備は少し心が痛んだが、強い意志でその迷いを振り払った。

目の前にいるのは袁紹ではない。

故人の姿を借り、人を惑わす悪しきモノだ。

ならば、やるべきことは一つ、鋼鉄の意志をもってこの怪物と悪魔を倒すのみ。

「頼むぞ、関羽、張飛！」

劉備の凜とした声に、二人の義兄弟は威勢よく答える。

「おう、任せろ――！」

劉備の命令に従い、二人は躊躇なく怪物に斬りかかる。

恐ろしいほどの力をこめた二つの刃が、生まれたての怪物に迫った。

裏の袁紹は、表の袁紹が生み出した怪物に少しの希望を見出した。

これで数の不利はなくなった。

関羽と張飛がいかに強いとはいえ、四人で一人を集中攻撃すればどうにかなるかもしれない。

それに、こちらは死人と怪物、向こうは生身だ。

「よし、一人ずつ……必ず地獄に送ってやるぞ！」

裏の袁紹と表の袁紹、それに顔良もどきと文醜もどきがそろって武器を構える。

もはや、この怒りを止めることはできない。

ここまでして真実を明かした自分を踏みつけにした劉備を、許すことなどできない。

袁紹の胸の中は、裏切られた思いでいっぱいだった。そしてその怒りのままに、劉備たちに斬りかかった。

まずは顔良もどきが関羽にまさかりを振り下ろし、文醜もどきは張飛に向かう。

二人の袁紹はその隙を突いて、張飛に襲い掛かる。

劉備を先に倒そうとは思わなかった。

劉備は自分から顔良と文醜を奪って、悲しみのうちに死なせたから。

劉備にも、同じ悲しみを味わわせてやる！！

それに、劉備なら死角から攻撃されても他の二人ほど大したことにはならない。

まずは張飛から倒し、次に関羽を倒し、最後に劉備の息の根を止める。

それが袁紹の作戦だった。

しかし……力の差はあまりにも残酷だった。

一斉に打ちかかった文醜もどきと袁紹二人の刃は、一瞬にして弾かれた。

「ぐっ……！！」

文醜もどきはともかく、袁紹の力ではすぐに体勢を立て直すこともできない。

そうしているうちに、顔良もどきは早くも関羽に追い込まれている。

（ああっ顔良……！）

袁紹の脳裏に、関羽に討ち取られる顔良の姿が浮かぶ。

それをなぞるように、関羽が顔良もどきに向かって大上段に偃月刀を構える。

袁紹の背筋に、寒気が走った。

まさか、もう一度顔良を奪われる……？
しかも今度は、私の目の前で……？

裏の袁紹が止めに入る間もなく、関羽は偃月刀を振り下ろした。次の瞬間、袁紹の頭にかち割られるような痛みが走った。

劉備と金網の部屋にて（２）（後書き）

袁紹と劉備は、お互いに失望と怒りをぶつけて刃を交えます。

劉備編ももうすぐ決着ですが、長々とお読みいただきありがとうございます。
ございました。

劉備編はどうしても登場人物が多いため、話が長くなってしまいました。次の章はもう少し短めにまとめたいと思っています。

袁紹、深淵の地下牢にて（前書き）

劉備たちを地獄に落とせなかった袁紹は、自分を守るために強力な怪物を生み出して劉備たちを倒そうとします。

しかし、それは結果として袁紹自身をさらに傷つけることになってしまいました。

もはや劉備は袁紹を助けてはくれません。

袁紹は、劉備の純粹すぎる刃から逃れられるのでしょうか。

袁紹く深淵の地下牢にて

顔良もどきの腕から、血がほとばしった。
頭から切り下ろされては、いなかった。

一瞬の意識が遠のくような頭痛に耐えて、裏の袁紹はどうにか視界を取り戻した。

すぐ側には、劉備が手にした二本の刃。

しかし、劉備の視線は裏の袁紹から外れてあさつての方向を向いていた。

「……嘘でしょう？」

なぜ、こんな……」

劉備の視線の先に気づいて、裏の袁紹は戦慄した。

そこには、表の袁紹が横たわっていた。

刃を振り下ろした関羽自身も、驚愕して動きを止めていた。

関羽が斬ったのは、顔良もどきではなく、それをかばって飛び込んだ表の袁紹だったのだ。

表の袁紹の体は、頭から真つ二つに割られていた。

頭のとっぺんから腹まで届くような傷を負い、血だまりの中に倒れ伏している。

あの時の……関羽に打ち取られた顔良と同じように。

劉備たちは、しばらく目をしばたいて攻撃の手を止めていた。

その隙に、裏の袁紹は素早く身を翻して部屋から逃げ出した。
表の袁紹が行動不能になった今、もはや自分たちは万に一つの勝ち目もない。

ならば、できることはただ一つ。

表の袁紹が復活するまで逃げ切って、劉備を強制的にこの世界から追い出すしかない。

裏の袁紹は苦渋の決断を下し、二人の愛しい怪物を背にした。

（すまぬ、表よ……。

私はまた今度も、あの二人を助けてやれぬ！）

返事はなかったが、もはや言葉は必要なかった。
元は一つだった魂を通じて、裏の袁紹にも表の感情が流れ込んでくる。

ごめんなさい。

表の袁紹は、謝っていた。

私のために死なせてしまつて、ごめんなさい。

こんな生きること許されない私のために、命を捨てさせてごめんなさい。

私を守るために関羽に斬られた、愛しい人たち。

表の袁紹は、絶望しているのだ。

劉備は自分を救ってくれなかった。

つまり、自分は救世主にも救ってもらえない人間だと思つてしま

ったのだ。

だから、せめて今度は自分が顔良の盾になろうと、関羽の前に飛び込んだのだ。

自分を守ってもらうために、あの二人を呼び出したことも忘れて。

裏の袁紹には、その感情がたまらなく悲しかった。そして、悔しかった。

だが、それでも自分には逃げることしかできないのだ。

裏の袁紹と表の袁紹は、二人で一人である。

そのため、どちらかが欠けているとできることは限られてしまう。

この世界の管理も、その一例だ。

この世界の地形を変えるには、二人の袁紹が意志を合わせなければならぬ。

裏の袁紹一人では、地形を変えて劉備たちを閉じ込めることができないのだ。

世界そのものを一旦消去して、強制的に現世に送り返すこともできない。

怪物を生み出す力も、一人では心もとない。

怪物は、袁紹の暗い感情の力から生まれる。

しかし、袁紹も人間の魂であるため力には限りがある。

折しも表の袁紹が顔良もどきと文醜もどきのために渾身の力を使

ってしまったため、もうほとんど力が残っていなかった。

（このままではならぬ！このままでは……！！）

地下から地上に至る道は一本道で、地形を変えなければ劉備を迷わせようがない。

それに、劉備たちが怪物をことごとく倒してしまっているため、新しく生まなければ戦力がない。

怪物を制御できず、襲われてしまう表の袁紹を守るには仕方がなかったが……。

このままでは、裏の自分が発見されて斬られるのも時間の問題だろう。

裏の袁紹は齒がゆさを噛みしめながら、とにかくできることをした。

楼閣の入り口を現世につなげて、劉備たちの出口を作る。

実体すらないか弱い怪物でも、少しでも脅しになればと地下からの出口に仕掛けておく。

そして……劉備たちから少しでも距離を置くように、楼閣の頂上に向かって駆け上がる。

そこには、袁紹が一番大切にしている存在があった。

いくら時間を稼いでも、表の袁紹の復活に合う保証はない。この世界のどこにいても、劉備に見つかる危険は避けられない。ならば、せめて……自分の心が最も安らぐ場所にいたかった。

「母上……！」

悪夢に怯える子供のようにつぶやいて、裏の袁紹は駆けた。

金網の牢で、劉備たちは早くも目の前の敵を倒して一息ついていた。

顔良もどきと文醜もどきは、倒れてしばらくすると溶けるように消えてしまった。

「ふう、全く……あんなもんを呼び出すなんて、趣味の悪い奴だぜ！」

張飛はそう言って毒づいたが、劉備は再び疑いを抱いていた。

（まさか、こちらは本物の袁紹殿だった……？）

表の袁紹が顔良もどきをかばった時、劉備は胸が裂かれる思いだった。

人を欺くだけの妖魔に、こんなことができるものか。

そして気が付いたら、血塗られた方の袁紹がいなくなっていた。その状況から、劉備は新たな『真実』に思い当たった。

（こちらは本物の袁紹殿で、あの血塗られた方が偽物？
そして、本物の袁紹殿を利用し、操っていた？）

そう考えれば、全てつじつまが合う。

そんな劉備の心中を読んだように、関羽が告げる。

「兄者、あの血塗られた魔物を追いましょう！

奴の行く先は、分かっています。

先ほど楼閣の頂上で袁紹が守ろうとしていた良からぬ気配の主…

…おそらくあれが、妖魔の親玉が大事なものであろう」

それを聞くと、劉備は力強くうなずいた。

確かに、楼閣の頂上で関羽がその存在に気付いた時、袁紹はそれに触れられるのを嫌がっていた。

それを考えると、あれが妖魔の親玉である可能性は高い。

「よし、楼閣の頂上に向かうぞ！」

今度こそ、『本物の袁紹』のために妖魔の息の根を止めるのだ。

劉備たちは、義心に満ちた刃を握り直し、楼閣の頂上へと駆け出した。

袁紹、深淵の地下牢にて（後書き）

表の袁紹が行動不能になったことで、裏の袁紹は徹底的に追い詰められていきます。

さらに、裏の袁紹の必死の努力もむなしく、劉備たちは楼閣の頂上へ向かいます。

楼閣の頂上には、袁紹の何があるのでしょうか。
次回、劉備と袁紹の決着です。

劉備、愛惜の館にて（7）（前書き）

劉備編もいよいよ終盤です。

劉備を支持する方々には申し訳ないシナリオでしたが、これが私
の中での袁紹と劉備の関係です。

追いつめられた楼閣の頂上で、裏の袁紹は再び劉備と対峙します。
噛み合わせぬ二人の結末を、ご覧ください。

劉備く愛惜の館にて（7）

地下の道は、相変わらずの一本道で怪物もいなかった。
もはや劉備たちを阻むものは何もない。

しかし地上に出たとたん、新たな怪異が劉備たちに襲い掛かった。
来た時からこの部屋にあった、赤ん坊くらいの大きさの黒い影…
…それがもこりと盛り上がり、わらわらと集まってきたのだ。

父上はどこ？
母上はどこ？

舌足らずなつぶやき声が、はつきりと聞こえる。
無数の小さな影は、人恋しいように劉備たちにまとわりついてきた。

「こんにやろうー!!」

張飛が蛇矛を振るったが、傷をつけることはできなかった。
蛇矛は影に当たっても、空気と同じようにすり抜けてしまうのだ。

「慌てるな、張飛。
これは……ただのこけおどしに過ぎん！」

劉備が凜とした声で、張飛の混乱を鎮める。

この黒い影は、武器では傷つけられない。
それどころか、劉備たち自身の体すらすり抜けてしまっている。

つまりこの怪物は実体を持たず、こちらを攻撃することはない。それに気づいた劉備たちは、臆することなく影の群れをすり抜けて部屋を出た。

途中、楼閣の門が開いているのを見たが、あえて上への階段に向かった。

わざわざ逃げ道を作つてあるということは、妖魔は劉備たちを恐れている。

つまり、倒すなら今がチャンスだと教えてくれているようなものだ。

それを見逃す劉備たちではない。

「今こそ、人に仇なす妖魔を討つ！」

劉備の決意をこめた声が霧の中にこだまする。

ただただ純粹に民を救う志を胸に、劉備たちは頂上の部屋の扉を蹴破った。

裏の袁紹は、疲労困憊の体を休めていた。背中から、安らげる気配が伝わってくる。

「母上……」

裏の袁紹は、天蓋つきの大きなベッドにもたれていた。

赤茶けたカーテンの間から、時々差し出される指がほおを撫でてくれる。

天蓋の四方についた飾りが、赤子をあやすようにゆらゆらと揺

れる。

そして、袁紹が生前から何よりも欲しかった声が聞こえる。

「イトしい……私の、本初……」

覚えてもいない記憶の中から、それと思しきかけただけをつなげたような……。

いくつもの美しい声が混じり合い、それが風化したようなかすれた声。

だが、そこには確かに袁紹への愛がこもっていた。

袁紹は、そこにいる愛しい人に問う。

「母上、本初は……生まれてきてはいけなかったのでしょうか？」

返答は、なかった。

戸惑う愛しい人を安心させるために、袁紹は一人で言葉を続ける。

「私は、どのような生まれの人間であろうと、生まれることに罪はないと思っております。

母上が私を宿し、生んでくれたことは決して罪ではありません。

だから私は……母上に応えるために、立派に生きようと努力してきました」

袁紹の声には、深い悲しみがにじみ出ていた。

「しかし、民があがめる救世主は、私を許してくれませんでした。仁の人として名高い者が、民のために私を排除しようとするのです。」

私は……それほど悪いことをしたのでしょうか？」

相変わらず、返答はない。

袁紹はそこで一息ついて、ため息とともに続けた。

「それでも、私は私という存在を否定したくはありません。私をこの世に生んでくれた、母上を罪人にしないために。だから私は……たとえ天に逆らうことになるうと、最後まで抗い続けます。愚かな息子を、お許しください……」

その言葉が終わるとほぼ同時に、扉が豪快に吹き飛んだ。眼前には、無情な刃をぎらつかせた処刑人が佇んでいた。

「追い詰めたぞ、妖魔め！」

たちまち、関羽と張飛が両方から裏の袁紹を囲む。

劉備は両手に持った剣を裏の袁紹に向け、慎重な足取りで歩み寄ってきた。

「私は、おまえに騙されて袁紹殿を傷つけてしまった。人の心を弄ぶおまえのその性根には、虫唾が走る！だが、その悪行もここで終わりだ！」

今度はまたどんな勘違いをしているのか……。しかし、袁紹はもはやそれを解こうとは思わなかった。

この男に私の話は通じない。

ならば、せめて一番大切なものを守って果てるまでだ。

表の袁紹がそうしたように、裏の自分が一番愛する者にこの身を捧げる。

ちらりと横に目を走らせれば、関羽はすでにベッドの中に目を向けている。

（母上を、貴様の手にかけさせはしない！！）

裏の袁紹は覚悟を決めると、挑発的な笑みを浮かべて立ち上がった。

「くつくつく……やはり貴様も、公孫？と同じか。
少しはましかと思っていたが買いかぶりだったようだな！」

とたんに、劉備の顔色が変わる。
こいつらの気を引くには、公孫？の名前を出すのが手っ取り早い。
役に立たない男ではあったが、あれでも劉備とは親しかったのだ。

「なぜ、おまえが公孫？殿の名を……公孫？殿に、何かしたのか！
？」

裏の袁紹は、嘲笑の顔で答えた。

「……奴の霊に会い、地獄に落とした」

劉備の顔が、面白いように怒りで歪んでいく。
関羽と張飛ももう、ベッドの方を見てはいなかった。

これでいい。

その視線を二度と放さぬように、袁紹は冷たく言葉を続ける。

「奴は、貴様と同じように、わしの話を聞こうとしなかった。そして、問答無用でわしに斬りかかってきた。ゆえに、わしは己を守るために奴を地獄に落とした」

劉備たち相手に、事実以外を話す必要はない。

今は何を言っても、怒りを増すことしかないのだから。

「て、てめえ……よくも公孫？を！」

そうだ、てめえは生きてる間から公孫？を邪魔だと思ってた。結局、てめえの私怨で地獄に落としたんだろうが……！」

張飛が、眉間に青筋を浮かべて叫ぶ。

もはや、目の前にいるのが袁紹なのかそうでないのかも分からなくなっている。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

すぐそばで、関羽が静かに偃月刀を振り上げる。

裏の袁紹は冷笑を浮かべたまま、関羽の方を向いた。

「貴様の首をもつて、公孫？殿の霊をお慰め申す！」

これでいい。

裏の袁紹は今一度、顔良と文醜に思いをはせた。

自分は、命を捧げてくれた彼らの期待に応えてやれなかった。だが、せめて同じ痛みを味わってやることくらいはできる。

顔良もどきと文醜もどき、それに表の自分の血が、偃月刀の刃からしたたる。

袁紹は、逃げなかった。

「言い訳はせぬ！」

その言葉を合図に、偃月刀がぶんと風を切る。

袁紹が望んだとおり、頭から一文字に。

痛みらしきものを感じたのは、ほんの一瞬。

それに何かを感じる間もなく、袁紹の意識は闇に落ちた。

劉備の愛惜の館にて（7）（後書き）

裏の袁紹もまた、守りたいもののために己を捧げます。

裏の袁紹が楼閣の頂上で守っていたもの…それが、他の館ではボス敵に相当する母の幻影でした。ただし、この母に対する袁紹の感情は他の館とは異なりますが。

また、劉備が誤解の果てに袁紹を攻撃してしまう結末は、公孫？編と重なります。袁紹が勝つか、ねじ伏せられてしまうかの違いはありますが。

次回、劉備編最終話です。

救いを失った袁紹は、この先何を求めるのでしょうか。

劉備、徐州への街道にて（前書き）

劉備編も、最終話です。

結局、劉備も袁紹を救うことはできませんでした。

貧しい人々の旗印である劉備は、裕福な名家の中で苦しんできた袁紹の境遇が理解できなかったのです。

無慈悲な刃を身に受けて、袁紹は何を思っているのでしょうか。

劉備、徐州への街道にて

気が付くと、劉備たちは元いた徐南の街道に戻っていた。

温かい太陽の光がさんと降り注ぎ、さわやかな風が吹き抜ける。

近くで、木につながれた馬たちが主人に気づいていないていた。

「これは……戻って来られたのか？」

劉備は、拍子抜けしたように周りを見回した。

周囲は間違はなく、霧に包まれる前にいた街道だ。

穏やかで、明るくて、先ほどまでの悪夢の気配はみじんも感じられない。

（私は、夢でも見ていたのだろうか？）

だが、あの悪夢が確かにあった証拠に、劉備たちの武器は赤黒い血でべっとりと汚れていた。

霧に巻かれる前は、清らかな白銀の刃だったのに。

しかし、あの恐ろしい世界は、もうどこにも感じられなかった。終わったのだろうか。

「帰ろう……劉表殿の元へ」

劉備は二人の義兄弟と共に、再び馬に乗って駆け出した。しかし、いくらもういかないうちに、馬の頭を返してつぶやいた。

「悪いが、少し寄り道をするぞ。
確かめたいことがある」

そう言うや否や、劉備は荊州ではなく別の州へと通じる道に馬の頭を向けていた。

二人の義兄弟も、無言でその後に続いた。

裏の袁紹が意識を取り戻すと、表の袁紹が悲痛な顔でのぞきこんでいた。

側には、地獄からきた小鬼もいた。

「旦那さん、ずいぶん無理しなさったなあ」

小鬼は、すまなさそうに言った。

「まあ、僕が教えてへんかったのも悪いんやけど……生きた人間は、直接地獄に落とせへんねん。

元から死んだ人間か、あの世界で殺してからでないか。

正直……生きた人間が介入することは想定してへんかったよってに」

やはりそうかと、裏の袁紹はまだはつきりしない頭で思った。

頭は、まだずきずきと痛む。

しかし、すぐに意識を失ったせいも、殺される時の苦痛はそうでもなかった。

顔良と文醜も、案外苦しまずに逝ったのかもしれない。

「これから……どうするのだ？」

表の袁紹が、沈んだ声でつぶやく。

劉備に救ってもらえなかった今、彼以外に自分を救ってくれそうな人間に思い当たらない。

いや、救ってもらえそうでかつ巻き込んでもよさそうな人間がない。

表の袁紹の問いには答えず、裏の袁紹は思い出したように聞いた。

「袁術はどうした？」

その瞬間、表の袁紹は悔しそうに唇を噛んだ。

「逃げた……我々が二人とも気を失っている隙に」

やはりそうかと、裏の袁紹も唇を噛んだ。

袁術もすでに死んでいる以上、首を切ってもいずれ再生して動けるようになる。

二人の袁紹が同時に意識を失うと、あの悪夢の世界は消滅する。おかげで劉備たちが母上を傷つけるのは防げたが……

二人の袁紹が復活する前に袁術の方が早く復活してしまい、牢獄が消滅していたためにそのまま逃げてしまったようだ。

「先に、あいつだけでも地獄に落としておくべきだったな」

表の袁紹がつぶやくと、裏の袁紹は憎らしげに言った。

「ともかく、次にやることは決まったな。

袁術を追い、必ず地獄に落とす！

私が救われず、袁術が救われることだけは、あつてはならん！！」

一瞬で、意見が一致した。

自分が救われることは、もうあまり望めなくなってきた。
ならばせめて、自分が現世にいられる間に恨みを果たす。

新たな目標を見つけて起き上がった袁紹を、小鬼は頼もしげな目で見ていた。

「旦那さん、最初にか弱い人やと思ったけど……何や違ったみたいやな。

生きた人間相手に、あれだけやれるなら安心や。

旦那さんなら、地獄で……」

小鬼は、袁紹には聞こえないようにぼそりとつぶやいた。

「ええ獄卒になれますわ」

不穏な声には全く気付かず、袁紹は袁術の魂を追ってさらに南へと浮遊していった。

袁術だけは許さない。

悪夢の元凶を追う袁紹の魂は、今までよりずっと黒く燃え上がっていた。

「やあやあ玄德殿、よくおいでくださいました」

徐州のはずれ、集落から離れた一軒家で、劉備は目的の人物と再会していた。

「お久しぶりです、鄭玄殿」

相手の名は鄭玄、元は袁紹と親しかった人物である。

劉備は以前曹操に攻められた時、この鄭玄に頼んで袁紹に助けを求めたことがある。

今回再び鄭玄を訪ねたのも、袁紹のことがどうしても頭に引っかって離れなかったからだ。

袁紹が娼婦の子だという話は、自分はとても信じられない。だが、否定するにも証拠はない。

劉備は鄭玄に、その証拠を求めたかった。

鄭玄は古くから袁紹と親しいため、その辺りの事情には詳しいはずだ。

ざわつく胸を抑えて、劉備はそれとなく鄭玄に尋ねた。

「ところで鄭玄殿。

私は袁紹殿が娼婦の子だという噂を聞いたのですが、あれは本当なのでしょうか？」

それを聞くと、鄭玄は妙にしんみりした顔になった。

劉備たちの喉が、ごくりと鳴る。

「おぬしら、どこでそれを……まあよい。
あれは、本当の話じゃよ」

劉備は静かに、固まった。

「本人が生きておればわしも遠慮はしようが、今更隠すことでもあるまい。

あの男は堂々と生きておったようじゃが、実際は袁家の中でずいぶん苦労しておったのじゃよ。

特に、幼い頃はそれがもとでひどい虐待にあっていた……」

それ以上は、聞いていられなかった。

「申し訳ありません、少し急いでいますので……」

いたたまれずに話を打ち切って、劉備たちは逃げるように館を出た。

違う、と一言言ってくればよかった。

悪い冗談だ、と笑ってくればよかった。

不名誉な真実を断腸の思いで明かして助けを求めた袁紹に、自分たちは何をした？

だが、それでも劉備は前を見つめていた。

自分は、天下万民を救わねばならない。

一度や二度の失敗で、立ち止まってはられない。

これまで、身を寄せては滅んでしまった数多の恩人に顔向けできない。

（公孫？と、そして袁紹も含まれる）

「行こう、私たちは私たちの道を！」

劉備は迷いを振り切るかのように、荊州に向かって馬をとばした。しかし、その刃は救世主にふさわしからぬ汚れた血に染まっていた。

未来に向かってひた走る劉備たちを、明るだけの空っぽの太陽が照らしていた。

劉備、徐州への街道にて（後書き）

袁紹の目標が変わりました。

救ってもらえる希望が少なくなった代わりに、袁紹は袁術への復讐という新たな目標を見つけ出します。

次は袁紹ではなく、袁術に近かった人物を中心に話が進みます。
これからも奮ってお読みください。

孫策（寿春の麋村にて（前書き）

袁紹の悪夢は救われることなく、目的すらも失いかけて新章開始です。

今回は袁紹ではなく袁術に近い人物、孫策が悪夢に侵入してきます。

孫策・伯符 ソンサク ハクフ 生年175年 没年200年

呉の皇帝となった孫権の兄。父孫堅が没してから一時的に袁術に身を寄せていたが、独立して江東に大勢力を築き上げる。袁術が皇帝を僭称すると、それを非難して袁術の敵となった。

孫策と寿春の糜村にて

私の幸せのために、あなたはいてはいけない。

私が救われるために、あなたはいてはいけない。

私が救われなくても……あなたはいてはいけない。

私のいる世界に、あなたはいてはいけない。

私があなたを拒絶した訳ではなかった。

それは、逆。

あなたは初めから、私がいることを許さなかった。

だが、私は魂を割つてでも生きる道にすがりついた。

大丈夫、私が消えなくても、解決の方法はあるじゃないか。

ただ、あなたが、いなくなればいい。

柔らかい日差しの中、男は一人木陰に佇んでいた。

心地よい微風が、体を通り抜けていく。

風が避けていかなくなつて、どのくらい経つだろう？

眼前には、主を失つて朽ちた家々が並んでいた。

男の姿を目に留める者は、誰もいない。

もっとも、人がいても自分に気づくのはごく一部ではあるが。

「ここでは、何かが見つかるだろうか……」

小さなため息をついて、男は肩を落とした。

男は、探していた。

この冗長で退屈な日々を、終わらせるための手がかりを。

自分には、行くべき場所も留まるべき場所もなかった。

やるべきことを聞こうにも、生きた人間のほとんどは自分を感知できない。

生前厚い友情を結んで共に歩んできた者も、今は全く無力だった。

「周瑜……太史慈……」

男は、木枯らしのような寂しい声で友の名を呼んだ。

死んでからしばらくは、もつと激しく呼び続けた。

しかし、誰も気づいてはくれなかった。

たった一つの命を落とした自分は、もはや生者の世界に干渉することを許されなかった。

自分は、死後の世界などというものを信じてはいなかった。

生きている今、目に見え、感じられるものだけが全てだと思っていた。

だからあの時、あの老人を……。

よもや、それが死後の道を閉ざしてしまうなど、夢にも思っていなかった。

男は、死者の気配も生者の気配もない村を、それでも歩き回ってみることにした。

とにかく、男には時間が余りすぎていた。

何もすることがなく、何をしたらよいかも分からない。

一見楽に見えるようだが、実はとんでもない苦痛だ。

特に、他者と交わることができない一人ぼっちの死者にとって
は。

暇つぶしすらろくにできないこの状況では、自我を保つのすら難しい。

男は、自分がすり減ってしまわないように、常に己を確認する必要があった。

「俺の名は、孫策。

俺は、冥府への道を探さねばならない」

しかし、つぶやくだけでは何も解決しない。

考えた末、孫策は過去に思い出のある地を巡ることにした。

記憶を保つことで、自分を保つために。

そして、この怠惰な拷問を終わらせる手がかりを探すために。

後者の目標は、容易には果たせそうにないが。

それに、孫策はじっとしているのが嫌いだった。

元々、血沸き肉躍るような興奮の中で生きるのが好きな男だった。

江東の小霸王。

生前、世間から与えられたその呼び名が示す通りに。

だから、孫策は少しでも刺激が欲しかった。

それゆえに死した場所を去り、ずっと旅をして来たのだが……望む刺激は、なかなか手に入らなかった。

当然だ、そこで何か起こっても自分は傍観者にしかなれないのだから。

「……ふう、この村にも、何もないか」

ひとしきり村を歩き回って、孫策はため息をついた。

元々、ここは刺激のない場所だ。

だってここは、孫策がまだ袁術の下にいた頃、とつくに廃村になってしまったのだから。

袁術の暴政の餌食になって、全てを吸い尽くされた村だ。

その時のことは、孫策もよく覚えている。

袁術……あれはひどい男だった。

昔を思い出していると、不意に袁術の声が聞こえたような気がした。

「……俺も、弱くなったな。」

よりにもよって、あんな男の声が……」

孫策が感傷にひたっていると、今度ははっきりと聞こえた。

「や、やめろ、助けてくれええ!!」

俺は、皇帝だぞー！！」

「！？」

幻聴などではない、確かに聞こえたのだ。

孫策は素早く身を翻し、声のした方に走った。

そこには、確かに袁術がいた。

だが、袁術の置かれている状況を見て、孫策は不謹慎ながらも目を輝かせた。

袁術は、真っ白な霧の渦に追われていた。

明らかに自然のものではない、何らかの意思を持った霧だ。

その得体の知れない霧は、魔物が手を伸ばすように袁術を捕らえようとしていた。

「こ、これは……！」

孫策は、胸が高鳴るのを抑えきれなかった。

袁術は、孫策より先に死んでいるはずだ。

ということは、袁術も何らかの原因で冥界に行けないのだろう。

これは、手がかりにつながるかもしれない。

それに、あの魔物のような霧は、刺激的だ。

死んでからずっと刺激に飢えていた孫策にとって、喉から手が出るような刺激的な事件だ。

これは、行かない手はない！

即座に決断を下して、孫策は袁術のもとへ走りこんだ。

袁術の目が、一瞬孫策の姿を捉える。

しかし、その姿はすぐに霧の中に引きずり込まれた。

あっという間に、袁術の姿は純白に塗りつぶされて見えなくなる。

「逃がすかつ!!」

孫策も、やや遅れて霧の中に飛び込んだ。

少し時間が経ってその霧が晴れた時、袁術と孫策の姿はどこにも見当たらなかった。

孫策と寿春の糜村にて（後書き）

今回登場した孫策は、袁紹より先に死んだ人間です。

袁紹とは別の原因で冥界に行けなくなり、その解決法を探して彷徨ううちに袁術を発見し、悪夢に足を踏み入れました。

孫策は袁術のことをよく知っていますが、袁紹とは顔を合わせたこともありません。袁術を通じて二人が巡り合った時、孫策は袁紹に何を見るのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4661w/>

袁紹的悪夢行

2012年1月10日13時56分発行